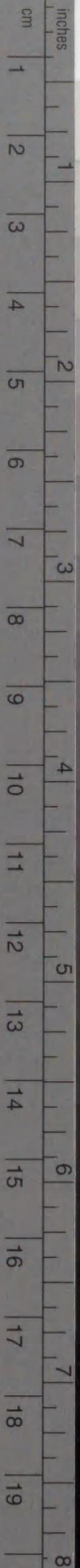


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



618
89

618-89
1200501537016



西龜正夫著

滿州國中心支那地理

東京 厚生閣書店





西龜正夫著

滿州國中心支那地理

東京 厚生閣書店



618-89

自序

近世日本の全國民に最も偉大なる感銘を與へたものは、實に廟行鎮に於ける爆彈三勇士の事蹟であつた。

正に炸裂せんとする爆藥筒を抱いて敵前に突進する時、三人の魂は已にその肉體をはなれ、後方の高處から見下しつゝ、自己の肉體を驅使して居たであらう。げにも崇高なる神の姿！

而もそれは獨りこの三人のみでなく、全日本の青年の凡てが有する共通の精神である。それがたま／＼三勇士によつて最も明瞭に表はされたに過ぎぬ。それは全國に於ける熱狂的讚歎の聲がこれを證明する。

老將軍達は口を揃へて、『現代青年の浮薄な氣風を見て、あれで戦争が出来るかと竊かに心配して居たが、やつて見ると大違ひ、日清・日露の兩役よりも遙かに勝つた勇敢な戦争が出来た』と。然り現代の青年は確かに強い。

そしてその強さは誰が養つたか。國體の尊嚴は別として、父の示範、母の激勵、而して又傳統の力、歴史の力であることは云ふ迄もないが、教育者、殊に小學校教師の偉大なる感化力を

見逃がすことは出来ないであらう。

翻つて考へるに、戦争に表はれたこの三勇士の魂は、平和の日本にとっては如何に發現せねばならぬであらうか。

將來の日本は滿蒙を忘れ支那を度外視して進むことは出来ない。わが生命線はアジャ大陸の一角にある。これを少數の外交家や學者や、乃至支那通なるものゝ手に委ねて置いて果して何が出来るか。

從來の日本は正にそれであつた。國民自らの大問題を國民自ら知る處がなかつた。實に滿蒙問題・支那問題は、普ねく國民全體の常識の中に明瞭適切な知識となり對策となつて織り込まれなくてはならぬ。それではなくては眞の解決は出来ぬ。眞の日本の發展は望めぬ。

支那は世界の謎である。全く不可解の國である。併しながら判らぬとて抛つて置けない。屢々面倒をかける厄介な隣人ではあるが、併し、經濟上からは極めて密接な、切つても切れない縁のつながる隣人である。

これを徹底的に理解することは、必要缺くべからざることであり、又極めて困難なことであるから、先づ小學兒童の頭に、強く確かな精しい知識として養つて行かなくてはならない。

近く小學校の地理教科書も、この意味に於て根本的に改訂せられんとするやの噂がある。本

書の生れた理由も全くこゝに存する。

先づ小學校教師から正しい支那の知識を養ひ、然る後第二の國民にこれを移して行かねばならぬ。かくてこそ將來の日本を双肩に擔つて、大陸の一角にその生命線を守る時、無数の爆彈三勇士が雲霞の如く限りなく、平和の姿に於てあらはれて來ることであらう。

その時われ等は教育者の力の偉大さに、再び舌を卷かんことを期待するものである。

昭和七年五月

著者

凡 例

- 一 本書は主として小中學校教師の教授參考用として編纂したものである。
- 二 故に徒らに興味をそゝつたり、空虚な空宣傳に終ることを避け、正しい學術的根據に立つて、詐らざる真相を傳へんことを期した。
- 三 各章節の始めに要説として大字で記した部分は、大體小學校の教科書としてよい程度の内容を盛つたものである。
- 四 寫眞は出来るだけ大きく出した。これは教壇の周圍に兒童を集めて瞥見せしめることの出来る様にと考へたからである。
- 五 事實の變動は刻々として已まない。故に校正中にもその改め得られる限りは修正を施したが、その後の變動は如何ともすることが出来なかつた。これは再版以後に於て逐次訂正を怠らない積りである。

目 次

| | |
|-----------------|----|
| 緒 論 支那とは何ぞや | 三 |
| 前篇 滿洲國 | 七 |
| 第一章 建國の事情 | 七 |
| 第一節 舊政權の崩壞 | 七 |
| 滿洲實質の變化……………七 | |
| 支那本部との關係……………八 | |
| 張氏の政治……………二 | |
| 滿洲 | 七 |
| 事變……………三 | |
| 第二節 新政權の樹立 | 一二 |
| 事變後の滿洲……………三 | |
| 錦州政權……………三 | |
| 民衆の要望……………四 | |
| 第三節 建國の經過 | 一五 |
| 要説……………一五 | |
| 獨立の宣言……………一五 | |
| 建國式……………一六 | |
| 國都・國號・國旗……………一九 | |
| 新しい樂土……………一九 | |

第二章 日本との關係……………二

第一節 わが特殊權益……………二

 要説……………三 日本の目的……………三 條約上の權利……………三 經濟關係……………三

 投資額……………三 滿鐵……………四 わが生命線……………六

第二節 滿洲事變……………二七

 要説……………六 遠因……………六 近因……………三 經過……………三

第三節 今後の日滿關係……………三五

 要説……………三 政治……………三 食料問題……………三 原料問題……………三 燃料問題……………三

 …三 移民問題……………三 貿易關係……………四〇

第三章 國情概觀……………四一

 要説……………四 位置……………四 境域……………四 國境……………四 面積……………四 沿革……………四

第四章 地勢及び地體構造……………四七

第一節 概觀……………四七

 要説……………四七 細説……………四七

第二節 起伏……………四八

(一) 山脈……………四九

 大興安嶺……………四九 長白山脈……………四九 小興安嶺……………五一 その他の山脈……………五一

(二) 火山……………五二

 白頭山……………五三 和爾冬吉火山群……………五三

(三) 平野……………五三

 滿洲平野……………五三 其の他の平野……………五三

第三節 水系……………五五

 黑龍江……………五五 遼河……………五五 大凌河……………五五 鴨綠江……………六〇 豆滿江……………六〇

 湖沼……………六〇

第四節 海岸……………六二

 海岸線……………六三 島嶼……………六三

第五節 地質……………六三

 南滿洲……………六三 北滿洲……………六五 遼西區域……………六六

第六節 地體構造……………六六

 構造線……………六六 生成の順序……………六七 地震と溫泉……………六九

第五章 氣候 …… 七七

第一節 概観 …… 七七

要説……七七 氣候の特色……七七 冬……七二 夏……七二 天氣……七三 氣候と農業……七三

第二節 氣温 …… 七三

大連附近……七三 新京附近……七四 北滿洲……七四

第三節 風 …… 七六

氣壓と風向……七六 風力……七六

第四節 濕度と雨 …… 七七

濕度……七七 雨量……七六 降水日數……七九

第五節 特殊現象 …… 七九

霾……七九 光學的現象……八〇

第六章 住民 …… 八二

第一節 種族 …… 八二

要説……八一 先史民族……八一 歴史民族……八三 漢族……八三 ツングース

第七章 生活及び風習 …… 九六

第一節 都市生活 …… 九八

安寧……九八 物價……九八 衛生……九八 娛樂……一〇〇 家庭生活……一〇〇 支那街生活……一〇一

第二節 村落生活 …… 一〇一

衣食……一〇二 住居……一〇二 労働……一〇四

第三節 漢族の風習 …… 一〇六

服裝……一〇六 食物……一〇七 住居……一〇八 結婚……一〇八 葬祭……一〇九 娘々祭……一一一

第二節 人口 …… 八七

族……八五 蒙古族……八六 日鮮族……八六

人口……八七 人口の構成……八八 人口増加……八九 人口密度……九二 分布……九四

第三節 聚落 …… 九四

村落……九五 城廓市……九五 商埠地……九六 洋風都市……九六

第一節 陸運 …… 100

要説……100 道路……103 路上機關……104 鐵道……107 南滿鐵道……
 ……108 東支鐵道……109 奉山鐵道……111 吉長及び吉會線……111 滿
 蒙五鐵道……112 その他の鐵道……113

第二節 水運 …… 112

要説……113 内陸水路……113 海運……114

第三節 航空及び通信 …… 119

航空……119 通信……119

第十一章 政治外交 …… 121

第一節 政治 …… 121

要説……121 國體政體……121 施政の方針……123 政府の組織……123
 地方制度……125

第二節 外交 …… 126

外交方針……126 國際關係……127

第十二章 景觀區分 …… 129

區分の根據……129 遼東半島區……130 遼河流域區……130 遼東山地區……131
 ……133 松花江嫩江區……133 北東山地區……133 遼西區……133 遼河上流區……
 ……133 北部山地區……133 呼倫盆地區……133

第十三章 都邑及名勝 …… 134

第一節 遼東半島區 …… 134

要説……134 大連……134 旅順……141 金州……143 蓋平……144

第二節 遼東山地及北東山地區 …… 144

要説……144 安東……144 本溪湖……146 興京……148 龍井村……148
 延吉……148 琿春……148 寧安……149 依蘭……149

第三節 遼河流域區 …… 149

要説……149 奉天……150 撫順……150 遼陽……150 鞍山……150
 大石橋……150 營口……150 鐵嶺……150 開原……150 四平街……150
 公主嶺……151 鄭家屯……151 通遼……151

第四節 遼西區及遼河上流區 …… 153

要説……153 新民……153 錦州……153 赤峰……153 熱河……155

第五節 第二松花江區及松花江・嫩江區 …… 155

要説……155 新京……155 吉林……156 哈爾濱……157 昂々溪……157

齊々哈爾……二七七 洮南……二七七

第六節 呼倫盆地及北部山地區 ……二七九

 要說……二七九 海拉爾……二七九 滿洲里……二八〇 黑河……二八一

中篇 中國 ……二八三

第一章 國情概觀 ……二八三

 要說……二八三 境域……二八三 面積……二八四 沿革……二八四

第二章 自然地理 ……二八六

第一節 地形 ……二八六

 要說……二八六 山脈……二八六 平野……二八八 海岸……二八八

第二節 水系 ……二八九

 要說……二八九 黃河……二八九 楊子江……二八九 珠江……二九一 湖沼……二九一

第三節 氣候 ……二九一

 要說……二九一 溫度……二九二 風……二九二 雨……二九三

第三章 人類地理 ……二九四

第一節 種族 ……二九四

 要說……二九四 原住民……二九四 漢族……二九四 言語……二九五 宗教……二九五

在留日本人……二九五

第二節 人口 ……二九六

 總數……二九六 增減……二九六 密度及分布……二九六

第三節 民性習俗 ……二九八

 要說……二九八 國民性……二九八 衣食住……二九九

第四節 政治外交 ……三〇〇

 要說……三〇〇 中央政府……三〇一 地方政治……三〇一 軍備……三〇二 財政……三〇二

通貨……三〇三 外交……三〇四

第四章 地人相關景 ……三〇五

第一節 生產業 ……三〇五

要說……三〇五 概觀……三〇六 農業……三〇七 牧養業……三〇九 鑛業……三〇九

工業……三二〇

第二節 商業及交通 …… 三三三

 要説……三三三 貿易……三三三 陸運……三七七 水運……三七七 通信……三三九

第三節 景觀區分 …… 三三九

 要説……三三〇 北部地方……三三〇 中部地方……三三三 南部地方……三三二

第四節 都邑名勝 …… 三三三

 要説……三三三 北部大平原……三三四 山東半島……三五五 黃河中流地方……三七七

 西北部山地……三七七 蒙古高原……三三九 楊子江デルタ……三三九 湖廣盆地……

 ……三五五 四川盆地……三七七 南東海岸地方……三七七 珠江流域……三三六 雲南

 高原……三三六

後篇 邊境及外領 …… 三三九

第一章 外蒙古 …… 三三九

 要説……三三九 政情……三三九 自然地理……三三九 住民……三四一 地人相關景

 ……三四一

第二章 新疆及青海 …… 三四三

 要説……三四三 政情……三四三 自然地理……三四三 住民……三四四 地人相關景

 ……三四四

第三章 西藏 …… 三四六

 要説……三四六 政情……三四六 自然地理……三四六 住民……三四七 地人相關景

 ……三四七

第四章 外領 …… 三四八

 要説……三四八 香港……三四八 澳門……三四八

附 錄

滿洲旅行の栞 …… 二五一

— 目次終 —

| | |
|-------------|-----|
| 滿洲國全圖 | 卷尾 |
| 中國全圖 | 同 |
| 滿洲事變の原因 | 九 |
| わが軍の巡邏 | 一〇 |
| 建國を歡ぶ奉天の群集 | 一四 |
| 建國當日の新京 | 一七 |
| 執政溥儀氏 | 一八 |
| 執政夫人鴻秋妃 | 一八 |
| 滿鐵の汽車 | 二五 |
| 排日資料 | 二九 |
| 滿鐵包圍線圖 | 三三 |
| 奉天城内の戦闘 | 三三 |
| 地勢概観圖 | 三〇 |
| 北滿平野 | 三〇 |
| ハルビン附近の松花江 | 三〇 |
| 深河の溪谷 | 三〇 |
| 天然曹達の堆積せる死湖 | 三〇 |
| 熊岳城温泉 | 三六 |
| 遼河の結氷 | 七五 |
| 大連風系圖 | 七六 |
| 蒙古砂漠 | 七六 |
| 甲板上の山東移民 | 七六 |
| 滿洲人口分布圖 | 七九 |
| 河畔の洗濯 | 一〇三 |
| 農家 | 一〇五 |
| 迷嶺山の娘々祭 | 一〇〇 |
| 蒙古包 | 一一三 |
| 蒙古の村と天幕の内部 | 一一三 |
| 蒙古のラマ廟 | 一一四 |
| 耕地面積圖 | 一一八 |
| 既墾地面積割合の分布 | 一二〇 |
| 農作物分布圖 | 一二五 |
| 大豆畑 | 一二七 |
| 鐵嶺の大豆集積 | 一二六 |
| 大豆生産分布圖 | 一二三 |
| 大豆・豆粕・豆油の輸出 | 一二三 |
| 高粱の刈入れ | 一三三 |
| 小麥分布圖 | 一三五 |
| 鮮人農夫の稻刈 | 一三八 |
| 吉林驛の葉煙草 | 一四〇 |
| 吉林省の森林 | 一四三 |
| 松花江の筏 | 一四六 |
| 滿洲のメリノ | 一五一 |
| コンパイルの放牧 | 一五三 |
| 海洋島の鯨 | 一五七 |
| 魏子窩の鹽田 | 一五九 |
| 鹽田の風車 | 一六二 |
| 鞍山の鐵鑛積込所 | 一六六 |
| 撫順炭田炭累年比較圖 | 一七〇 |
| 撫順地層斷面圖 | 一七一 |
| 撫順炭用途別比較 | 一七三 |
| 撫順の露天掘 | 一七三 |
| 搾油機 | 一八〇 |
| 豆粕の倉庫 | 一八二 |
| 安東の製絲工場 | 一八五 |
| 鞍山製鐵所營業成績 | 一八七 |

| | |
|-------------|---------|
| 鞍山製鐵所 | 一八八 |
| 窯業 | 一九一 |
| 高粱畑と道路 | 二〇一 |
| 川を渉る馬車 | 二〇三 |
| 馬背による運輸 | 二〇五 |
| 大豆の鐵道運輸 | 二〇六 |
| 南滿鐵道主要驛貨物量圖 | 二〇九 |
| 吉敦線の一部 | 二二〇 |
| 夏の松花江 | 二二五 |
| 空中から見た大連港 | 二二六 |
| 大連埠頭の野積場 | 二二七 |
| 葫蘆島灣 | 二二八 |
| 滿洲國景觀區分圖 | 二三〇 |
| 大連大廣場 | 二三五 |
| 大連市街地圖 | 二三六 |
| 大連の油坊 | 二三九 |
| 大連浪速町 | 二四〇 |
| 旅順附近と日露戰蹟地圖 | 二四一 |
| 旅順新市街 | 二四二 |
| 鴨綠江口地圖 | 二四五 |
| 安東驛前通 | 二四六 |
| 本溪湖全景 | 二四七 |
| 奉天浪速町 | 二五一 |
| 奉天市街地圖 | 二五三 |
| 遼陽 | 二五五 |
| 千山の古塔 | 二五五 |
| 營口の漢人街 | 二五八 |
| 通遼の大通 | 二六三 |
| 白塔聳ゆる錦州 | 二六四 |
| 新京附近地圖 | 二六六 |
| 新政廳の出来る杏花村 | 二六七 |
| 長春驛前廣場 | 二六八 |
| 吉林と松花江 | 二七一 |
| ハルビン市街地圖 | 二七三 |
| ハルビン市街 | 二七六 |
| チチハル市街 | 二七八 |
| ハイラル市 | 二八〇 |
| 大平原の耕作 | 二八七 |
| 楊子江口 | 二九〇 |
| 人口密度圖 | 二九七 |
| 支那兵の戦争 | 三〇一 |
| 原始的な揚水法 | 三〇八 |
| 青島の紡績工場 | 三一三 |
| 上海埠頭 | 三一五 |
| 一輪車 | 三一六 |
| 楊子江口地方地圖 | 三二八 |
| 景觀區分圖 | 三三一 |
| 北平の城壁 | 三三五 |
| 天津の碼頭 | 三三六 |
| 張家口の貿易所 | 三三八 |
| 上海島瞰圖 | 三三〇、三三一 |
| 南京中山陵 | 三三三 |
| 上海事變 | 三三三 |
| 市街戰の跡 | 三三四 |
| 漢口埠頭 | 三三六 |
| 福州の蛋民 | 三三六 |
| 廣東 | 三三七 |
| 放牧風景 | 三四〇 |
| 香港 | 三四九 |

〔挿繪及圖版目次了〕

滿洲國中心支那地理

滿洲國中心支那地理

緒論 支那とは何ぞや

嚴密に云へば支那といふ國家は何處にも無い。現在の中國及びその附近の土地には、古來夏・殷・周・秦・漢・晋・唐・宋・元・明・清等が起つたが、支那といふ國は決して起らなかつた。わが國人が普通にこれを支那と呼び、又わが政府で中國即ち中華民國のことを支那共和國と云つたりしたのは、日本人の勝手であつて彼國人は承知しない。彼等の自稱は中華・中國・華夏・中邦等である。

スペインやポルトガルでは China と呼び、フランス人は Chine, イタリア人は China, イギリス人は China と呼んでゐるが、これは古くギリシヤ人が、秦の國名をマライ人や印度人から聞き傳へたのが訛つたものであらうといふ。併し印度では秦よりも以前に Sina といふ名稱が用ひられてゐた證據もあるといふことである。支那といふ文字は脂那・震旦・振旦等の文字と共に佛典中に散見するから、日本人はこれから習つたのかも知れない。併し日本で一般に支

那の名稱が用ひられる様になつたのは明治以後で、それ以前には唐(カラ又はトウ)といふ名稱の方が多く用ひられてゐた。

然らば支那とはどれだけの範圍を指すか、これ甚だ困難な問題である。普通には二十年前まで獨立國として世界列國に認められてゐた清國の全領土を指すのであるが、清國滅亡後にはこれに代る確乎たる國家が出来ないので、現在の支那即ち中華民國と稱する國も、その領域が果して何處までであるかは明確に定義を下すことが出来ない。

それ故に一九二二年のワシントン會議に際して『支那とは何ぞや』といふ問題が起つたが、遂にそれは明確な答辯を得ることなくして有邪無邪の中に葬られてしまつた。而して今日に至つても依然としてこの問題は残つてゐる。げにや清國滅亡後の支那は混沌そのものであつて、中華民國は興つたが南北兩政府の爭霸容易に定まらず、蔣介石の北伐成功して北京政府没落し、南京政權が始めて列國の承認する處となつたのは實に民國十七年のことであつた。而もその後と雖も完全な統一は容易に出来ないで、政府の命を奉じないものに東四省があり閻錫山・馮玉祥等があり、南方には更に廣東政府なるものも出来た。わが全權が國際聯盟に對して『支那は統制ある國家と認め難い』と主張したのも全く當然のことである。

今試に外蒙古は完全な支那の領土かと聞いたならば、誰でも無條件に然りと答へ得ないであらう。西藏もそうであり、雲南の西部も同様である。況や滿蒙の地に至つては最近『完全なる獨立』を宣言して列國にその承認を求めてゐる。たとひ民國政府が何と云はうとも、又形式上列國の承認が後れようとも、これが支那の領土であるとは何人も首肯することの出来ない確乎たる事實である。

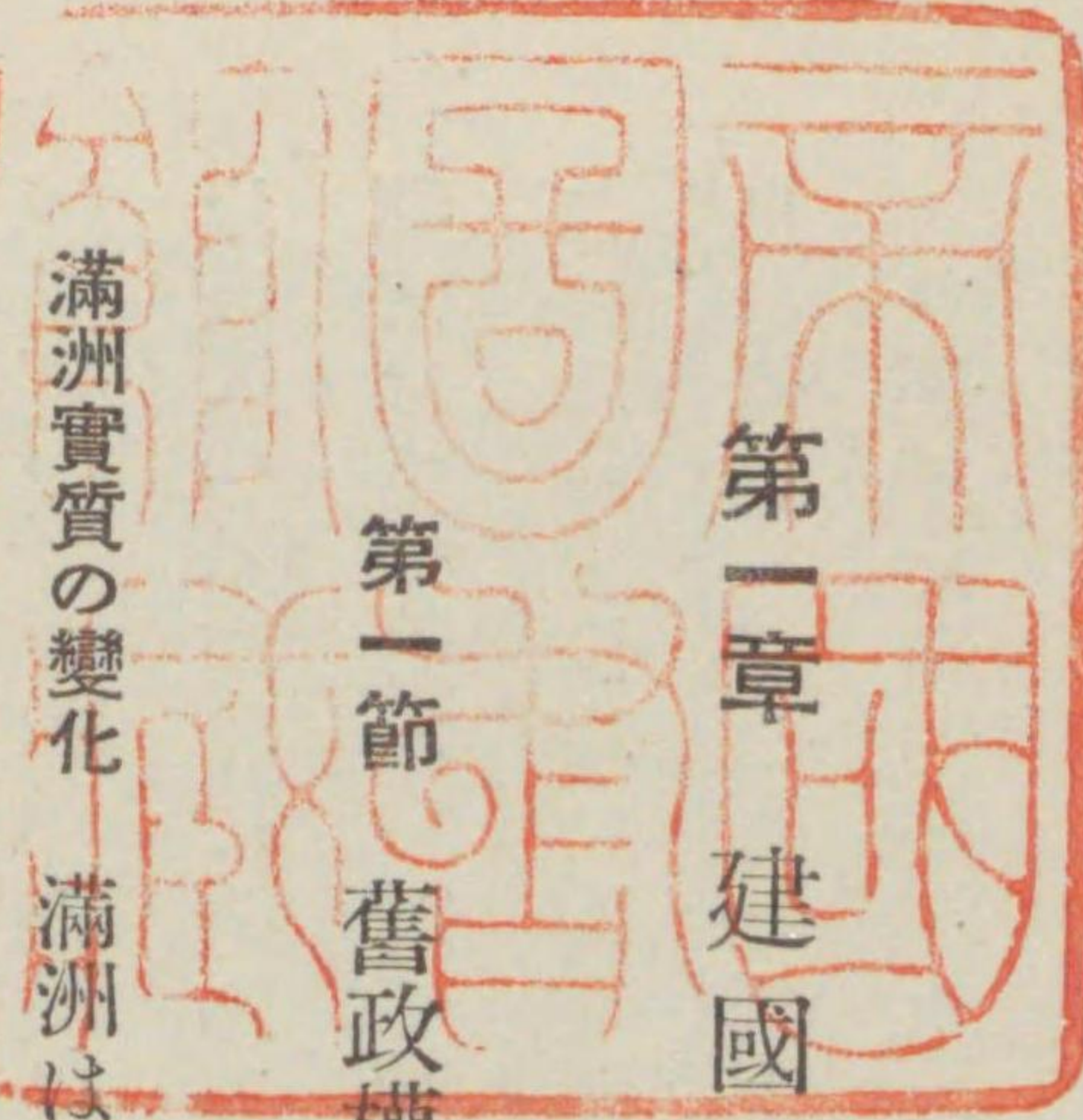
吾人はこゝに國際公法上支那國なるもの、正體を明かにせんとする試みを中止する。而して純然たる地理學的見地に立つて『支那とは何ぞや』の問題を解決しようと思ふ。即ち前清時代の領土そのものを研究上の一單元と定めてこれを支那と呼ぶ。而してその中には獨立國と認むべきものに中國(中華民國)・滿洲國の二ヶ國があり、半獨立的地域に外蒙古と新疆と西藏とがある。中國の領域は支那本部及び新疆省を含むべきであるが、この國の獨立は尙甚だ不確實であると云つてよく、却つて滿洲國こそは統制ある眞の獨立國と認め得る様である。

本書が前篇に於て滿洲國を、中篇に於て中國を、而して後篇に於て外蒙古・青海・新疆及び西藏を記述するのはこの見地に基いたものである。

前篇 滿洲國

第一章 建國の事情

第一節 舊政權の崩壊



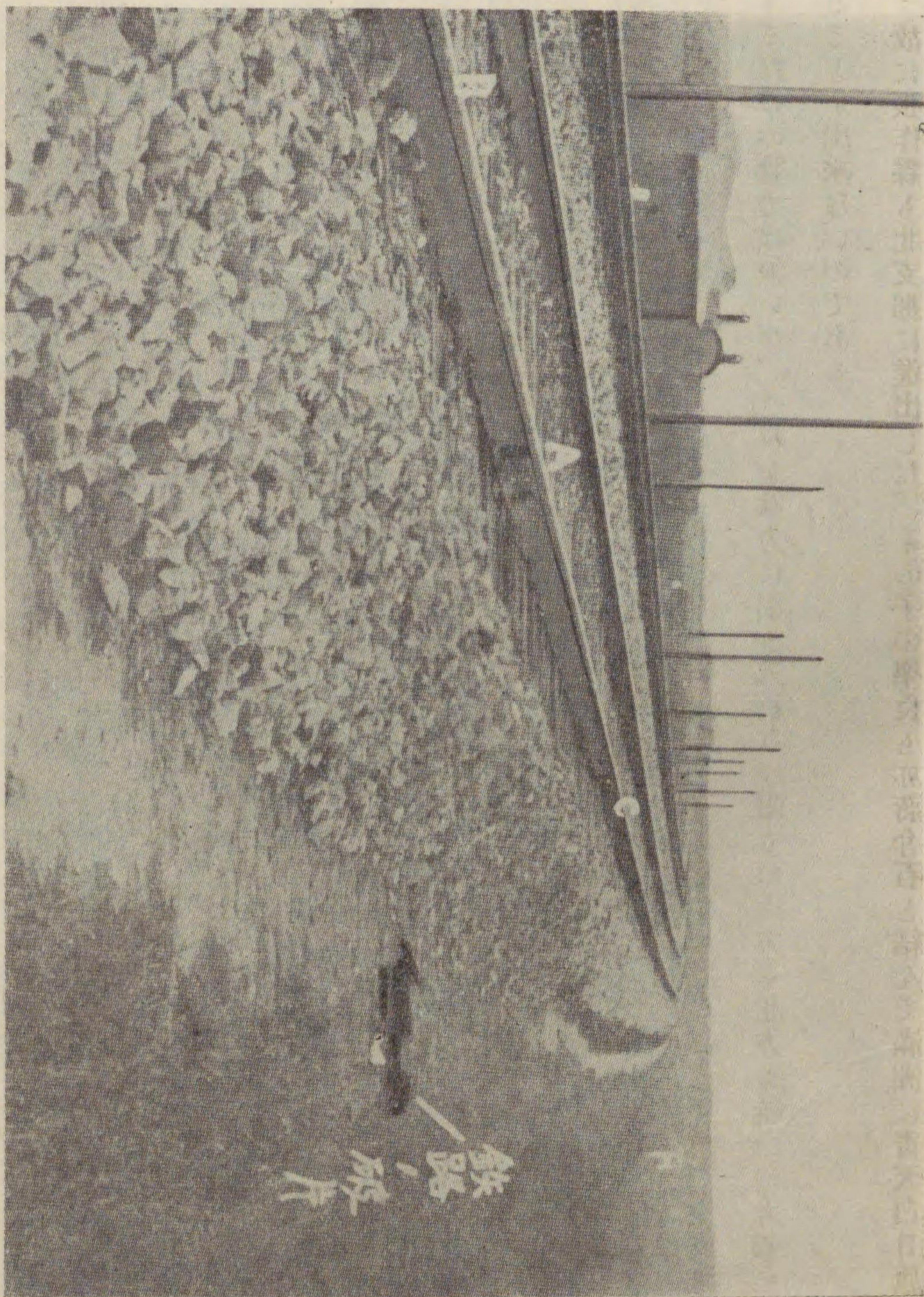
滿洲實質の變化 滿洲は元來滿洲人の國であつた。殆ど無人の曠野として、堅く漢族の前にその門戸を鎖してゐた。併しそれは近年に至つて非常な變化を遂げるに至つた。清朝の威令衰へてから以來、北支那の住民は雪崩れをうつつて滿洲に入り込んだ。それは或は多年の惡政を逃れるためであり、或は過剰人口がはげ口を求めたものでもあつた。勿論それには日本の勢力によつて比較的社會が安寧であり、又資源がどしどし開拓されて行つたといふことが主因をなしたのは云ふ迄もない。十八世紀に英人が北米に向つて雪崩れ込んだのと、事情は違ふけれども一點相似た所が無いでもない。

かくて清朝の末に至つては、滿洲は最早滿洲人のもものでは無くなり、完全な漢人の植民地となつて軍權も政權もその掌握する處となつた。その主要産業たる農業は殆ど全部が漢人の手にあり、商業も大部分は漢族によつて營まれてゐる。新式の工業と雖も初めは日露兩國人によつて經營せられたが、間もなく漢人に壓倒されてしまつたのである。

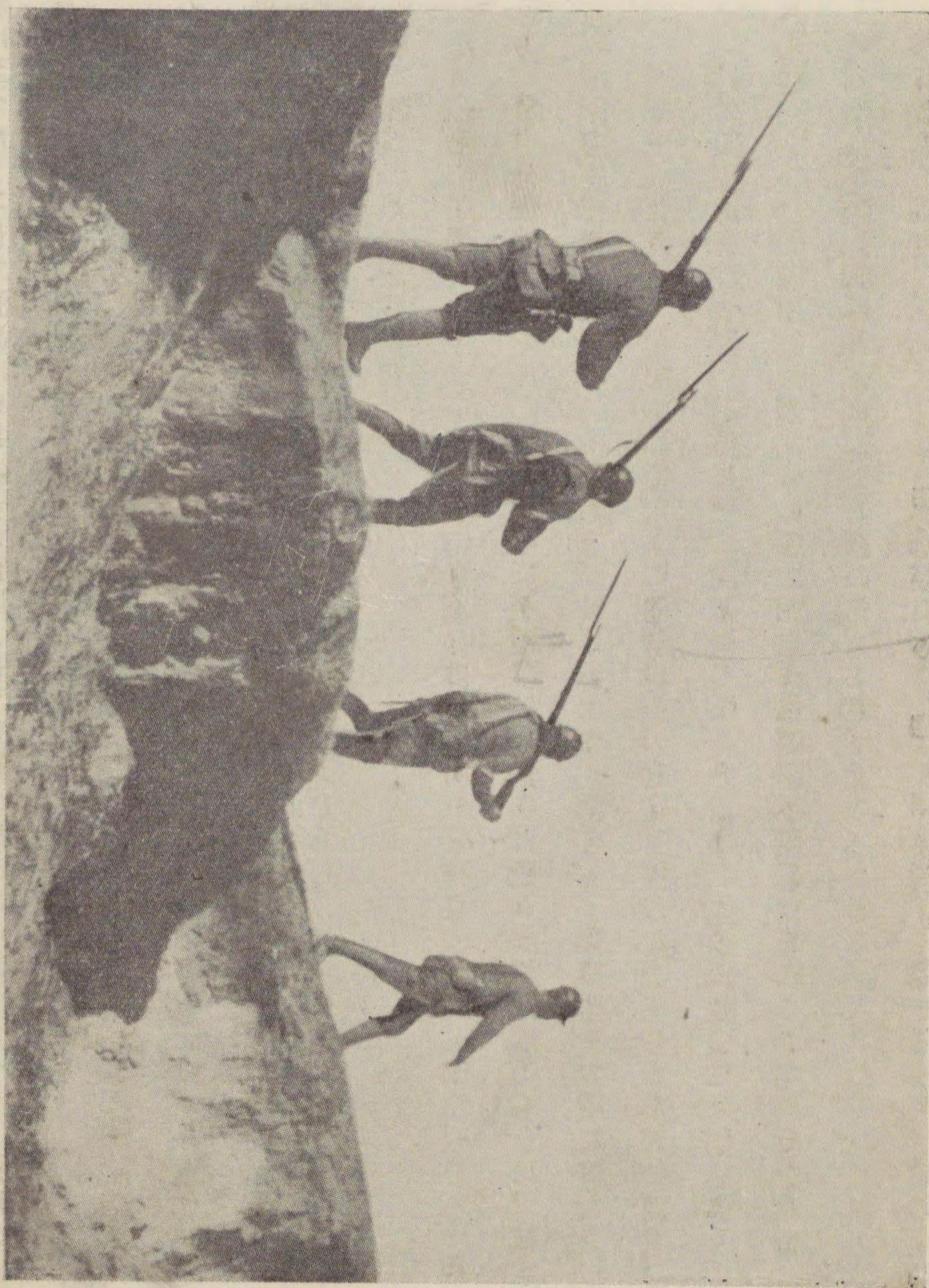
支那本部との關係　そこで滿洲は民族的に見て全く支那本部と同一となり、政治的にも經濟的にも非常に密接な關係を有するに至つた。滿洲の開拓が進んでその人口が増加し、その經濟力が豊富になると、支那に活躍する人士は決して滿洲を度外視することが出来ない。支那は革命以後久しく南北に分れて相争つてゐたが、資源豊富な長江筋を本據とする南軍に對して、北支那だけでは財力に於て到底敵對が出来ない。故に嘗て段祺瑞は張作霖と共同して南伐をやつた。それと同様に南支那は北支那を制するために滿洲を味方にする必要がある。蔣介石が張學良を優遇してこれを副司令に任命したのもそのためである。

で云はゞ滿洲はキャスティングボートを握る第三黨の様な地位に置かれた。自ら全支那を統一するだけの實力は無いが、これを味方に引き入れない限りは南方も北方も統一の大業を成就することが出来ないのである。

故に張作霖も北支那に進出した。その子の學良も亦蔣介石と結んで滿洲に青天白日旗を樹つ



因 原 の 變 事



滿洲の軍がわ

るに至つた。そして滿洲は東北の一大寶庫として軍閥の覬ひの中心となつた。搾取の貪慾に燃える彼等は、決して滿洲を度外視することが出来なかつたのである。

張氏の政治 張作霖は身を草澤の英雄から起し、革命の混亂に乗じて奉天省の兵權・政權を收め、次で黒龍江省をとり吉林省を略し、遂に東北三省を統一し、部下を以て各省を堅め、中央集權の武人專制政治を完成した。彼は親日を装ふて日本を利用し、後に態度を豹變して甚しい排日家となつた。そして北支那に進出して民國大元帥と稱したが、一朝不慮の厄に遇つて英雄らしい無殘の最後を遂げた。

然るにその子學良に至つては、更に猛烈な排日・侮日・抗日の態度に出た。そして滿洲から日本の勢力を驅逐し盡さんと公言するに至つた。これには色々の原因もあらうが、彼が偉大なる財力を有するため慢心でもあらう。彼は奉天票と稱する不換紙幣を無限に發行して、人民から買ひ上げた農産物を輸出して年々二億圓以上の利益を握つた。そして奉天には東洋一と稱せられる兵工廠を完成し、航空處には歐米からあらゆる最新式の戦闘機二百臺を購入し、三十萬の精兵を養ひ、滿鐵を包圍するにその四倍の鐵道を敷設し、日本の赤字財政を冷眼視しつゝ、日本の勢力を驅逐するはこの時機にありと考へたのである。

學良政府の排日、それは勿論日本及び日本人の甚しく迷惑する處であるが、その手段が滿洲

人民の搾取であり、苛斂誅求、民業の壓迫、賄賂賣官等あらゆる悪政暴政の横行であることを思へば、三千萬民衆の迷惑は筆舌に盡し難きものあること勿論である。

滿洲事變 張學良は自己の勢力の増大に益々圖に乗り、父の故智にならつて遂に北支那に乗り出した。それは蔣介石が閻錫山等の反蔣派を押へるために張と結んだからである。併しそのために學良の手兵十餘萬は北平に出て居て、その留守中昭和六年九月十八日に事變が起つたので、滿洲に残つて居た二十萬の兵は、僅か一萬數千の日本軍のために蹴散らされて、一部は武装を解除され一部は馬賊・兵匪となつた。而して學良は滿洲の兵工廠も飛行場も占領せられて武器の供給は絶たれ、加ふるに財源から離れたので木から落ちた猿も同様、今や没落の運命は彼の身邊に迫り、而して彼の政權は滿洲の天地から完全に排除されてしまつたのである。

第二節 新政權の樹立

事變後の滿洲 滿洲事變によつて張學良の政權は没落し、三千萬民衆の呪咀的反學良熱は灼熱化して、各省は反張派人物によつて治安が保たれることゝなつた。即ち九月廿八日には先づ吉林の熙洽氏が獨立を宣言し、次で奉天には袁金鎧・于冲漢の諸氏が地方維持委員會を組織して

學良と關係を斷ち、翌年一月六日に至り張景惠氏のチチハル入城となつて黑龍江省の獨立が宣言され、コロンバイルの代表凌陞、哲里木盟々長たる齊王の諸氏も獨立に傾き、熱河省首席の湯玉麟氏も遂にこれに合流したので、全滿蒙は漸く獨立國家建設の基礎を築くことが出來た。

併し彼等は概して兵權を有しないので、實際に於て治安を保つことは出來ない。一方にはこれ等の政權に反抗する反吉林軍の如きがあり、一方には學良部下の敗殘兵が馬賊化して各地を横行し、更に學良の命を受けた便衣隊の活躍もあつて、容易に滿洲の天地に平和を見ることが出來なかつた。

この間わが内地人や朝鮮人の受けた被害は列擧に遑が無い。殘虐なる支那正規軍及び敗殘兵は至る處で掠奪・凌辱・虐殺等暴虐のあらん限りを盡した。そこで寡少なわが關東軍は、この危険から邦人を保護するために日夜奔命に疲れるの状態であつた。

併し迫害を受けるものは、獨りわが國民ばかりでは無い。土着の良民も亦同様の迫害を受けた。故に彼等は日章旗を急造して日本軍の通過を歓迎し、長く日軍の駐屯せんことを希望して已まないものがあつた。即ち日本軍のある處に於てのみ天日の麗かなるを覺ゆるの状態で、全滿蒙の治安は事實上日本軍の擔當する處となつた。

錦州政權 然るに張學良は錦州に政府を置き、三萬の兵を集結して戦備をととのへ、一方組



建國を歡ぶ奉天の群集

組織的に強力なる便衣隊を續發して南滿の治亂を擾亂せしめた。又遼西地方に猖獗を逞うする匪賊は、その背後に有力なる支援統制のあることが明かとなつたので、わが軍も遂に意を決して錦州に進撃することゝなつた。

すると學良は到底日本軍に敵し難いことを知り、戦はずしてその全軍を錦州から撤退した。茲に於て滿蒙の治安漸く維持せられるに至り、新國家建設の運動は着々として進められて行つた。

民衆の要望 その後各省區の代表者はしきりに協議を進めて行つたが、要するに民衆の要望を容れて軍閥にあらざ

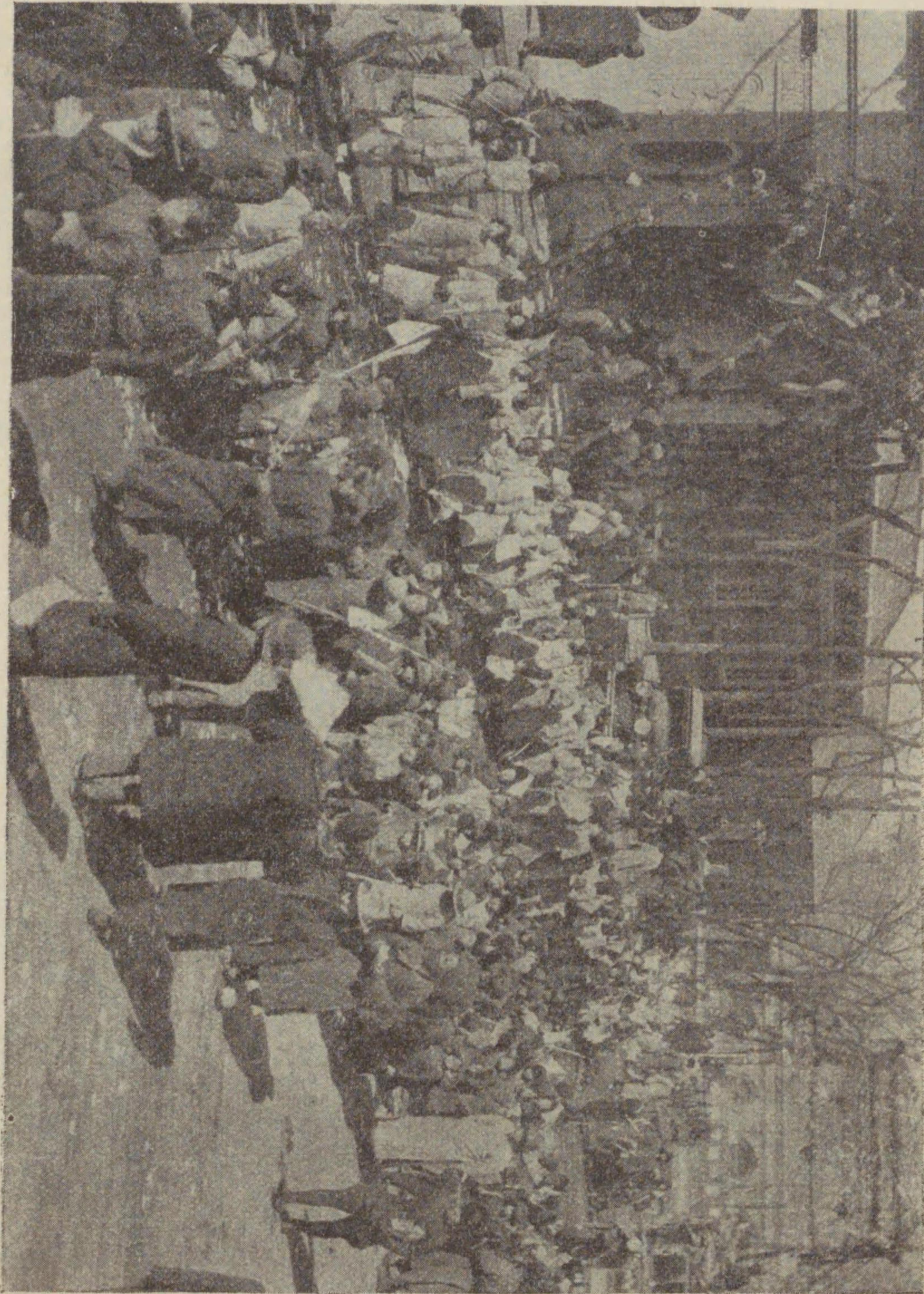
る新政權を樹立し、滿蒙をして永久平和の樂天地たらしめ様といふことになり、それにはどうしても南京政府と絶縁して純然たる獨立國を作るの外ないといふことに歸着し、領袖相集つて東北行政委員會を組織し、遂に昭和七年二月十八日を以て獨立の宣言を發表するに至つたのである。

第三節 建國の經過

要説 滿洲事變のため張學良一派の軍閥は完全に没落し、三千萬民衆の要望によつて平和主義の新國家が建設せられることとなり、昭和七年三月一日を以て建國式を擧げ、國號を滿洲國、年號を大同と定め、首都を長春に置くこととなつた。支那政府は勿論これを認めず、列國もまだ承認するに至らないが、獨立國たるの事實は動くことは無いであらう。

獨立の宣言 二月十八日東北行政委員長張景惠、同委員臧式毅・熙洽・馬占山・齊王・凌陞・湯玉麟諸氏の名によつて獨立の宣言が發せられた。その要點に曰く、

堅固なる團體あるにあらざれば以て全局を計るに足らず、人民の公意に本づくにあらざれ



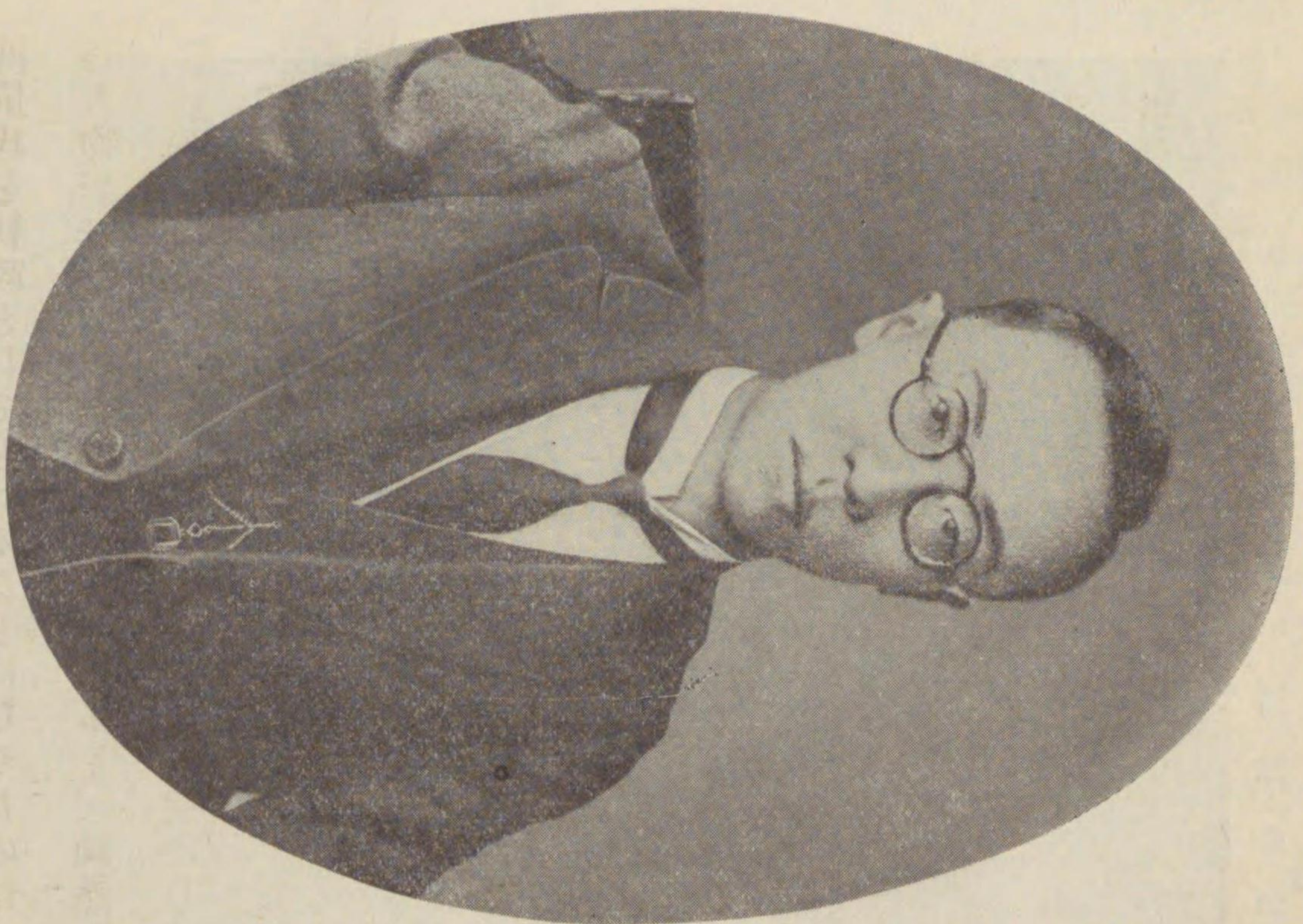
建 國 式 の 日 營 新 京

ば以て新猷を樹つるに足らず。こゝに東北四省と一特別區及び蒙古各王公より一機關を組織して東北行政委員會と命名し、内外に通電を發し黨國政府と關係を離脱し、東北省區はこゝに完全に獨立せり。

さきにわが軍閥苛政を布き横暴にも誅求これ努め、熱火深水のうちにあるが如き殆ど生命さへ保持し得ざる状態にて、郷村のなめし痛苦の涙いまだ乾かず、虎狼にひとしき爪牙の餘毒なほ存せり。これを徹底的に剿滅し、一般民衆蘇生して安息を得ば善良の政治は即ち完了せん。

排外の政策をもたず國際の戰爭を弭め、門戸開放と機會均等主義を以て世界の民族と共に共存共榮を圖り、職業を獎勵し士農工商を發展せしめ、利を生ずるものをして日に多からしめ、業を失ふものをして日に少からしめん。この使命を完成するためこの會を造り、我東北省區の人民のために幸福を求めんとす。

建國式 かくていよいよ新獨立國は建設せられることゝなつた。憲法の草案も出來、政府の組織も決定され、着々として準備は整つた。そして三月一日長春に於て盛大なる建國式が擧げられ、次で三月九日には元首たる執政溥儀氏の就任式も擧げられ、名實共に新國家は出來上つた。溥儀氏は所謂宣統廢帝で清朝最後の皇帝たりし人、退位後主として天津に居住せられた。



執政 溥儀 氏



執政夫人 溥儀 氏

溥儀氏を執政として迎へることになつたのは、帝政と共和政の間を行くもので、強固なる中心人物が無ければ統一が困難であるし、純然たる自治制を確立するにはまだ人民の訓練が足りないから、現在としてはこれが最も賢明にして妥當なる方法だと信せられたからである。

國號・國都・國旗 國號は或は滿蒙自由國、或は聯省自治國等種々の案があつたが、遂に滿洲國と決定せられ、年號を大同と稱することになつた。而して國都は長春に奠め、これを新京と改稱した。何故長春に決定したかといふと、長春はその位置が滿洲の中央に近く、現在南滿・東支・吉長三鐵道の會點であるが、近く長洮・長遼諸線の開通によつて交通の一大中心となるべく、これ迄の政權と何等の關係もないので舊勢力の制肘を受ける憂もなく、一は人心を新にする必要上奉天に止まることを欲しなかつた等の理由によるものである。

國旗は紅藍白黒滿地黃旗と定められた。紅は情熱熱誠、藍は青春潑瀾、白は純眞公平、黒は堅忍不拔を意味し、而して黄色は滿洲の天地を代表するものである。併しこれを別の見地から、黃は漢族を代表し、紅は大和民族、藍は滿洲族、白は朝鮮族、黒は蒙古族を代表するものと考へるも面白い。即ち最大多數の漢族の中に他の少數の四族が混入し、而してその最高位にあつて指導の地位に立つものが大和民族であるとするのも、必ずしも不似合のことでは無い。

新しい樂土 大同元年三月一日、それは新興國『滿洲』の紀元元年第一日である。この日廣漠

たる滿蒙の大天地は數十年來の暗黒から逃れ出で、美しい黎明を迎へ、三千萬の民衆は手の舞ひ足の踏む所を知らず、鼓腹、拊舞、隨喜の聲は萬雷の如く天地をゆるがしたのである。

やがて三月九日執政の就任式に次で、國務總理以下各院長各部長等の任命があり、こゝに新國家の威容は成つた。世界の各國がこれを完全な獨立國として承認するのは容易でないかも知れぬ。日本も亦目下の處では支那の一地方政權として認めるといふ態度をとつてゐるに過ぎないが、支那の地方政權なるものは對外的の交渉主體となり得るのであるから、事實上獨立國と何等の相違もない。新國家は當分こゝうした状態を以て進むことであらう。

而して新國家は相當多額の關稅收入を有するし、從來軍事に濫費されてゐたものを産業開發に向けるならば、今日でも年々四五千萬圓の輸出超過を有する國であるから、將來の發展は期して待つべく、その標榜する善政主義は必ずしも遼遠なる理想でなくて、着々實現の可能性を有するのである。

第二章 日本との關係

第一節 わが特殊權益

要説 日本は滿洲に多くの鐵道・鑛山を有し、その南端の關東州を租借し、且土地を借りて農・工・商業を營むの權利をも有してゐる。そのため二十數萬の内地人が居住し、十五億圓の資本を投下し、以て滿洲の開發に貢獻し來つた所が少くない。而して經濟上から見れば日本に對する食料燃料等の供給地として重要であり、國防上から見ればわが防禦の第一線として極めて重要な地位に立つてゐるのである。

日本の目的 日本は滿蒙に特殊の權益を有する。併しそれは日本が滿蒙の土地に野心を有するからでは無い。日本は滿蒙に於て一寸の土地をも領得し、或はその地に對する政治的主權を得ようなどとは毛頭考へて居ない。わが國の滿蒙に對する希望はそれよりも遙かに高遠であり尊嚴である。即ち滿蒙の平和と秩序とを保持し、各國民均等の機會の下に經濟的資源の開發に努

力せんとするものである。換言すれば滿蒙の平和が完全に保たれ、産業が起り文化が榮え、日本人の經濟的活動が阻碍されさへしなければよいのである。それが日本の最初からの目的であり又最後の目的でもある。

嘗て國運を賭してロシアと戦つたのもこの目的のためであつた。その後今日に至るまで巨億の資本を注入したのも、所謂二十一ヶ條と稱する條約を結んだのも、悉くこの目的を貫徹せんがためであつて決して他意あるものではない。然るにこれを帝國主義、侵略主義の現はれであると誇張し排撃するのは、實に謂れなきことと云はなければならぬ。

條約上の權利 今日日本の有する特殊權益を列舉して見ると、先づロシアから繼承した權益に關東州の租借權、南滿鐵道の經營權、鐵道附屬地の行政權、鐵道に附屬する炭坑の經營、及び鐵道守備のためにする駐兵權等がある。次に明治四十二年の條約によつて營口支線の敷設權、撫順及煙臺兩炭坑の採掘權等が獲得せられ、又間島に於ける朝鮮人の居住權、吉會鐵道の敷設權等も得られ、次で大正二年には開海・四洮・長洮・海吉・洮熱の五鐵道に關する協約が成り、大正四年には所謂二十一ヶ條條約が出来て關東州・滿鐵及安奉線の租借期間を九十九ヶ年に延長し、南滿洲に於て商工業上の建物を建設し又は農業を經營するために必要な土地を商租する權利、自由に居住往來して商工業その他の業務に従事する權利、東部內蒙古に於て支那國民と

合辦により農業及び附屬工業を經營する權利、東部內蒙古諸都の開放、鐵道借款に關する優先權、南滿洲の政治・財政・軍事・警察に日本人の顧問及警官傭聘の權、南滿洲に於ける鑛山試掘權、吉長鐵道に關する協約の改訂等が約せられ、又大正七年には更に開吉・長洮・洮熱等の四鐵道に關する覺書が交換された。これが國際條約として明瞭に根據を有するわが特殊權益の實體である。尤もこの中で鐵道借款の優先權と顧問及び警官の傭聘權とは後にワシントン會議に於て放棄を聲明した。

經濟關係 日本對滿蒙の經濟關係が極めて密接であることは敢て贅言を要しないが、滿蒙今日の經濟發展は主として日本の賜であり、而して一面それによつて日本の受くる利益も亦頗る多大なるものがある。即ち日本と滿蒙とは文字通り共存共榮の立場にある。日本の産業上最も困難を感ずるものは原料で、その大部分は國外から輸入しなければならぬが、海外の原料市場は各種の保護政策等によつて日本の欲するまゝに利用することが許されない。故に門戸開放主義の滿洲からこれを供給することは、一面交通運輸その他の地理的關係からしても適切であり當然であると云はねばならぬ。

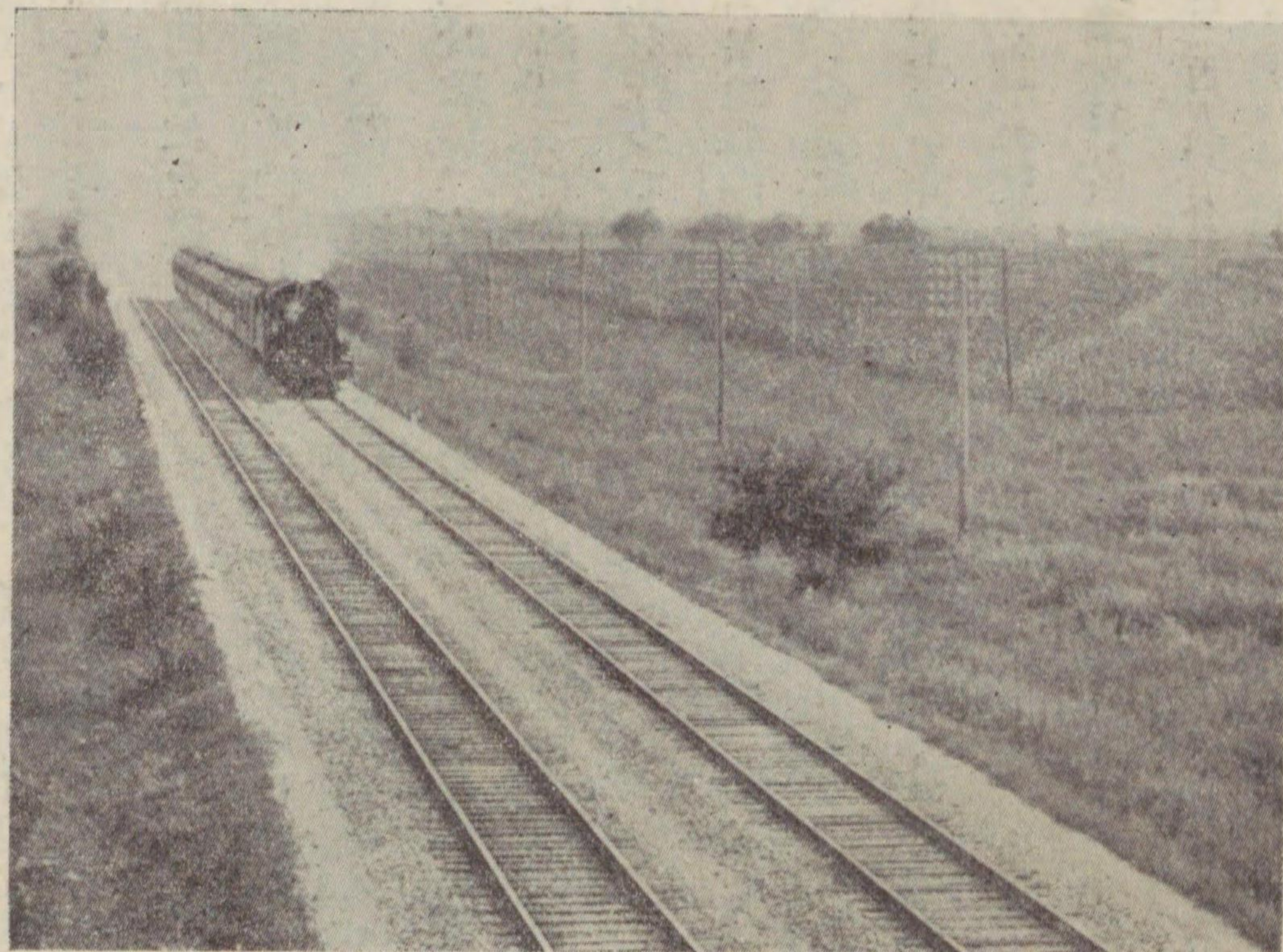
投資額 かく經濟的に密接不離の關係があるので、滿蒙に對するわが投資額の如きも斷然列國を抜く優越の地位を保つてゐる。即ち各國の總投資額二十億五千萬圓中日本の投資は十五億

圓に上り、實に全體の七三%を占めてゐるのである。これに次ぐロシアは東支鐵道を中心として四億六千萬圓であるが、イギリスは四千萬圓、米國は二千六百萬圓、フランスは二千百萬圓で、到底日本と同日の談ではない。日本の投資額を事業別にわけると、(單位百萬圓)

| | | | | | | | |
|----|-----|------|-----|-----|----|-----|-----|
| 運輸 | 八五 | 金融 | 二〇五 | 商業 | 二八 | 工業 | 一〇六 |
| 鑛業 | 一〇〇 | 電氣瓦斯 | 三六 | 農林業 | 二四 | その他 | 五三 |

而してこの中には法人又は個人の投資の外に借款の形式によつたものも頗る多く、中でも鐵道關係の借款は吉長・吉會・四洮・吉敦・洮昂・瀋海・北寧・齊克・四鄭等の諸線に對して合計一億七千萬圓になつてゐるが、それ等の多くは利子さへも延滞され、甚しきは元金を軍費に流用したり滿鐵枯涸策の遂行に利用したりしてゐる。故にこれ等巨額の債權を有することから、その鐵道に對する優越權が成立するのは事實に基づく當然の結果である。

滿鐵 わが投資の中心をなすものは滿鐵即ち南滿洲鐵道株式會社である。明治三十九年十一月の創立にかゝり、資本金四億四千萬圓、鐵道の外海運・港灣・鑛山・製鐵及び地方經營等の事業を行ひ、職員八千人、準職員二千五百人、日本人僱員一萬人、支那人僱員一萬三千人、囑托三百人、合計約三萬五千人の従業員を有する。名は會社といふけれども普通の營利會社ではなくして一種特別の公法人である。



滿鐵の汽車

鐵道の延長は千百十軒で、大連・新京間の本線の外に安奉線その他の五支線があり、別に吉長鐵道の經營をも依托されてゐる。而して大連埠頭には倉庫業を營み、北沙河口には鐵道工場を經營し、別に大連汽船會社の名目で香港・上海等への航路を營んでゐる。又大連及び旅順の港灣施設、撫順及び煙臺の炭坑、油母頁岩の乾溜工業、鞍山の製鐵等をも經營してゐる。

次に地方施設としては鐵道附屬地に市街を經營し、教育施設としては二十九の小學校、十の公學堂を設け、鐵嶺には日本語學堂、奉天には南滿中學堂、奉天・鞍山・撫順・安東に中學校、奉天・撫順・

新京・安東に高等女學校を、新京・營口及び遼陽に商業學校、撫順には鑛山學校、公主嶺・熊岳城には農學校を設立し、又高等教育機關として奉天に醫科大學・教育專門學校、大連に工業專門學校を設けた。

衛生施設としては大連以下十六ヶ所に完備せる醫院を設け、各地にその分院若くは公醫を設け、警備施設としては各地に消防隊・巡視・夜警等を配置し、産業施設としては公主嶺に農事試験場、熊岳城にその分場、鄭家屯及び海龍に農事試験場を置き、アルカリ土壤研究のために湯崗子に試験地を置き、又各地に煙草試作場をも設けた。商工施設としては諸種の調査、助成を行つてゐる。

又地質調査所を置いて南滿の地質を調査し、中央試験所を置いて各種の學術的研究を進め、況く企業家の計畫を確立するの便を圖り、又工場作業採算的の基礎調査をなすために數箇の試験工場を設立したりした。そしてこゝで研究の結果發明して特許權を得たものが十數個ある。

わが生命線　かくわが國は滿蒙に多大の權益を有してゐる。滿蒙を外にしてわが人口問題・食糧問題・物資問題・生活問題・思想問題・社會問題等を解決するの道は無い。滿蒙に確乎たる日本の勢力を据えることは、行詰つた日本の現状を打開する唯一有効の手段である。それのみならず滿蒙の地はわが帝國々防の最前線としても極めて重要な意義を有する。日清

戦役も日露戦役も東洋平和のための犠牲的戦争であつたが、窮極する處は自國の安全を保持するため必要から出發してゐる。今若し滿蒙に對する實力を喪失したならば、直ちに朝鮮を危地に曝らすこととなり、朝鮮の保全に自信を失へば日本自體が非常な窮地に陥ることは、素人目にも明瞭なことである。日本を守るためには朝鮮半島の確保が必要であり、朝鮮の治安を維持しその國境の安全を望むためには、滿蒙の地に絶對的優勢なる實力を保持することが、必須にして唯一なる要件となる。故に滿蒙はわが國防の第一線として閑却を許さないのである。

それ故に滿蒙はわが生命線である。これは條約の上から生じた權益でなくて、地理的位置の關係上當然に發生した事實なのである。生命に對する脅威を排撃することには何人の容喙も許されない。自衛權は絶對的性質を有する。而もそれが他を傷けず害せず、自他共に利するの立場に立つての主張であるから、正々堂々として國際的に公示主張し得ることなのである。

然るにこの特殊權益は、無謀なる支那軍閥のために危殆に瀕した。これが滿洲事變の起つた遠因なのである。

第二節 滿洲事變

要説 近年支那の排日運動到る處に猛烈を極め、滿洲に於てもあらゆる手段を以てわが特殊權益を蹂躪し、遂にはわが陸軍將校を虐殺しわが鐵道を爆破する等の暴虐を敢てしたので、わが守備隊は權益の擁護と在留民保護のために、遂に戰鬪的行爲に出づるの已むなきに至つた。かくて奉天・吉林・長春・チチハル・錦州・ハルビン等の要地を占據し、敗殘の兵匪・便衣隊及び馬賊等を討伐して全滿蒙の治安を回復するに至つた。

遠因 支那官民の近年の暴狀は殆ど言語に絶するものがある。所謂國權恢復運動に熱中して條約を履行せず義務を果さず。或は合法的に或は非合法的にあらゆる手段をめぐらしてわが權益を侵害し、はては在留邦人の生命財産をも脅かすに至つた。これ單にわが物質的利害問題としてのみでなく、實に國家の名譽と威信に關する大問題である。しかも日本の政府は尙且忍ぶべからざるを忍んで懸案解決に努力し、依然として兩國共存共榮の實現を目標として進んだが、横暴なる軍閥政治家はこれを以て日本の軟弱外交と誤解し、專恣驕慢の態度愈々増長するに至つた。今少しくこれが具體的事實を列擧しよう。

所謂二十一ヶ條と稱する大正四年の條約は、兩國間に正式に調印せられた立派な條約であるにも拘はらず、これは不平等條約だから承認出来ないといふ出だし、細目の協定をどうしてもやら

ないので、日本が正しく得た權利も實行することが出来ない。即ち居住營業の自由權を無視して日本人に貸家せる支那人家主に對して借家期限満了後の再契約を禁じたり、日本人經營の紡

つたり、擔保として土地を賣却したものは賣國罪に問ふたり、支那人名義で土地を商租すれば警察はこれが無効を公示してその土地を沒收したり、鮮人の移民を禁じその歸化を絶対に許可

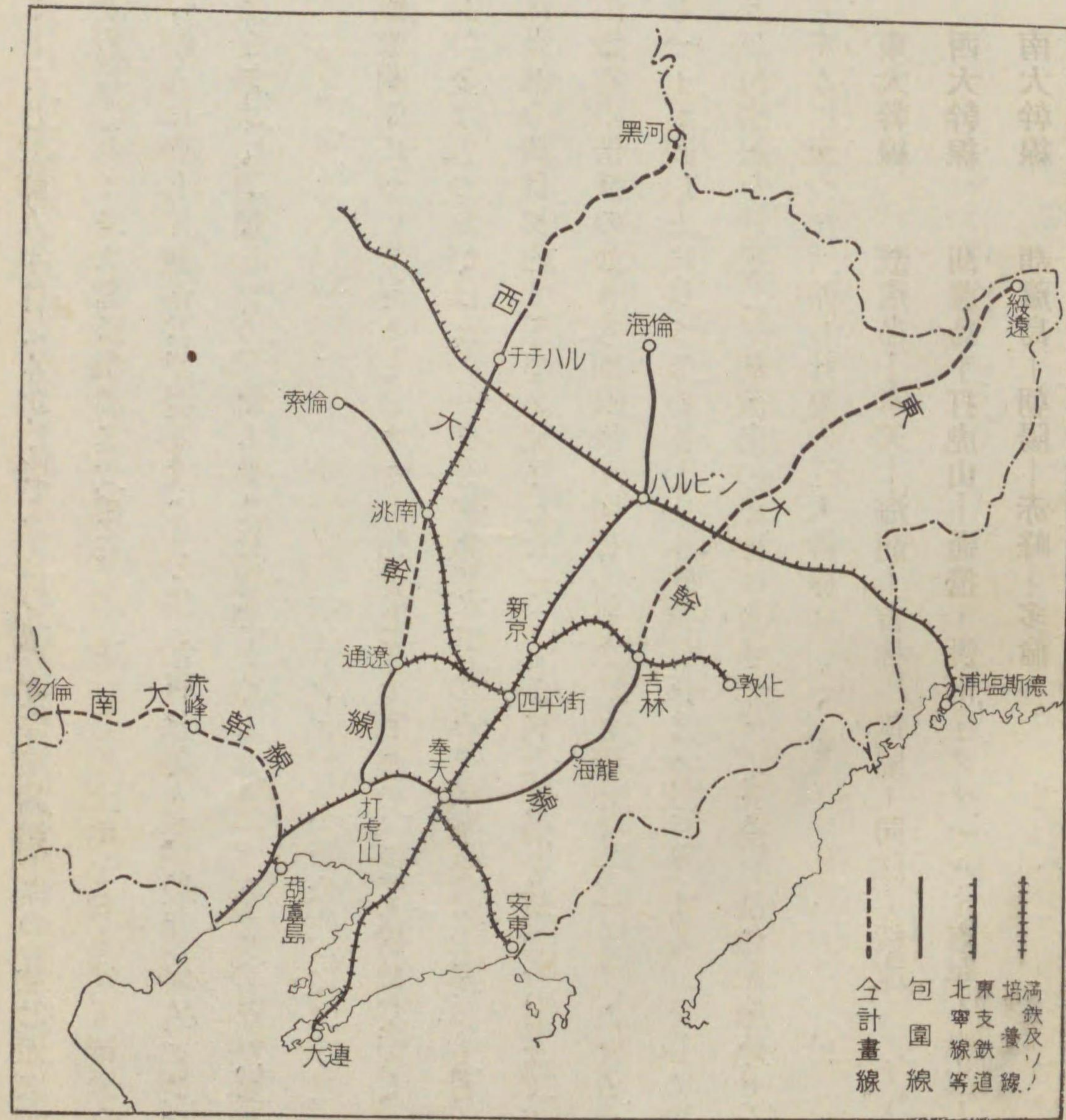
第二十一條的內容

(國民四年日本提出無理的的要求)

- 第一號四條 承繼山東省內德國舊有的權利並進而圖併山東全省
- 第二號七條 展長旅順大連租期及南滿安奉兩鐵路期限並進而圖併南滿洲及東部內蒙古
- 第三號二條 圖奪我國漢冶萍公司及其所有礦山
- 第四號一條 圖奪我國沿海港灣及島嶼
- 第五號七條 圖奪我國政治財政軍事警務諸種政權及道路採礦興學傳教權

排日資料

續會社の製品に不當の重税を課したり、北滿電氣會社を覆さんためにその電車敷設權を取り上げ、且つ警察力を以て市民に電燈の切替を強制して電燈事業を奪はんとしたり、わが土地商租權を無視して『外國人に土地を商租するものは死刑に處する』意味の法律を作



滿鐵包圍線圖

しないこととし、鮮人小作の水田に對しては小作年限を短縮して二年乃至三年とし、後には毎年借換を行はしめてその都度條件を苛酷にし、遂にその土地を取上げて鮮農を逐出すの策をとつたり、鮮人に對して無法な立退を命じたり、治外法權を無視して鮮人を勝手に審理處罰したり、鮮農を無法に逮捕したり、鮮人學生に退學を命じたり、この種の不法暴虐は實に枚擧に違がない。

更に鐵道關係について見ると日本から借款しても利息の一厘も拂はないし、吉會線の如きも一千萬圓の金はとつたがほんの一部分を敷設したのみで大部分は工事にも着手せず、吉敦線二一〇軒は滿鐵の請負契約で工事を完了したが、その後三年餘を経た今日まで工事費を支拂はない。四洮鐵道の借款の如きも期限後、切替の要求にも應せず、一九二九年五月までの延滞利子だけでも一千萬圓以上になつてゐるといふ無責任極まる状態である。そして遂には無數の滿鐵並行線及び包圍線を計畫し、葫蘆島の築港に着手して、完全に滿鐵を麻痺せしめ大連を涸渴せしめんとするに至つた。即ち計畫の三大幹線は

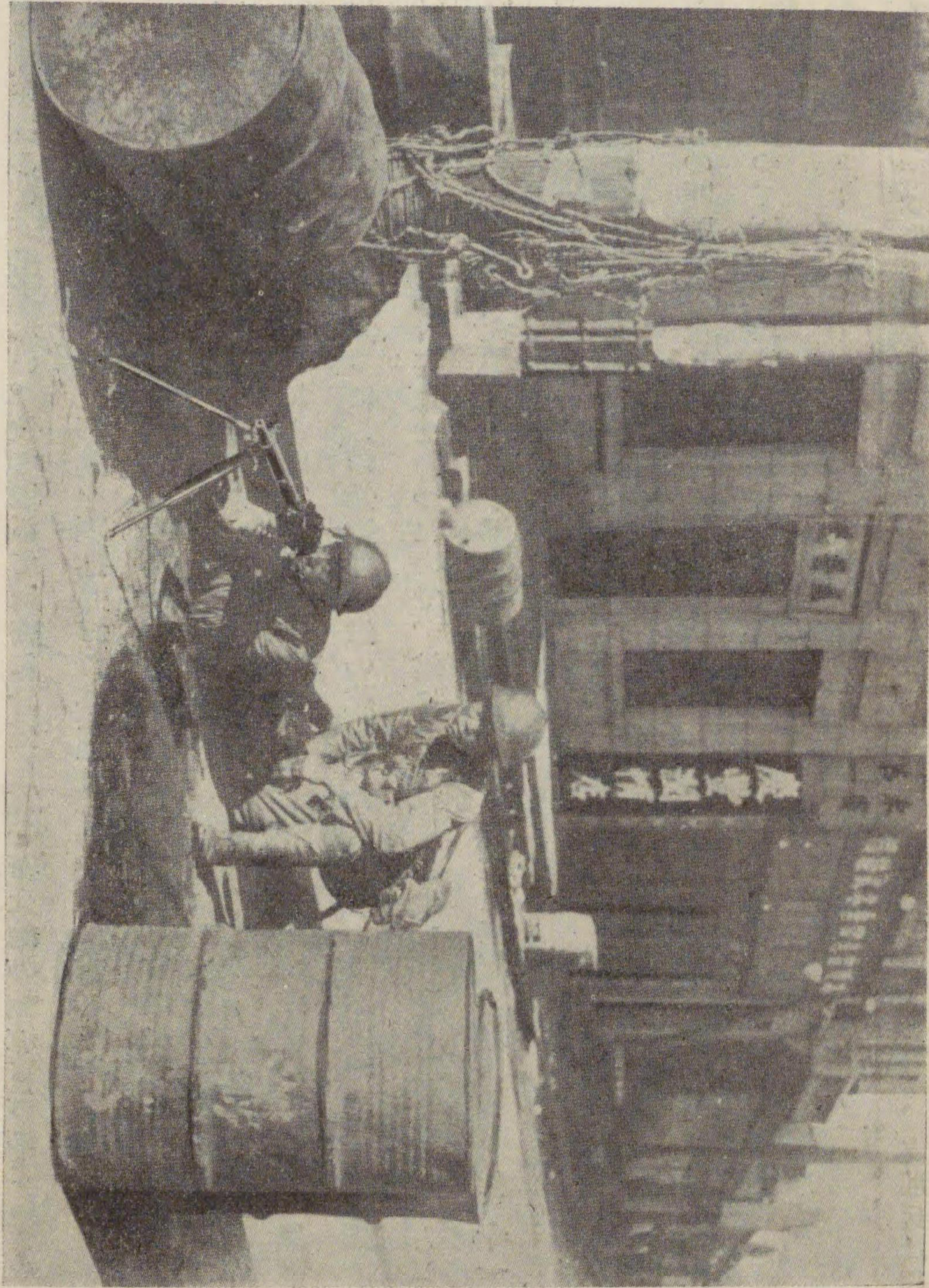
- 東大幹線 葫蘆島—奉天—海龍—吉林—依蘭—同江—綏遠
- 西大幹線 葫蘆島—打虎山—通遼—洮南—齊齊哈爾—寧年—嫩江—黑河
- 南大幹線 葫蘆島—朝陽—赤峰—多倫

なほこれに七十餘の支線が計畫されて、その總延長は滿鐵全線の五六倍に達せんとし、葫蘆島の築港も亦着々として進捗するに至つた。

近因 かゝる支那側の背信不法行爲は日と共に甚しくなり、最近だけでも大小三百餘件を數ふるに至つたので、日支間の空氣は頗る尖鋭化するに至つた。そこへ引續いて起つた大事件が三つあつた。一つは昭和五年に日本政府の任命せんとした小幡公使に對するアグレマン(承諾)を拒否してわが面上に泥を塗り、次には昭和六年五月に起つた萬寶山事件で、新京の北方二十五軒にある萬寶山に於て、二百餘名の鮮人が水田灌漑用の水路構築中であつたのを強制中止せしめ、且あらゆる暴行を加へた。そして第三には同年六月、わが陸軍の現役將校中村大尉の旅行中を、支那の正規兵が無法にも虐殺した。これ等は實に國際的にゆゑしき大問題で、わが國民は憤然として怒り、涙を吞んで遠く滿蒙の空を睨んだのである。

然るに九月十八日の夜、高粱にそよぐ葉摺れの音にも秋をしみじみと思はせる時、突如として奉天北方の滿鐵沿線にあらはれた數百の支那兵は、線路を爆破しわが守備兵に向つて猛烈に射撃して來た。これが事變の發端で、支那兵の逃げ込んだ北大營は、その夜の中にわが軍の占領する處となり、玉以哲の率ゐる精兵七千は算を亂して遁走したのである。

經過 併しその當時日本の兵力は全線を通じて僅かに一萬人餘であるのに、支那兵は約二十



奉天城内の戦闘

二萬もあり、その上馬賊や便衣隊が横行するので、非常手段をとらなければ到底わが在留民の生命も守ることが出来ない。依て極めて周密な計畫と電光石火的の機敏な行動とによつて、奉天・長春（今の新京）等の支那兵を驅逐してこれを占據し、更に吉林・新民・鄭家屯等に出兵して治安の維持に任じたが、その後には於ける支那敗殘兵の暴虐は言語に絶し、到る處に於て掠奪・放火・凌辱・虐殺等を行ひ、内鮮人並に支那良民の被害實に枚舉に遑なきに至つた。

十月に入つて張海鵬軍と馬占山軍との間に内争を生じ、洮昂線嫩江の鐵橋は遂に黒龍江軍のために破壊せられた。然るにこの鐵道は滿鐵の建設したものであり、當時大豆の出廻り時期でわが滿鐵の受くる損害も甚大であつたので、遂にわが軍によつて修理を強行することとなり、馬占山の抵抗に遇つて大興及び昂々溪附近の戦闘となり、遂に馬軍を追ひ散らして十一月十九日わが軍チチハルに入城した。

その後奉天・鐵嶺方面の各地に兵匪が盛に出沒するので、わが軍はこれが討伐に従事し、次で遼西地方の匪賊を討伐して翌年一月三日錦州に入城し、更に錦西方面の殘敵を討伐し、平靜となるを待つて原駐地に歸還した。

馬占山は後に一時態度を改めて來たので黒龍江省方面は平靜になつたが、吉林省に反吉林軍が起つてハルビンの治安が頗る危くなつた。そこでわが軍は二月五日ハルビンに入城した。そ

の後尙北滿その他各地に匪賊の蠢動があるが、大體に於て滿蒙の天地は日一日と靜穩に復し、而して民衆待望の新國家は生れ出たのである。

第三節 今後の日滿關係

要説 滿洲はわが生命線であると同時に、日本の力によらなければ滿洲の發達進歩は望めないものであるから、今後兩國は最も親密な間柄となり、その資源は日本人の手によつて開發せられて日本を益すると同時に、その政治も教育も凡て日本人の指導と助力とによつて進められて行くことであらう。かくてこそ兩國は特殊關係ある接壤の國として、共存共榮を圖ることが出来るのである。

政治 出來上つた滿洲國が舊條約を尊重してわが特殊權益を確認し、日本人に對して他種族と同等の待遇を與へるに於ては、わが政府は勿論新國家に滿腔の好意を寄する筈で、唇齒輔車の關係にある唯一接壤の國として最も親密なる交際を續けて行くべきは當然のことである。たゞこれを獨立國として承認するや否やの問題に至つては、他列國との關係もあつて急速には運ばないかも知れぬ。

次に重要なことは滿洲に於けるわが出先官憲の問題である。從來は關東廳と關東軍司令部と、それに總領事があり滿鐵があつてその間の連絡統制が充分に行はれず、所謂四頭政治の弊害に陥り來つた。これに對しては今後何とか整理の道を講ずべきであるが、今日の處ではまだ何等決定する處がない。

滿洲の内治に就ては今後日本の助力に俟つべきものが多い。政府要部の事務官級を始めとして下級官吏の如きも多數の日本人を採用しなければならぬ。小學校にも日本人教師を招聘し、日本語を第二國語として教授しようとの議もある。治安の維持も當分は日本軍にたよるの外なく、眞に日本の周密な保護と誘掖なくしては、新國家建設の大業は到底完成しないことは、現政府の知悉する所であると考へられる。

食料問題 經濟的關係として第一に考ふべきはわが食料問題との關係である。わが國民の主要食料品たる米の需給關係を見ると、年平均産額五千七百萬石に對して消費總額六千七百萬石で、その不足額たる九百萬石中六百萬石を朝鮮・臺灣から移入し、残りの三百萬石を外國から仰いでゐる現狀である。ところで人口の増加は年々著しいが、耕地は殆ど擴張の餘地なく、反當收量もこの上の著しい増加は困難で、將來は決して樂觀が許されないのである。

即ち假りに二十五年後即ち昭和三十二年に於ける狀態を推算すると、わが内地人口は約八千九百萬となるべく随つて米の消費量は一億一千百萬石に増加する勘定であるが、これに對して内地の生産高はどんなに多く見積つても八千萬石を超えることは困難であらうし、朝鮮は粟を常食とするものゝ生活向上等を考へると自給自足以上には出難い様であり、臺灣に於ても一千万石以上の剩餘は困難かも知れない。そうするとどうしても一千万石乃至二千万石は外米に仰がなければならぬであらう。

ところで滿洲の産米は目下の處自給にも足らないが、開墾見込地百萬ヘクタールが全部開田された時を考へると、この不足額の大部分は供給し得られると思ふ。かくて兎に角不足の米がわが勢力圏内から供給せられ得る見込がなくなれば、わが糧道に自信を有することゝなるのである。

次に麥類に就て考へると、わが小麥の生産高は五百七十萬石であるが消費は一千百萬石に上り、その不足額の供給地として北滿は最も有望であると云はねばならぬ。その他大豆が味噌・醬油・豆腐などの原料として、豆粕が肥料として、粟が朝鮮人の食料として、又牛肉がわが食料として極めて重要な地位にあることは贅言を要しない。鹽の如きも食料及び工業原料として將來わが需要の全額を供給し得るのである。

原料問題

土地狭く人口の多い日本としては、土地から産する凡てのものが不足勝ちである

と云つてよい。國土の五割五分は森林でありながら建築材さへも不足が甚しく、パルプ原料の如き今後果して何年を支へ得べきか頗る心細い状態である。これに對して滿洲材は或程度の供給能力をもつてゐるであらう。併し衣服原料としての綿について見ると、その栽培可能地全部に作付したとしても、年産額三十三萬俵位のもので、朝鮮の現産額と大差がなく、わが原料綿消費總額の五%にしか當らないから、これは在滿紡績會社に於て消費される以上には出でないであらうし、羊毛に至つては數量も相當にあるけれども品質粗悪で殆ど問題にならない。併しそれは品種の改良によつて優良品産出の見込は確かであり、百萬頭あればわが軍服の供給には支障が無いと云ふから、更にその數倍に達せしむることも必ずしも至難では無いと思はれる。

燃料問題 わが國は燃料資源に於ても頗る乏しいと云はねばならぬ。石炭の埋藏量は八十億噸と見積られるが、經濟的採掘は三十年乃至六十年で終ると稱せられるし、今日では産出高と消費高と殆ど平均してゐるが、工業の發達に伴つて近き將來に不足を告げることは明かである。これに代る水力は豊富であるとは稱せられるが、これを列國に比べると利用率が最も高く、無限に増加する需要に應じ切れるかどうか疑問である。又石油に至つては近代工業及び交通の發達上非常に重要なものとなつたが、その内地産額は需要額の一八%乃至二一%にしか達しない状態であり、更に海軍用としての莫大な量が悉く輸入に俟つ現状であるから、撫順の油母頁

岩から得らるべき三億三千萬噸の原油と、熱河方面に於ける未知の油田とは、わが燃料油界のみならず國防上の黎明としても非常な期待をつながれるわけである。

移民問題 わが國の人口密度は已に飽和點を突破せんとしてゐる。何處かにハケ口を求めなくてはならぬ。北米も濠洲も全く封鎖されてゐる。僅かに残された南米と雖も年々五千か一萬の人を送つてゐたのでは、年々増加する百萬人に對しては焼石に水ほどの効果もない。そこで滿蒙の未墾地が着目せられるわけである。從來支那官憲の惡辣なる壓迫によつて、切角得られた利權も空文に終り、生命財産の安固さへも保證されないので、著しく邦人の發展を阻碍されてゐたが、今や條約は確認せられ、人種的に無差別平等の善政が布かれることとなつたのであるから、今後は大量の移民も可能となり、わが人口問題にも解決の曙光が見えることとならう。

併しこゝに問題となるのは、わが勞働移民が果して漢人と競争し得るかといふことである。漢人はその生活程度が非常に低く、而も驚くべき忍耐力の所有者である。彼等は支那本土に於て多年の惡政に育てあげられ、比較的安寧の天地として滿洲に入り込んで來た。而もその滿洲に於てすら惡軍閥の暴戾なる慘虐の筈の下に訓練されて來た。働いても働いても高粱粥すら吸ひ兼ねる生活、あらゆる屈辱と忍苦の生活、そして恐ろしい酷寒とも戦つて來た彼等である。多年の善政下に安樂な生活を送つて來た日本人が、少し位の不景氣や失業の苦を嘗めた位で、彼

等と競争することは蓋し容易でない。われ／＼の常識では判断の出来ないほどの忍耐力、ネバリ強さが、抜くにも抜けない滿蒙魂となつて悠久に流れてゐる彼等であるから、あらゆる不合理的と壓迫の下に於てさへも年々百萬の移住者があつた。今後眞の樂天地が現出したとしたら、更にもつとひどい勢で雪崩れ込んで來るに違ひない。そうした時に日本移民は何處へどう進出したらよいか。そこに今後の問題が残される。

在郷軍人による屯田兵制度、ある地域を限つての集團移民、その他色々のことが提唱されてゐる。どうしても個人的に勝手に飛び込んだのではない。必ずや一貫した方針を立て統制ある組織體として進出するの外無いであらう。

貿易關係 從來も日本と滿洲との貿易は年々著しい發展を示して來た。彼に産する食料・原料・燃料等がわが國にとつて極めて重要であるのみでなく、三千萬住民の需要する各種製品に至つては日本が最も適當な供給國でなくてはならぬ。滿洲は何處までも農業國であり原始産業國である。工業國たる日本とは互に相扶けて以て共々に利益を享受しなければならない。

第三章 國情概観

要説 滿洲國は朝鮮の西北、支那本部の東北方に位し、面積百萬方秆でわが内地の約三倍ある。北は黑龍江の本流を以てシベリヤと境し、南には遼東半島が突出して遼東灣を抱いてゐる。東境は鴨綠江・豆滿江・ウスリ江であるが、西方には明瞭な自然の境界がない。

位置 滿洲はアジア大陸の東部、全支那の東北部を占め、わが國から見れば北西方にあつてゐる。その北端は北緯五十三度半、南端は三十八度四十三分であるから、恰もわが奥羽の鶴岡附近から樺太島の北端までの間に擴がつてゐるわけであり、東端は東經百三十五度二十分でわが神戸附近にあたり、西端は凡そ東經百十五度半の地點となつてゐる。今若し北海道の小樽を中心として半經二千秆の圓を描くと、臺灣以外の日本と全滿洲とは殆どその圓内に包括せられることとなる。

境域 古く滿洲と呼ばれた地域は今の奉天省の南部、吉林省の大部及び黑龍江省の地で、こ

れを東三省とも呼んでゐた。その西方に續く土地は即ち蒙古であるが、内蒙古の東部は開拓が次第に進むにつれて漢人が多く入り込んだので、或部は吉林省へ、或部は奉天省へ合併せられ、熱河地方は別に熱河省と稱するに至つた。熱河省の西には更に察哈爾・綏遠・寧夏の三省があるがこれは西部内蒙古に屬する。わが國ではこの滿洲と東部内蒙古の地域に特殊の權益を有するので、これを一括して滿蒙と呼び來つたのである。支那では近年これを東四省と呼んでゐた。尙その四省の政權以外に立つ地域に日本の租借してゐる關東州及び滿鐵沿線附屬地があり、又ロシヤの租借してゐた東支鐵道沿線の附屬地は、今東省特別區と呼んで別の行政区になつてゐる。

國境 北方シベリヤとの境はアルゲン河を源流とする黒龍江の本流で、これは一八五八年の愛琿條約によつて定められ、河の通航權は兩國船のみが有し、ロシヤに水上貿易を許すことが規定せられてゐる。東方ウスリー河を境とすることはその翌々年の北京條約で定められたものである。

興凱湖から南は幾分地勢を利用した人爲的の國境で、朝鮮との境界は豆滿・鴨綠の二江である。豆滿江に就ては嘗て日支の間に見解の相違が起つて、間島の所屬について争つたがそれは支那領といふことに結着がついた。鴨綠・豆滿二江の源流の間には、白頭山の山肩に定界碑

が立てゝある。これは一七二二年に建設したものである。

西境は概して不自然な境界線を有するが、熱河省に至つては多くは山背を利用してゐる。熱河省と支那本部との境界附近には萬里長城があるが、現在の國境はこれと一致してゐない。舊滿洲と蒙古との境には明及び清の時代に土石又は磚等で築き上げた邊牆並に長柵があり、邊牆の兩側に柳條を植えて柳條邊牆と稱してゐたが、今は無用の長物となつて荒廢に委してある。

南は海に臨み、遼東半島は遼東灣と黃海とを別ち、直隸海峽を隔て、近く山東半島と相對してゐる。半島の先端關東州は日本の租借する處で、その境界は三官廟から畢利河口に至る概して人爲的の線で、更にその北方には蓋平附近から大孤山に至る線によつて中立地帯が劃してある。

面積 滿洲國の面積については未だ正確な調査が無く、蒙古方面には境界さへも不明の點があるし、根本となるべき實測圖も勿論完備してゐないので、各種の推定區々として歸する所を知らない有様である。今滿鐵調査課に於てわが陸地測量部の地形圖その他によつて得た結果によると、(括弧内は別途推算による數字、興安省は各省に包含)

| | | |
|-------|---------------------------|--------------------------|
| 奉 天 省 | 一八二、七三三 <small>平方</small> | (一八六 <small>平方</small>) |
| 吉 林 省 | 二二五、九一〇 | (二六七) |

| | | |
|------|-----------|---------|
| 黑龍江省 | 五四七、七三七 | (五八一) |
| 熱河省 | 一四七、四三六 | (一五〇) |
| 計 | 一、二〇三、八一六 | (二、二八四) |

即ち大約百十萬方籽で日本内地の約三倍、日本全面積の一、七倍ほどに當つてゐる。この中關東州租借地の面積は三、四六二方籽、關東州外にある滿鐵附屬地二六二方籽であるから、この兩地域を合した三、七二四方籽の地はわが行政權の下にあるのである。

沿革 古代の滿洲には北部に肅慎があり南部に東胡があつた。支那の戰國時代には南部は燕の領地となり、秦の勢力も亦南滿に延びたが、その後漢族の勢力は後退して高句麗の勃興となつた。高句麗は廣開土王の時から國勢大に張り、北朝鮮に進出して平壤を都とした。隋はこれに對し四度遠征を試みたが遂に目的を達することが出来なかつた。

唐の時代になつてからも屢々遠征を試みられたが、容易にその目的は達せられなかつた。併し高宗の時代に至り、高句麗の内亂に乗じて東征の大軍を發し、遂にこれを滅してしまつた。當時遼河の下流はまだ海で、遼陽附近までは一帯の沮洳地であつたらしい。

そのうちに松花江の上流に起つた靺鞨族が次第に勢力を振つて來て、唐の玄宗の時から渤海國と號し、今の寧古塔の附近を國都とした。その最盛時にあつては領域が遼河の附近から日本

海沿岸まで擴がつた。この國はわが聖武天皇以後凡二百年間わが國と交通を續けて親密な關係を保つた國である。

次で唐末から宋初にかけて契丹民族が起つて渤海國を滅ぼし、國を遼と名づけて北支那を脅した。そこでその頃まで北平から熱河を経て奉天方面に出て居た交通路は、今の山海關を経る海岸傳ひの道路に變更された。

併し遼の勢は北滿洲に及ぶことが出来なかつた。そして北滿には女眞が起つて國を金と號し、遂に南下して遼を滅した。そして勢に乗じて支那本部に侵入し、宋の國都汴京を陥れたので宋は南に走つて南宋となつた。けれどもそのうちに蒙古族が擡頭して元朝を立て、滿洲もその支配下に入つた。

元が亡んで明となり、その成祖の代には遠く黑龍江口の附近までも征服し、遼陽を以て滿洲統治の中心とした。併し明の實勢力は邊牆以内に行はれたに過ぎなかつた。そして牡丹江流域にあつた建州衛女眞の中から起つた奴爾哈赤は興京を根據として明朝に抵抗し、國號を大金と云ひ、後に清と改め都を奉天に遷して明軍を山海關方面に壓迫し、世祖の代となつて遂に兵を北京に進めて明を滅し支那全國を統一したのである。

清朝は長い間滿洲に對して特別の政治を行ひ、奉天に盛京將軍を置いてこれを統括してゐた

が、明治四十年に至つて始めて支那本部同様の政治組織とした。併し間もなく革命が起つて清朝亡び、中華民國が建てられて張作霖が奉天督軍となり、勢力を滿洲に張る様になつたのである。その後の變遷については已に前章に於て述べたから茲には省略する。

第四章 地勢及び地體構造

第一節 概観

要説 西部には大興安嶺があつて蒙古高原につゞき、東南部には長白山脈があつて、その餘勢は延びて遼東半島となり、黄海と渤海とを分つてゐる。この兩高地の中間は所謂滿洲平野で、南は遼河、北部は松花江の流域となつてゐる。

細説 滿洲と云へばたゞ廣漠たる大平原のみの様に單純に考へる人もあるが、勿論その大部分が大平原ではあるけれども、一方には大小幾多の山脈もあれば丘陵もあり、火山なども亦皆無ではないのである。たゞその規模は一般に大であるから、せゝこましい内地の小刻みな地形を見なれた目には、あまりに單純に見え過ぎるのも無理は無い。即ち凡てのスケールが大きいのであつて、大陸的といふ言葉がそのまゝあてはまるのを痛切に感ずる。

通俗には南滿洲・北滿洲といふ名稱も用ひられるが、嚴密な意味に於ける南北の區別は無い

のであつて、勿論その境界などの定まつてゐる筈は無い。たゞ普通には遼河の流域を南滿、松花江の流域を北滿といふことになつてゐるが、これとて實際は一續きの平野で、その間に何等天然の障壁などを見ることは出来ないのである。併しながら廣い國のことであるから、南部と北部とでは氣候も違へば産業も違ふし、南滿には日本の勢力が根強く張つて居り、北滿にはロシアの色彩が濃厚なといふ様な點から、たゞぼんやりと南滿・北滿の區別を立てることは可能でもあり便宜でもあるので、古くから行はれて來たのである。

リヒトホーフエン氏はこの地域を地壇の縁 (Staffelrand) と名付づけた。それはアジャ大陸の中央部に横はる蒙古大高原の東の縁にあたる大興安嶺と、その東方の廣い低地とを含むからである。この地形は北西から南東に向ふ大横壓力の結果か、それとも海岸の方からの曳裂作用 (Zerreißung) によるものであるが、何れにしても北東から南西に向ふ大斷層によつて高原と低地とが相接し、低地帯の南東方には再び狹長な高地帯があつて、更にこれと並行する豆滿江・鴨綠江の地溝帯に臨んでゐる。この北東——南西の構造線は東アジャに於ける一大特徴である。

第二節 起 伏

(1) 山 脈

大興安嶺 この山脈は黒龍江の岸に起つて南々西に走り、熱河省の西境に於て陰山山脈に續くもので、總延長實に一千五百軒に及んでゐるが、最高點も海拔二千五百米に達するのみで、大部は一千米から一千六百米に過ぎず、二千米を超える山嶺は極めて稀である。その東側は殆んど一直線をなして滿洲平野に臨んでゐるから、平野から眺めると一大連嶺をなしてゐるが、西側は蒙古高原であつて高さの差が極めて僅少であるから、殆ど山脈の所在を見出すことが出來ない。

興安の名 Hingan は滿洲語の Singgha から訛つたもので、それは風によつて常に砂を吹き送る山といふ意味だと云ふ。事實上蒙古高原を吹きまくる風は、多量の砂をその高原の縁邊から滿洲平野へ吹き飛ばすのであるから、この名稱は頗る當を得たものと云ふことが出来る。

長白山脈 長白山脈は滿洲平野の南東を限り、北は松花江とウスリ江との分水嶺をなして完達山脈と呼ばれ、南は遼東半島に延びて本幹山脈と名づけられる。その全長は一千三百軒に及んで大興安嶺と大差がなく、最高點は朝鮮との境にある白頭山に於て海拔二七四四米に及んでゐる。

から直角に分出するもので構造複雑を極め、山脈といふよりも山彙と稱すべきものである。この外尙松花江と遼河との分水界がある。これは山嶺ではなくして一連の丘陵であり、一部は砂丘に蔽はれて草原をなしてゐる。その南端は白頭山の熔岩下に没してゐるが、その生成は最も新しくて現時も尙隆起を續けてゐる様である、これを黒遼分水界と名づける。

(二) 火山

白頭山 朝鮮との國境に聳えるもので長白山脈中の盟主とも云ふべく、最高點は海拔二七四四米で實に滿蒙第一の高峯である。玄武岩の廣い臺地の上に立ち、山體の上部はアルカリ質粗面岩から成り、頂點附近は後の噴出にかゝる白色の玻璃質浮石に覆はれてゐるので、遠方から見ると何時も白雪を戴いてゐる様であるから、そのため白頭山の名も起つたのであるが、雪線に達してゐないから夏は雪を見ることは出来ない。

頂上に龍王潭一名天池と稱する楕圓形の小湖がある。南北四籽、東西二籽、周圍は二百米内外の絶壁で取り圍んでゐる。これは恐らく陥落によつて出來た一種のカルデラ (Caldera) であらうといふ。湖水は松花江の水源となつてゐる。國境は山の頂上から四籽ばかり東に下つた山肩の部分にあるから、山體の七割はこの國に屬するのである。

この火山は如何なる火山脈に屬するものか明瞭でないが、多分略南北の方向に延びて南は日本海中の鬱陵島に達するものゝ如く、北は小興安嶺中の火山群と關係があるのだらうとの説がある。

和爾冬吉火山群 小興安嶺の中央部にあつて墨爾根の東方約百籽の邊にある。大小二十有餘の火山を有する一大火山群で、中でも烏雲和爾冬吉火山は最も著名であるが高さは五百米内外に過ぎない。比較的新しい噴火の歴史を有し、玄武岩質の熔岩流によつて出來た堰塞湖を有する。尙墨爾根の西方にはシャター山があり、東北にはコロナンその他の火山がある。

(三) 平野

滿洲平野 大小興安嶺と長白山脈とによつて圍まれる菱形の大平野は、南北七〇〇籽、東西四〇〇籽の所謂滿洲大平野で、その面積は殆どわが内地全體に匹敵する。この平野はその性質によつて二大別することが出来る。一つは河川湖沼の沖積平野で中部以東を占め、一つは砂粒の堆積著しき半沙漠的の草原で、大興安嶺の東側に沿ふて幅約一五〇籽の帯をなしてゐる。

沖積平野は嫩江・松花江・遼河等の沿岸にあつて、その海拔は奉天附近で四九米、ハルビン附近で一五〇米である。土質は河成の砂粒から成り、これに黄土 Loess を混じて厚さ數米か



北 滿 平 野

ら數十米に達し、多少アルカリ性を呈するが大豆・高粱等には最も好適してゐる。滿蒙に於ける最も重要な生産地域で、穀倉と名づけられ寶庫と稱せられるのも無理は無い。就中嫩江流域は最も肥沃であると稱せられるが、まだ充分に開拓されてゐない。

草原は乾燥氣候のため出來た風成砂層で覆はれた地で、砂丘が到る處に發達し、多くは不毛の地で一部分に僅かに禾本科その他の矮草を見るのみである。地表には往々曹達や食鹽の結晶してゐる所もあつて多くは耕作に適しない。

其の他の平野 黒龍江の本流に沿ふて愛琿の南方に小平野があり、松花江の下流からウスリー江の下流にも稍広い平野がある。又興凱湖の北にも小平野があるが、これ等は何れも老年期の臺地で取りまかれた低原で、流水が常に停滯して時には沼澤を形成し沮洳地となつてゐる。次に蒙古高原の北部、呼倫池附近も海拔五百米以下の平地であるが、これは乾燥した不毛の沙漠である。

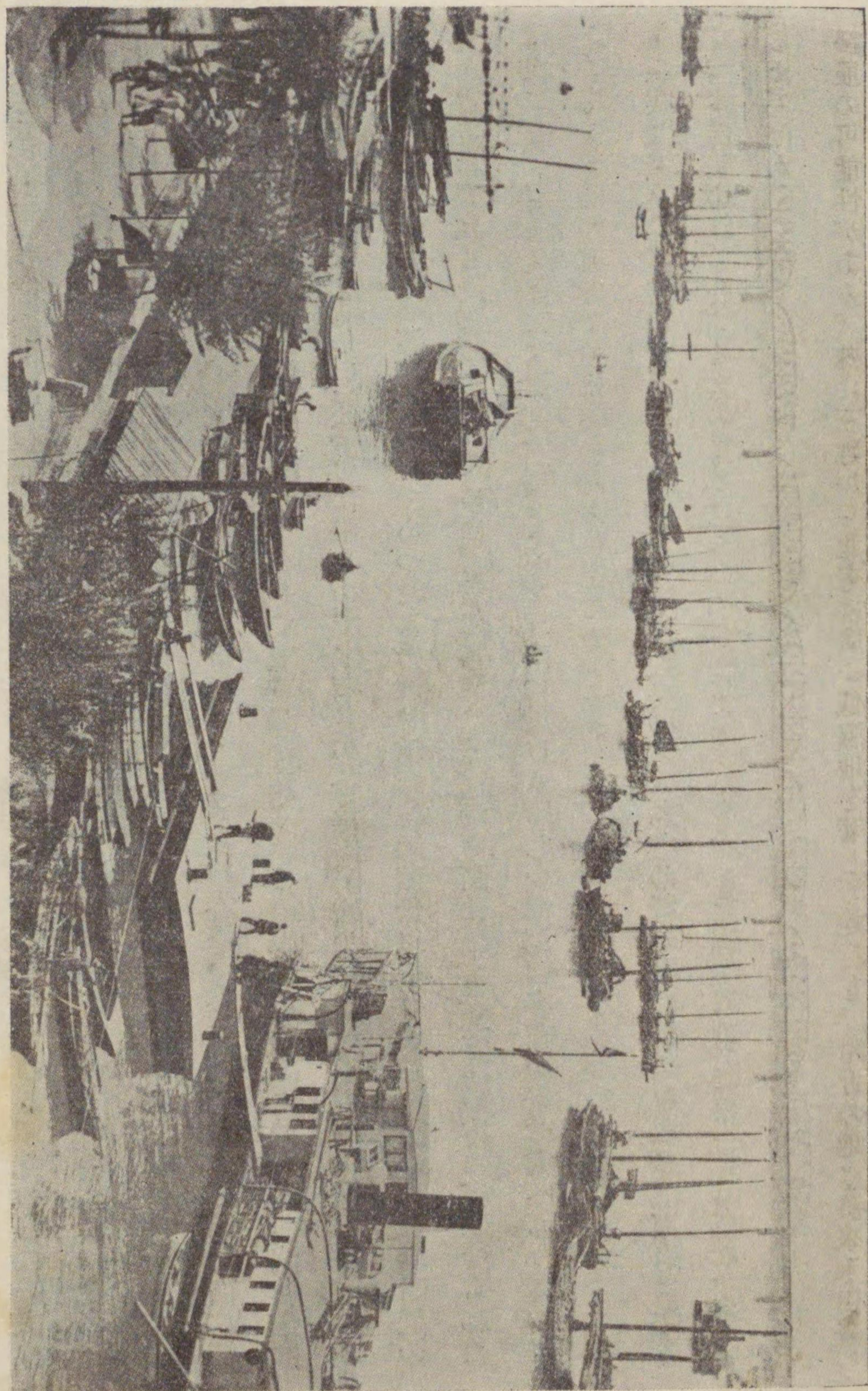
第三節 水 系

黒龍江 一大彎形を描いて滿蒙の全北境を流るゝもので、上流はアルグン河と稱して蒙古高原に發し、シベリヤのヤブロノイ山脈に發するシルカ川を合せて後を黒龍江と稱する。黒龍江

は古史に黒水と稱せられるが、それは水中に腐植物を澤山含んでゐて黒色を呈するからであつて、流域に肥沃な黒土即ちチエルノーゼム (Chernozems) が廣く分布してゐることがわかる。ロシヤ人はアムール川 (River Amur) と呼んでゐる。

黒龍江には多くの支流があるが、中流以上では左岸即ちシベリヤ側に大きいものが多く、滿蒙側には概ね山嶺が河岸に迫つてゐる。然るに下流に至ると全くこれに反し、右岸から松花江ウスリー江の二大支流を入れ、それより國境を離れてシベリヤを北流し遂にオホーツク海に注いでゐる。江の全長四三二〇浬中、三九八〇浬までは小汽船を通ずるが、毎年十月中旬から翌年五月頃までは結氷する缺點がある。

松花江は支流中の最大なもので、合流點に於ける水量は本流と大差ない程である。殆ど滿蒙全域の三分の二を潤はし水運の便も亦頗る大である。その源流は朝鮮との境上に聳える白頭山より出で、北西流して伯都訥の北方に至るや、大興安嶺の北端東側に發源する嫩江と殆ど正面衝突的に相合し、それより直角に東北流してこゝに丁字形が描かれる。嫩江の全長は八〇〇浬で、本流が嫩江に合する迄の長さは五〇〇浬である。而して兩者の合流後黒龍江の本流に合するまでは六〇〇浬で、その間は水運の便最もよく、吉林・黒龍江兩省の大動脈として偉大なる發展の可能性がある。殊に三姓から北東は廣い低濕地を著しく蛇行し、附近の地は將來水田發



江花松の近附ニセルハ

達の最も著しかるべきを豫想されてゐる。三姓附近で南から来る支流は牡丹江である。ウスリー江は興凱湖に發して北々東に流れ、ロシアとの境界をなしてゐる。その谷は一直線をなす構造谷で、谷底は濕地をなし河流は極めて緩かである。

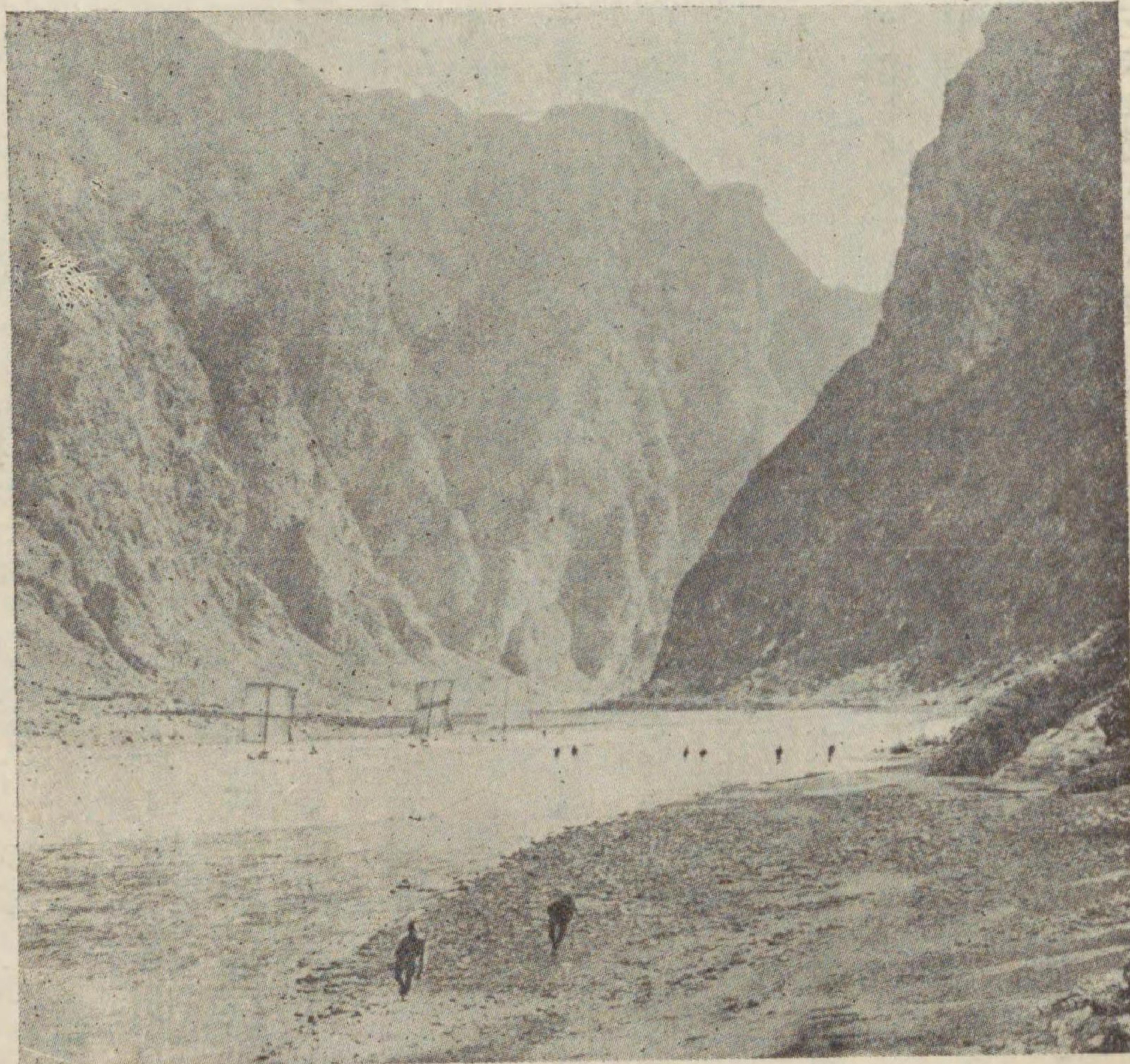
遼河 奉天省及び熱河省の大部は遼河リヤオホの流域である。上流は西遼河と稱し、熱河省の西境大興安嶺の東側に發源し、鄭家屯の東方で東から来る東遼河を合せ、急激な曲流をなして南に轉向し、更に東側から渾河等の支流を合せて遼東灣に注ぐ。この鄭家屯附近に於ける曲流は嫩江の直角的な轉向と著しい對稱をなすもので、兩者の分水界が緩かな臺地から成る點を考へると恐らく嫩江は元來遼河の上流であつたものが、第四紀洪積世以後に於て現在の分水界附近の土地の隆起と砂丘の發達とのために、遂に嫩江は遼河から斷たれて松花江の方に掠奪せられたものであらう。それには嫩江のチハル以南に於ける夥しい沼澤の存在が併せ考へられるのである。

遼河は全長二五四〇浬に及び、河口から鄭家屯まで九〇〇浬の間は民船を通じ、河口は潮汐の干満が大であるから、滿潮時には河口から五七浬の地點まで航洋汽船の遡江が出来る。營口に於て干潮時の水深平均十二米、最深所は二十一米に達するが、河口には土砂の堆積が甚しく二三米に過ぎない處もある。この河も冬季は氷結するが、それでも來往の民船は一年に一萬隻

を超え、南滿に於ける大動脈として偉大な使命を果しつつある。

西遼河の兩岸には多くの尻無川がある。これ等は何れも元來西遼河に流れ込んで居たもので、今もその河跡を残してゐるが、氣候が乾燥したために水量が減じ、又砂丘のために堰き止められて尻無川となつたものである。

大凌河 熱河省南部の水を集め、遼河と同じ様な大彎曲をなして錦州の東方で遼東灣に注いでゐる。全長五六〇浬



中約一二〇軒の間は民船を通ずる。尙熱河省の南部、熱河盆地附近の水は溧河ラハとなつて南東流し支那の河北省に入つてゐる。

鴨綠江 朝鮮との境界を流るゝもので源を白頭山に發し、所々に著しい嵌入蛇曲 Entrenched Meander をなし、概して河谷狭く流れも亦急である。河幅も新義州に於て二軒に過ぎない。全長約五〇〇軒で河口にはデルタの發達が著しいが、汽船の通航は新義州以上に及ばず、民船は二七〇軒を遡るが水量も少く岩礁が多いので不便である。たゞ筏流しは随分盛に行はれてゐる。

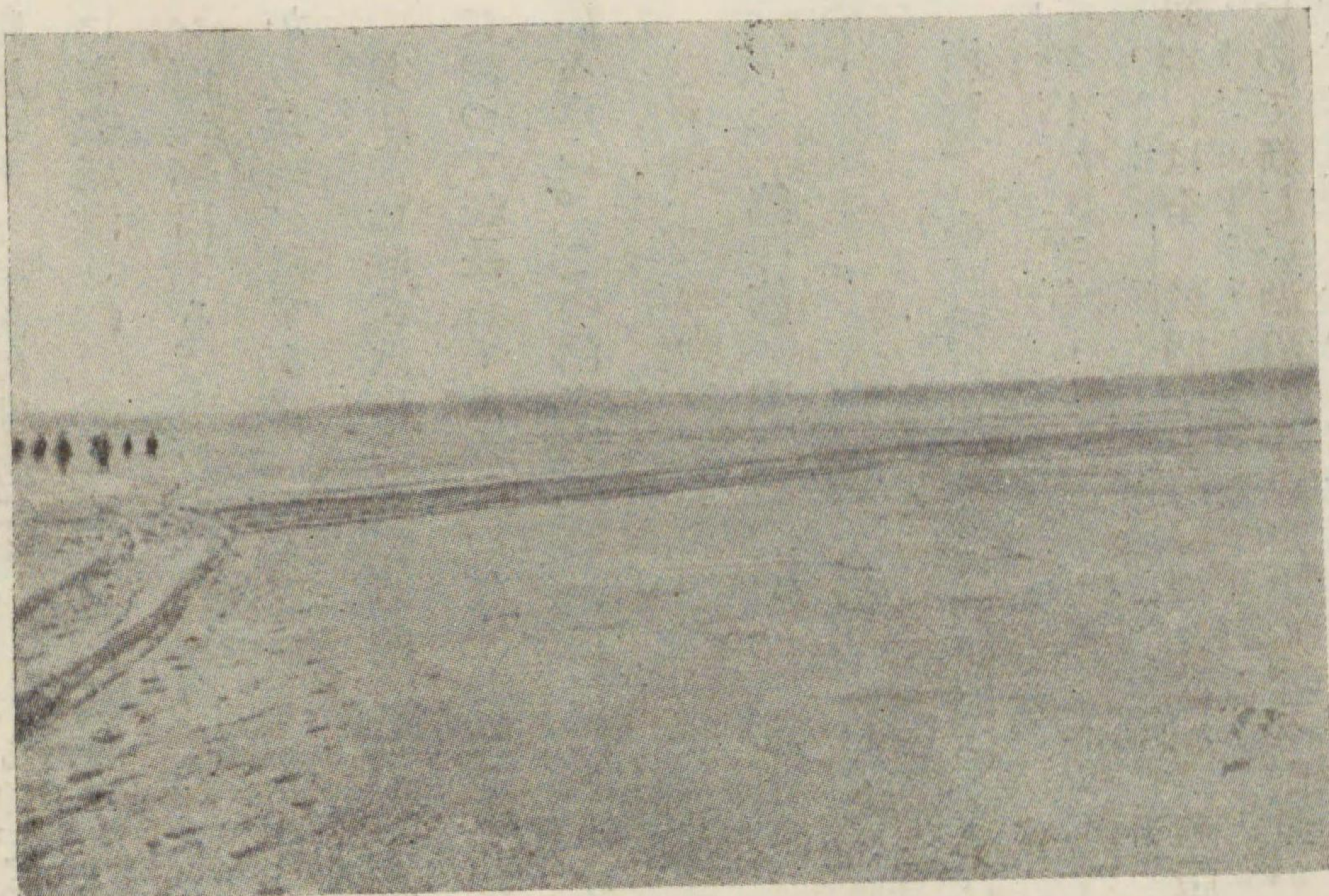
豆滿江 又圖們江トウメンチヤンといふ。白頭山に發して鴨綠江と反對の方向に流れ、延吉盆地の水を受けると急角度に轉向して日本海に向つてゐる。この轉向は斷層線に關係があるらしい。全長約三百軒であるが處々に淺瀬や急湍があるので舟運の便が無い。

湖沼 湖沼の主なものには北滿洲に多く、東に興凱湖・鏡泊湖があり、西に呼伦池・貝爾池ボイルチがある。又中央平野のチ、ハル附近には多數の沼澤があつて、雨が多ければ水を湛へるが雨の少い時期には全く乾涸する。一體に滿洲は地體が舊いので多くの湖沼は消滅し盡し、火山活動が少いので新しい湖沼の生成が少く、又雨量が少く空氣が乾燥してゐるので瀦水を保つことが出来ない等のために、湖沼が甚だ少いのである。消滅した湖底には天然曹達の堆積してゐるものも

少くない。

興凱湖はシベリヤとの境界上にあつて北半だけが滿蒙に屬し、北邊に接して小興凱湖が附屬してゐる。これは砂丘のために分離したものである。水は甚だ淺くて黄濁してゐるが魚類の産は多い。陥没地帯の低處に瀦水したものである。鏡泊湖は牡丹江の上流にあつて、新しい玄武岩質熔岩流のために河床を閉塞せられて出來た堰塞湖である。長さ四十軒、元の河岸の小丘は今も残つて數個の島嶼となつてゐる。水は淺くて濁濁してゐる。出口には高さ二十餘米の瀑布がある。

呼伦池ホルンチは蒙古高原中の盆地に水の溜つたもので、昔は橢圓形の大湖であつたが近時著しく縮小した。水深一米内外で水は白く濁つてゐる。



天然曹達の堆積せしむる湖

斷層による陥落の凹所に瀦水したものであるが南西風によつて絶えず吹き送られる砂粒のために漸次埋没され、遂にアルグン河との連絡も断たれて無口湖となつた。但し増水期にはアルグン河に排出する。南から貝爾池の水を受け、南西からケルレン川を容れてゐる。鹹水湖で湖岸から食鹽を産する。

貝爾池は呼倫池の南百籽の處にある。面積は前者の二倍あり、楕圓形をなして南西から北東に向つて延長してゐる。やはり斷層湖であつて水深は平均九米、水は稍く清く棲息する魚族は頗る多い。この湖も流砂のために漸次縮小しつつある。

第四節 海岸

海岸線 全面積に比すれば海岸線の延長は極めて少く、たゞ黄海及び渤海灣に沿つて一一〇〇籽内外に過ぎない。黄海の岸は遼東半島の東側で、鴨綠江の主要流路を延長した方向に走り、明かに北東—南西の構造線に一致してゐる。所々に小屈曲があつて溺れ谷の形を呈してゐるが、この地方が沈降したのは古い地質時代のこと、現在は却つて陸地が隆起しつつあるから、沿岸には幅二籽から六籽位もある沿岸洲 *Off shore bars* が發達し、その一部には盛に蘆を生

じてゐるし、又陸の方面には幅十籽以上もある沿岸平野 *Coastal plains* を有し、處によつて陸化した島嶼や海蝕段丘なども見られる。渤海灣岸の方面も大體同様で、その隆起運動は今も尙續いてゐることは、蓋平附近の鹽田が次第に海水の流れ込まなくなるため、年々海中に突き出して作らねばならぬといふ事實からも證明せられる。

島嶼 遼東半島の沿岸その他に合計約七十個の島嶼があるがあまり大きいものは無い。就中最も重要なものは關東州及びその附近にある廣鹿島・長山列島・海洋島・長興島等である。大きい島には住民があるが小島には無人島も多い。陸地に遠い島は斷層崖をめぐらすものも少なくないが、海岸にあるものは何れも地盤隆起のために砂洲の發達が著しく、又陸繋島 *Land-tied island* を形成するものも澤山ある。

第五節 地質

南滿洲 東半は山地、西半は平野をなしてゐるが、山地には古い時代の片麻岩や花崗岩が多く、新しい火成岩では玄武岩が多い。平地の部は主として沖積層から成り、最新の堆積に成るもので蒙古から飛んで來た沙漠砂も混じてゐる。

滿洲の土質で最も特色あるものは黄土である。微細な石英及び陶土質の粉末から成り、多少の酸化鐵を含むため黄色を呈するもので、最も廣く分布し、處によつて數百米の厚さに覆つてゐる。粘り氣が無いから雨天には忽ち泥濘膝を没し、晴天には文字通りの黄塵萬丈となる。木の葉も草の芽も、ために悉く黄色となり、河水も甚しく混濁し、黄海の水色も亦この黄土の浮游物質によつて黄色となつたものである。この黄塵は時として高く冲天に舞ひ上り、北西風に乘じて遠く日本内地に襲ひ來ることがあつて、北九州から中國の各地に於て太陽の霞んで見えることが屢々である。

黄土の風成層であることは、(一)水成岩の様な層理が無いこと、(二)基底土地の高低にかゝはらず一様に堆積してゐること、(三)含有される化石が陸上生物に限られてゐること等によつて證明することが出来る。その質はひどく瘦せてゐる様に考へる人もあるが、事實は反對に頗る肥沃である。たゞ雨の少い地方にあつては乾燥のため植物を生じないのであるから、適當に人工灌溉の方法を工夫すれば、殆ど無肥料で農業が行はれるのである。

花崗岩と片麻岩とは吉林・奉天二省の山地一帯に廣く分布してゐるが、玄武岩は白頭山附近にあるのみである。新期火成岩としては尙粗面岩や玢岩もあるけれどもその分布はあまり廣くない。かく新期火成岩の少いことは、やがて金屬鑛床の貧弱なるを物語るものである。何とな

れば銀・銅・鐵・鉛・亞鉛等の鑛床は、よく最新の火成岩に伴ふて存在するものだからである。併し非金屬鑛物は割合に豊富で、殊に石炭は有名である。南滿の石炭は地質上三種類あつて、本溪湖・煙臺等にある無煙炭は古生代の二疊紀・石炭紀に屬し、西安等の瀝靑炭は中生代、而して最も豊富な撫順炭は第三紀に屬する有煙炭である。尙これ等鑛産に就ては後章に於て更に詳述するであらう。

北滿洲 東支鐵道沿線、松花江及び黑龍江の沿岸附近の外は、まだ充分踏査されてゐないので、地質學上からは暗黒世界である。西部の大興安嶺は大部分古期の岩石、即ち片麻岩・結晶片岩及び花崗岩から成り、その東部には新期の玄武岩によつて廣く覆はれた高臺がある。この山脈は大斷層によつて出來たものと考へられてゐたが、最近の調査によるとやはり一大褶曲山脈で、その地層の走向は略山脈の方向と一致し、東方の陥落は數階の小走向斷層の累積の結果であらうと思はれるに至つた。而して山脈の西方は褶曲の谷であるべきだが、そこは西方から吹き送られた砂粒によつて充填せられて臺地となつたものである。

北部の小興安嶺は主に玄武岩質の低い火山岩臺地で、一部には花崗岩や變成岩もある。東部の完達山脈も東支鐵道附近は玄武岩臺地であるが北部は變成岩より成り、所々に中生代岩層も露出して炭層を挾在する。而して中央の平原は主に沖積層から成つてゐる。

鑛物としては金と石炭とが稍知られてゐるのみである。金は黒龍江・松花江・牡丹江の各流域に亘つて所々に砂金が發見されてゐる。尙將來探檢の進むにつれて山金その他も發見せられるかも知れぬ。

遼西區域 遼河以西の地、及び熱河省方面を包含する地域は、南西部に丘陵・山地が多く、北部は主に低原となつてゐる。岩石の種類や性質は大體南滿洲と同様であるが、中生代の侏羅紀層が廣く發達し、又玄武岩・安山岩・玢岩等の噴出が到る處に見られるのがその特色である。就中大興安嶺中にある玄武岩の臺地は頗る廣大なものである。

鑛物の存在はまだ精査されてゐないが、中生層に伴ふ石炭は稍有望で、赤峰及び熱河附近に褐炭や瀝靑炭が知られ、錦州附近も亦有望である。北部の低地は沖積層及び風成の黄土層であるから鑛産は見られない。

第六節 地體構造

構造線 滿蒙には三種の構造線がある。その第一は北東—南西の線で、主なる山脈とその方向を一にし、滿蒙に於ける最も基礎的な重要な線である。この線は一八六六年に米人バンペリ

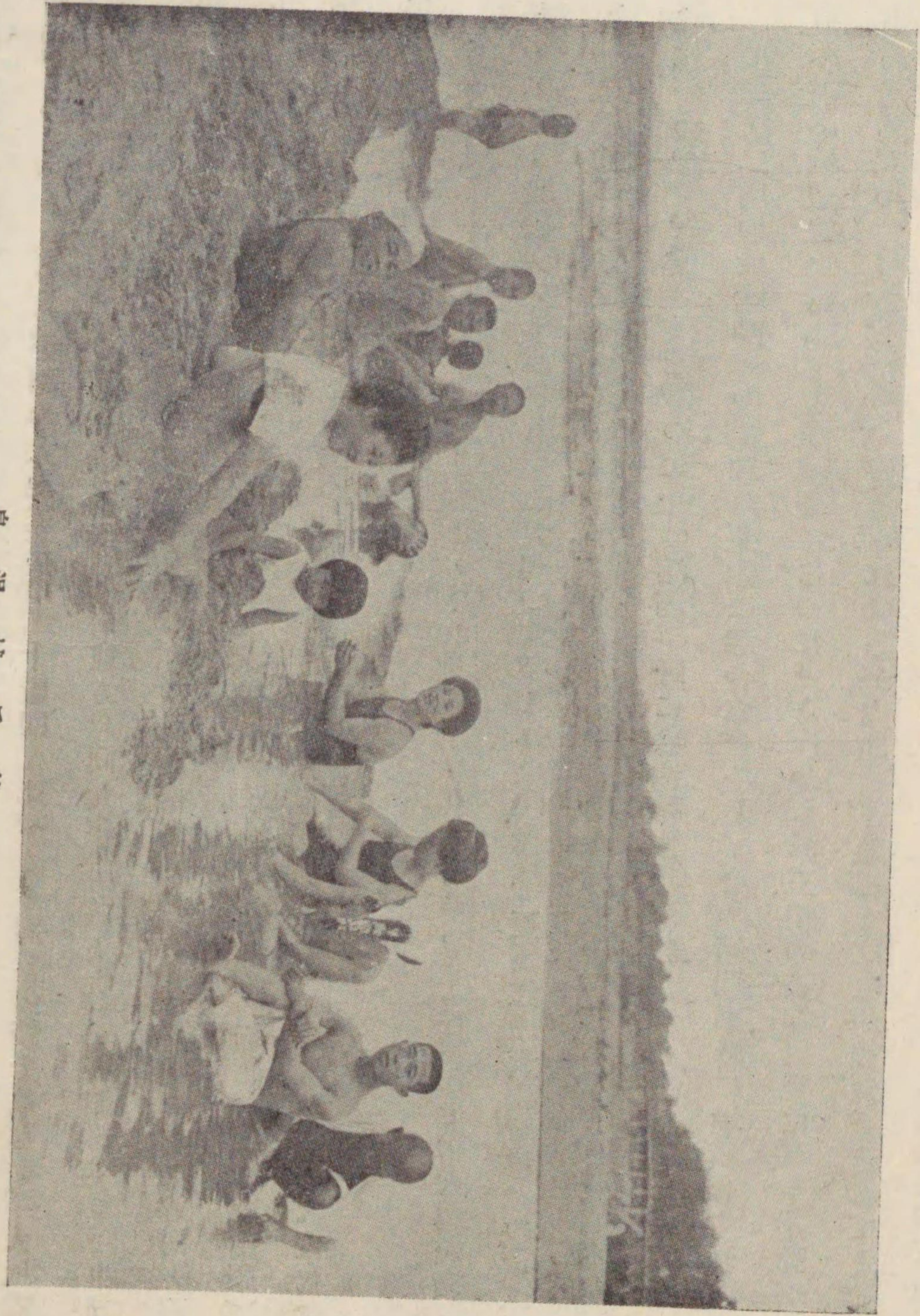
— Pumpelly によつて始めて指摘されたもので、これは廣く東部アジヤの各地に於ける通有の特性と考へられ、支那方向と名づけられてゐる。

第二の方向は北西—南東の方向で朝鮮方向と稱し、第三の方向は東北東—西南西の方向で遼東方向といふ。共に小藤博士によつて命名せられたものである。前者は支那方向と直角に走り、小興安嶺はこれに一致する方向をとつてゐる。又後者は遼東脊梁山脈（本幹山脈）に於て著しくあらはれてゐる。この二つの構造線は比較的新しく、第一の支那方向の成立した後に、局部的の變動によつて生じたものであらうと信じられる。

生成の順序 古生代石炭紀・二疊紀の頃に第一回の地質大變動が襲來して、大興安嶺・長白山脈等の隆起とその中間の大陥没とが起つた。これは鴨綠江・豆滿江の大斷層谷、遼東半島・山東半島の成立、北朝鮮の各山脈、日本群島等の成立と同時代であつたもので、その後暫く靜穩な時代があつて、當時海であつた今の滿洲平野には沈積作用が行はれた。

次で第二回の大變動が中生代白堊紀に起つた。そして今の滿洲平野に堆積せられた侏羅紀層が各種の構造線に沿ふて支離滅裂になつた。それから第三紀の後期以後に又々變動が起り、火山の活動も相當にあつたが、併しそれはわが内地ほど猛烈ではなかつた。そしてその後地盤は尙緩漫に動きつゝあつて、今日も尙局部的に隆起しつゝあるらしい。かの松花江と遼河との分

水界の如きも現に隆起しつつあるものと考へられる。



熊岳城温泉

地震と温泉 滿蒙には地震は極めて少い方で、記録によると一千九百年間に大小約四十回となつてゐる。これをわが國の大地震三百二十數回に比べると同日の談ではない。大地震として稍名高いものは咸豐五年(一八五五)の金州地方、同九年(一八五九)の牛莊附近ニウヂヤンの二回が擧げられるのみである。火山の活動も亦極めて少く、一七二〇年の烏雲和爾冬吉山の噴火と、白頭山に稍疑はしい二回の噴火が記録される外には一度も無い。これは一面には住民が少く文献稀少で且それも散逸したであらうとも考へられるが、併し地形地質の實査上からも新しい噴火はあまり無ささうに考へられる。

温泉も亦わが國に比すれば少い。烏雲和爾冬吉火山の南西麓に二ヶ所、大興安嶺の最高峰索岳爾濟山ユルチの北麓ハロンアルシャン、奉天省の湯崗子・熊岳城・五龍背、遼陽の東方にある湯河沿、大石橋の東方にある湯池、熱河省では凌源の北方に熱水塘があるのみ。これ等何れも火山活動の餘波に相違ないが、要するに滿蒙の地盤は極めて安定してゐると斷ずることが出来る。

第五章 氣候

第一節 概 觀

要説 氣候は大體わが奥羽地方以北に似てゐて、もう一層大陸的で寒暑の差が甚しい。北に進むに従つて冬が長く且寒さも強くなり、河などもすつかり凍るので車馬の通ふ道となるほどである。雨は一體に少いが、主に夏の二三ヶ月の間に降るので、温度の高いのと相俟つて農業を營むには極めて都合がよい。

氣候の特色 滿蒙の氣候は變化に富むのを特色とする。夏と冬と、晝と夜とに大差があるのみでなく、「三寒四溫」と稱して數日毎に寒暖交替する。春と秋とは極めて短く、四月の始めになつて漸く草木が新芽を吹くかと思へば、五月の中頃には氣温が急激に上騰し、六七月は已に盛夏である。そして八月の上旬になるともう秋風が立ちそめ、十月になれば北部では已に初雪の便りがある。そして十一月から翌年の三月までは滿目荒涼たる冬枯の天地で、所謂蟄居期間

なのである。

一日の變化も亦甚しく、夏などは殊に著しいので、わが内地の積りであるとな喰ふことがある。日中は酷熱でも日が没すると急に冷えて、夜半にもなれば戸障子を締め切り、蒲團を被らねば感冒にかゝる恐がある。屋根の上の涼み臺に裸體で寝ころんで、雑談に夜更かしをするといふ様なことは夢にも出来ないことである。

「三寒四溫」は氣壓の變化から來る。北支那大陸に低氣壓が來れば溫暖を感じ、高氣壓が近づけば寒さを覺えるのである。而して滿蒙の地は地形の變化が乏しいので、氣壓の循環も比較的規則正しく繰り返されるから、極めて明瞭に三四日毎に寒暖の交代を來すのである。

冬 冬の寒氣は北海道や樺太に似て、新京（長春）あたりでも零下三十度に降ることは珍らしくない。北部は更に一層甚しい。そしてその季節も相當に長いのであるから、この間は農業などの様な戶外の仕事は出來なくなる。併しそれ故に生活は却つて樂である。何となれば家の内は防寒暖房の設備が行き届いてゐるから、寒さは殆ど知らずに過すことが出来る。故に滿洲に在留する人が冬に日本に歸つて來ると、寒さに堪えられないと云つて急いで逃げて行く。

家の構造は防寒向に出來てゐる。煉瓦造りの厚い壁で、紙の障子などは無論見られぬ。ペーチカとか炕カシとかストーブとかを焚いて、夜も晝も春の様な温かさである。外出には特有の防寒

帽子があり毛皮の外套があり、婦人もマントを着て少しも寒さを感じない。兵士が凍傷にかゝるのは、防寒に不用意であるのと戦争といふ特殊の状況に置かれるからであつて、普通の場合決して凍傷などの心配は無いのである。

夏 最も愉快な時期は夏である。気温は随分昇るけれどもその割合に暑さを感じない。處によつては四十度近く、即ち華氏の百度以上にも昇ることがあるけれども、空気が乾燥してゐて汗の蒸發が盛であるから扇子の必要もあまり感じない。日本の様に蒸し殺されそうな酷暑といふものは無く、流汗淋漓などいふことは経験され難いのである。而も暑いといふのはほんの日中二三時間で、朝夕は常に春秋の再現で、夜などは全く文字通り夏を忘れてしまふ。

天氣 雨量が極めて少く、それも夏の間に豪雨となつて短時間に降るので、よい天氣の續くことは滿蒙の特色である。降りみ降らずみの春雨などいふ情趣は無く、照つたり曇つたりといふ様な陰氣な日は一日も無い。雨の降る時以外は空は常にカラリと晴れ渡つてゐる。山一つも見えぬ廣い平野の、地平線から地平線まで拭つた様な青空一碧、「天高し」といふ言葉が極めて痛切に感じられるのである。大連の快晴日数は年平均百十四日で、函館の二十五日、旭川の十二日に比べると全く同日の談でない。

氣候と農業 滿蒙の氣候と農業との關係に於て特に注意すべきことは、高温期間の短かいこ

と、空氣の乾燥してゐることである。即ち五月頃から九、十月頃までの間は作物の生育に適するが、長い冬の間は殆ど何事も出来ない。そこで一年中可能農業日数は百五十日から二百日位に過ぎないから、作物は特に生育の早いものを選ばなくてはならぬ。併し高温であることと、空氣が乾燥してゐるために無霜期間の長いこととは一般に農作物に有利である。又雨が少く好天氣が續き、日照時間が長くて蒸發が盛であるから、空氣も土地も乾燥してわが國の様な濕潤農法を行ふことは出来ぬ。即ち常に土壤の水濕を蓄積保存することに留意しなければならぬ。例へば秋耕を深くして冬の降水を全部土壤に吸収せしめるとか、微量の雨は却つて土層の毛細管水を聯絡して下層土壤の水分を蒸發せしめるから、降雨後は直ちに土壤の硬皮層を破碎するとか雜草が土壤の水濕を奪取發散せしめるから、常に除草や中耕を怠らぬ様にするとか、種々特別の注意と方法を盡す様にしなければならぬ。

第二節 氣 溫

大連附近 國の南端に位し三方を海に圍まれてゐるので、海洋の影響を受けて氣溫の變化は最も小である。併しわが内地よりは甚しく、最高月と最低月との平均溫度の差は二十六七度に



＊ 結の河遊

及んでゐる。これを年平均温度に於て相似てゐるわが松本又は秋田に比べると、十度以上も多いことになつてゐる。これ全く大陸の影響であると云はねばならぬ。即ち年平均温度では奥羽

地方に似てゐるが、夏は臺灣の如く暑く冬は北海道の如く寒いわけである。

新京附近 新京（長春）は國の略中央に位するので、気温も亦著しく大陸的特質をあらはし、年平均は根室に及ばないが夏はわが九州の如く暖かで、冬の寒さは全くわが國にその例を見出すことが出来ぬ。新京に於ける最低の極は零下三十六度で、酒も醤油も殆ど氷結し盡すほどの寒さであるが、最高の極は旅順・大連よりも高く三八度三に達するので、この高温を利用して農業が盛に營まれる。

北滿洲 ハルビンの年平均温度は新京と大差は無いが、滿洲里に至つては零下二度一を示し、如何に寒い冬の長く續くかを物語つてゐる。而して滿洲里の最低の極は零下四十六度五で、わが全國の最低レコードたる旭川の四十一度より遙かに低

| 測候所 | 年平均 | 七月平均 (日本八月) | 一月平均 |
|----------|--------|-------------|----------|
| 旅大 (秋奉新) | 10.1 | 28.2 | -8.3 |
| 順連 (秋奉新) | 10.3 | 28.2 | -8.9 |
| 天京 (根室) | (10.4) | (23.6) | (-1.6) |
| 天京 (根室) | 7.0 | 30.3 | -19.1 |
| 天京 (根室) | 4.4 | 23.3 | -22.8 |
| ハルビン | (5.5) | (17.0) | × (-5.4) |
| ハルビン | 3.1 | 22.3 | -20.1 |
| 滿洲里 (敷香) | -2.1 | 20.2 | -25.7 |
| 滿洲里 (敷香) | (-0.2) | (15.6) | (-16.2) |

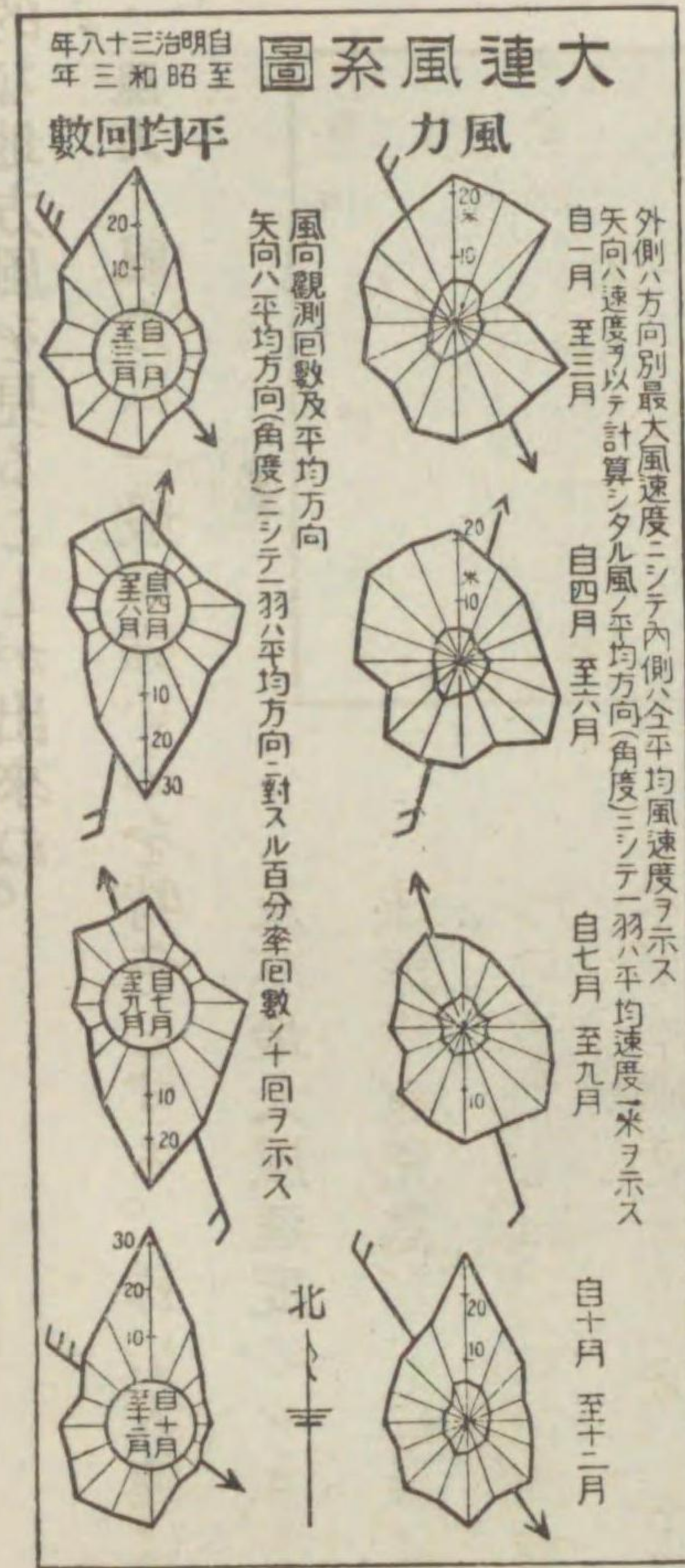
滿蒙主要地 (日本對照) 気温表
× 印 二月



いが夏の温度は相當高く、高極は三八度三分で臺灣でなくては見られぬほどの暑さに上つてゐる。若しこの地方が海洋性の氣候であつたならば、全然農業などを營むことは出來ないであらうが、氣温の變化の甚しいといふことは誠に都合のよいことである。

第三節 風

氣壓と風向 滿蒙は大體に於て東亞季節風帯の中にあるが故に、夏と冬とで氣壓の配置が相反し、風向も随つて反對になつてゐる。即ち七月には中央アジヤ方面に低氣壓があつて北太平洋が洋高氣壓となるので、風向概ね東南となり、一月にはこれと反對に北太平洋に低氣壓を生じ、シベリヤの中央部が高氣壓となるから風は北西の方向が最も多くなる。而して一般に地形が單調であるから氣壓配置の變化も規則正しく、風向も亦各地大差がなくて、東部及び西南部の山地を除けば概して局部



じ、シベリヤの中央部が高氣壓となるから風は北西の方向が最も多くなる。而して一般に地形が單調であるから氣壓配置の變化も規則正しく、風向も亦各地大差がなくて、東部及び西南部の山地を除けば概して局部

的な地方風を見ることが出來ぬ。

風力 風力は一般に強いのを特色とする。殊に大連は最も強く、一年平均の風速毎秒五米に及び最大風速度のレコードは四十米となつてゐる。これは勿論琉球や鹿児島などに及ばないけれども、毎日の様に強風の吹き

つゝのことは、わが内地では見られぬことである。營口は一ヶ年平均風速三・二米、奉天は一・八米、新京は二・八米で、概して内陸部は海岸よりも小であるが、午後になれば毎日強い風の吹くのは何處でも殆ど同様である。

第四節 湿度と雨

湿度 空氣は一般に乾燥して居て、年平均の湿度は大連及び營口は六六、奉天は六四、新京は六七である。これを臺灣の八

〇内外、内地の七五内外と比べると著しく低い。殊に奉天では最小極は一に達したことがある。これは多濕に慣れた邦人にとつては幾分乾き過ぎる感がある

| 測候所 | 年平均湿度 | 最小湿度 | 年雨量 | 七、八、九月雨量 | 二月雨量 |
|------|-------|------|-----|----------|------|
| 旅順 | 70 | 12 | 568 | 377 | 8 |
| 大連 | 66 | 9 | 648 | 420 | 10 |
| 營口 | 66 | 8 | 628 | 383 | 7 |
| 奉天 | 64 | 1 | 646 | 388 | 7 |
| 新京 | 67 | 9 | 662 | 375 | 7 |
| ハルビン | — | — | 580 | 390 | 5 |
| 滿洲里 | — | — | 229 | 146 | 2 |

湿度及雨量表

けれども、そのために寒暑共に割合に凌ぎ易いのである。何となれば暑い時には空氣が乾燥してゐれば皮膚から汗の蒸發が盛で、そのため身體から潜熱を奪ふので著しく涼しく感じるし、



蒙 古 砂 漠

冬の寒い時には乾燥した空氣は濕つた空氣よりも熱の傳導がわるいから、比較的暖く感ぜしめるわけである。人體に最も適する濕度は六十乃至七十であると云はれてゐる。

雨量 概して少

く年量平均六百耗内外で、最大は新京の六六三耗、最小は滿洲里の二二九耗である。六百耗と云へば臺灣では一日の雨量にさへも見られる程で、わが國にはこれに匹敵する寡雨地は全く見

ることが出来ぬ。而してこの乏しい雨量の大部が七八九の三ヶ月間に降り盡し、その他の時期には殆ど降らないのであるから、随つて雪の量は極めて少く、積雪を見ることは稀である。雨量の少い蒙古方面が廣漠たる沙漠をなし、砂丘の連続せる不毛の荒野たるは勿論のことである。

降水日數 雨量が少い上に降水日數も亦極めて少い。わが國に於ける春雨とか時雨とかいふ様な微雨細雨の降ることは少くて、雨と云へば概ね短時間に降る強雨なのである。故に雨天と云つても終日終夜降り續くといふ様なことは少いのであるが、その雨天日數も新京が百七日、奉天が九十二日、大連に至つては實に七十八日しかない。これを仙臺の百五十三日、函館の百九十三日、旭川の二百十三日等に比べると全くその半數にも満たないのである。そしてその一面には快晴の日が極めて多いことは前にも記した如く、殊に春秋の候は天空一點の雲なく、空氣亦乾燥して涼風徐ろに吹き來り、實に滿洲でなくては味へぬ爽快を覺えるのである。

第五節 特殊現象

霾ばい これは所謂黃塵である。微細な黄色の砂が風のため空中に捲き上るのである。これは冬

季酷寒のために土壤が凍結し、早春暖氣に逢つて極めて微細に粉碎されたもので、三月頃には南部に出來たものが南風によつて北に送られ、四月以後は北部に出來たものが北西風に吹き送られ、屢わが國にも襲來することは已に述べた通りである。わが國へ來るものは殆ど顯微鏡的な細塵に限られるが、滿洲に於てはもつと粗大なものもあつて、ひどい時は天地晦冥咫尺を辨せず、白晝點燈を要することがあり、鳥も樹木や家屋に衝突して死ぬるものが多く、目も口も開けられない程である。併し土民はこれを豊年の兆だと云つてゐる。蓋し河邊に堆積した肥沃な土壤が、廣く荒野に散布されるからであらう。

光學的現象 滿洲平野に於ては夏にミラーヅ現象を起すことが多い。これは廣漠たる平野が日光の直射を受けて、靜穩な空氣に粗密の層を生ずるからで、遠方の木や家が倒さに映つて見え、湖水があるかと思つて近づいて見れば何も無いといふ様な現象である。

又冬期酷寒の夜などに偶々無風のことがあると、空中に細氷の層を生じて光線のジフラクシヨンを起し、街燈の一つ一つから天空に向つて垂直の光を發し、光柱天に向つて簇立して壯觀實に言語に絶することがある。

第六章 住民

第一節 種族

要説 滿洲の原住民は滿洲族で、嘗て清朝を興して都を今の北平に移したが、その故郷に於ては却つて著しくその數を減じ、後に移住した漢族によつて農商の實權を握られ、今は漢族の方が大部分を占むるに至つた。そして西部一帯の地は蒙古族の占居する處であつたが、この地方にも漢族はしきりに移住して勢力を張る様になつた。東部には朝鮮族の移住が近年殊に著しい。北滿にはロシヤ人、南滿にはわが内地人の勢力が盛であるが、數に於てはまだ微々たるものである。併し内地人の移住は今後大に盛になるであらう。

先史民族 先史民族の遺跡については、南滿方面に於て日本人による多少の研究があるのみで、まだ不明の點が頗る多いが、今日までに判明した處を綜合すると、遺跡には貝塚・遺物包

含層・積み石塚・石礪(ドルメン)・石柱・洞窟等がある。貝塚は關東州の海岸附近にあるがあまり廣大なものはない。遺物包含層は旅順から長春までの各地に點在し、遺物は貝塚と同様で時に支那製の金屬類を見出す場合がある。積み石塚は旅順及び安奉線方面にあつて石器時代に屬し、石礪即ちドルメンと稱して石のテーブルの形をしたものは關東州の亮甲店から北は通化の邊まで點在し、多分石器時代の後期に屬するであらうといふ。石柱といふのは孤立した石の柱で山間地帯に往々存在し、歐洲に於けるメンヒルに類してゐる。又洞窟は錦州附近の山間に發見せられて土石器を掘り出し、又安奉線の沿道にも多數存在するがまだ充分研究せられてゐない。

遺物には石器・土器・骨角器類の外に、周漢時代の古錢や銅鏃などを出す、これを通觀すると奉天以北には打製石器を出す、以南には純磨製石器しか見られないし、石鏃の如きも南北全く型式を異にしてゐる。そこで八木獎三郎氏はこの兩者を別派の民族と認め、北派は古く北滿洲に擴がつた一民族であり、南派は元支那本部の黃河流域に住んでゐた民族が、漢族の發展に押されて遼東半島へ渡つたものであらうと云つてゐる。併し兩者の土石器には一致點も相當にあるので、鳥居博士やアンダーソン氏の如きはこれを一民族と認め、ツングース族若くは漢民族の祖先であらうと論じてゐる。

歴史民族 歴史時代に入つて最も古い文献に見えた種族は肅慎族である。それは元來周の北方即ち今の熱河省あたりに住んでゐた民族の名であらうが、後にはすつと北方の古民族をも肅慎と呼ぶ様になつた。わが阿部比羅夫が征伐した國も亦肅慎と呼ばれてゐた。その後周の末頃に東胡族の名が見え、それが滿洲に逃げ込んで烏桓・鮮卑など呼ばれる様になつた。

次で支那本部から漢族のために追はれて來た民族に扶餘及び高句麗がある。これは滿洲最古の文化民族と云はれるが、恐らく漢族と接近して居たために文化が進展したものであらう。それから下つて靺鞨といふ種族がある。それは七部族に分れてゐたといふが、恐らく種々の民族を包含する名であらう。その一派の建てた渤海國は文化の進んだ國であつてわが國へも朝貢したことがある。然るにその後東胡族から出た契丹が南滿洲から北支那に擴がつて遼と稱し、次でこの遼を亡ぼして金の國を建てたのが北滿の地に興つた女真族で、この女真是肅慎の後で渤海の別族であるといはれるが、後元年のために討滅せられ、明末に再び起つて清國を建てた。併しこの女真族即ち所謂滿洲族は、兵は強かつたが文化は低く、農耕も殆ど原始的であつたため、陸續として移住して來た漢族のために取つて代られ、滿洲族は兵士となつて支那本部に入り込んだが、清が亡んでからは漢族のために壓倒されてその影が薄くなつた。

漢族 現住の民族は漢族が根幹で、これに少數の滿洲族・蒙古族・朝鮮族及び大和民族・ロシ

ヤ人等が混入してゐる。

漢族は總人口の九〇%即ち約二千七百萬人を算する。古くから移住し始めたものであるが、清朝の末頃から殊に甚しくなつた。而して中華民國となり、袁世凱が歿してから後は、北支那の各地は騷亂頻發して寧日なく、軍閥の誅求、匪賊の跳梁年と共に甚しく、天候の變による飢饉も屢々至るといふ有様となつたので、安住の地を求めて河北・山東・山西の各省から滿洲に移住するものが加速度的に増加し、次第に滿洲族及び蒙古族を壓迫して北方奥地に進出するに至つた。そこで古くから移住して來たものは南滿に多くて老漢人と稱し、新しく來たものを新漢人と稱してゐる。その中山東省方面から來たものには農民及び下層労働者が多く、山西省から來たものには財力の裕かな商人が多い。

この種族は人種學上から見ると北支那漢族の特徴を示し、身長の平均は一六三糎、頭形は中頭、頭髮は直毛で黒く皮膚は黄色、容貌は端麗で面長のものが多い。性質は一般に悠長で吞氣で忍耐力が強いが、これは廣大な平野、單調な自然の中に育てられて來たからであらう。自利の念は強いが國家觀念は乏しく、利益のためには随分鞏固な團結もつくるが、公共心とか社會奉仕とかいふことは見られぬ。これは多年國政が亂れて統一した有機的統制のある國家といふものを經驗して居ないからであらう。老獪で巧智で猜疑心が深く、容易に肚裡を明かにしない

處は日本人と正反對の様であるが、これも一つは異族の接觸が多かつたために培はれた性質かも知れない。一般に陰氣で光明正大の氣象が無く、家屋の構造までが機密を隠蔽するに都合よく出來てゐる。これも馬賊横行の國には當然であらう。強者の前には曲直を問はず一歩二歩と譲り、罵られても辱められても忍耐するが、一度對手の弱點を見付けると猛然と起つて反抗し、時として暴戾殘忍の獸性を暴露することがある。滿洲事變も上海事件も、そうした彼等の特性から起つた點を考慮しなくてはならぬ。そして今後の滿洲國に對する日本人の態度も大に留意を要する處である。

ツングース族 身長は漢族よりも稍小で頭形は廣頭に近く、皮膚は黄白又は淡褐色で顴骨稍々秀で、頭髮は黒く眼は所謂蒙古眼で鬚髯は少い。その中最も文化の進んでゐるのは清朝を建設した滿洲族で、その他にオロチョン・ダウリ・索倫・畢拉爾等の諸族があり、何れも吉林省や黒龍江省北方の山間に散在し、定住して耕作漁獵を營むものもあり、天幕に住し水草を追ふて轉徙する遊牧民もあつてその人口は詳でない。

滿洲族は總人口の一割以下になり、次第に減少する傾向がある。その中清朝時代の官吏や軍人の子孫たるインテリ階級は主に新京・奉天その他の都市に住し、農民は長白山脈方面等の山間僻地に引つ込んでゐる。

蒙古族 多くの分派があるが概して身長は漢族と等しく、頭形は亞廣頭又は廣頭で頭髪は黒い。皮膚は光澤のない黄色又は帶褐色で、顔は偏平で圓く目は蒙古眼である。鼻は低くて鼻翼が廣く、顴骨は突出してゐる。その中興安嶺の東方に住むものは大部分カルカ族で、元の國を建てた成吉思汗もこの種族である。興安嶺以西にはカルマツク・ブリヤート等の諸族が多い。

蒙古族は一般にラマ教を奉じて優柔不斷であり、蒙古包と稱する簡単な天幕に住んで遊牧を事としてゐるが、近時漢族と接觸するものの中には、これに化せられて一地に定住し、半農半牧の生活を營むものも少くない。

日鮮族 大和民族は主として日露戦争後に移住したもので、最南端の關東州を中心として滿鐵の沿線各地にある都市に住んでゐる。日支條約によつて土地商租權が得られながら、事實に於て支那政府の拒否にあつて居たために、租借地以外に發展することが出来ないで在住者僅かに二十餘萬に過ぎず、それも主として滿鐵關係者に限られてゐた。併し今後は滿洲國民として漢族と同等の權利が認められるから、廣く各方面に集團的の移住も行はれるであらう。

朝鮮族は各地に廣く分布するが、就中間島方面に最も多く、この地方住民の八割を占めてゐる。これ等は何れも農業に従事してゐるが、中には滿鐵沿線で商業を營むものもある。その總數は恐らく百萬を越えてゐるであらう。

第二節 人口

人口 滿蒙は支那の他の部分と同様まだ戸籍といふものもなく、又センサスの行はれたことも無いから正確な人口は知る由もないが、推測によると大約三千三百萬位であらう。中華民國内政部發表の一九三一年人口は左表の通りである。(興安省は各省に包含)

| | |
|---------|--------|
| 奉 天 省 | 一五、二二三 |
| 吉 林 省 | 七、六三五 |
| 黑 龍 江 省 | 三、七二五 |
| 熱 河 省 | 六、五九四 |
| 合 計 | 三三、一八七 |

又滿鐵調査課に於て、支那政府の調査結果と農産作柄調査の數字を基として推定した處によると、一九三〇年の人口は、(括弧内は別途推算によるもの、興安省は各省に包含)

| | |
|-------|----------|
| 奉 天 省 | 一四、九八八 |
| | (一五、一五一) |

| | |
|------|----------------|
| 吉林省 | 九、〇七六（九、一九二） |
| 黑龍江省 | 五、一三四（五、二三一） |
| 熱河省 | 四、五〇〇（四、五〇〇） |
| 合計 | 三三、六九八（三四、〇七四） |

人口の構成 この三千三百餘萬の人口が如何なる構成を有するかは頗る明瞭を缺くが、その性別構成は恐らく男子の数が著しく女子に超過するであらうと思はれる。何となればその多數が近年支那本部からの移住者であり、而して移住者はその八割以上が男子だからである。又職業構成に就ては農民が最多數を占め、鑛業その他の勞働者がこれに次ぐであらう。年齢も亦壯年者の數が比較的多數であらうと考へられるが、これ等は悉く推定に止まり何等確たる根據は無い。併し大體から見て新開地であり移民國であることは云ふ迄も無いから、その特質も自ら推測され得る譯である。

民族構成に就ても確たることは不明であるが、大多數は漢族であつて滿洲族は全體の一〇%以下であらうと推定せられる。わが内地人の數は昭和四年末に於て關東州内に一〇七、三六四、滿鐵附屬地に九五、六五八、南滿各領事館管轄區域に四、九三九、北滿及東蒙古各領事館管内に七、九五四で、總計二一五、九一五人となる。又朝鮮人の在住者は昭和三年末領事館の

| 年次 | 人口 | 指數 |
|-------|--------|-----|
| 1907 | 16.778 | 100 |
| 1908 | 17.156 | 102 |
| 1909 | 17.554 | 105 |
| 1910 | 17.942 | 107 |
| 1911 | 18.352 | 109 |
| 1912 | 18.774 | 112 |
| 1913 | 19.207 | 114 |
| 1914 | 19.653 | 117 |
| 1915 | 20.112 | 120 |
| 1916 | 20.583 | 123 |
| 1917 | 21.069 | 126 |
| 1918 | 21.568 | 129 |
| 1919 | 22.082 | 132 |
| 1920 | 22.611 | 135 |
| 1921 | 23.156 | 138 |
| 1922 | 23.717 | 141 |
| 1923 | 24.294 | 145 |
| 1924 | 24.889 | 148 |
| 1925 | 25.502 | 152 |
| 1926 | 26.133 | 156 |
| 1927 | 26.784 | 160 |
| 1928 | 28.034 | 167 |
| 1930× | 29.198 | 174 |

人口増加表（熱河省ヲ除ク）

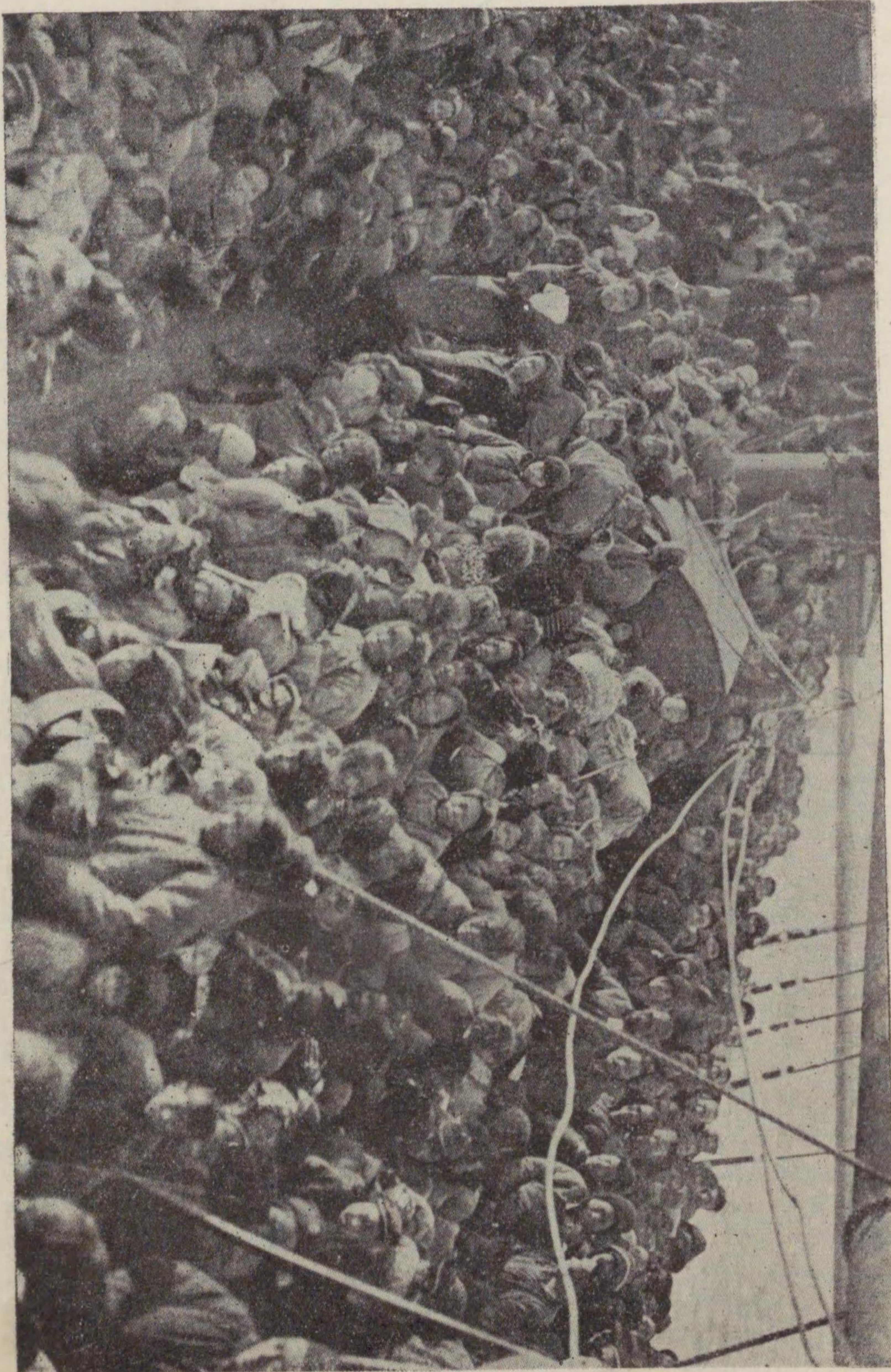
×六月末現在

率は世界一の移民國たるブラジルよりも大であつて、平均千人に付三十二人といふ驚くべき數字である。これ全く移民入國の

調査によれば八九三、〇〇〇であるが、實數はこれよりも多く恐らく百萬を超えてゐるであらうと稱せられる。

人口増加 年々の人口増加は極めて著しいものがある。今滿鐵調査課の推定した毎年末人口の統計を見ると上表の如く、一九〇七年から二十三年間に七割四分を増加してゐる。この増加

多數なるによることは勿論で、この中出生死亡の差による自然増加が何程あるかは明瞭でないが、關東州のみに就ての調査によると出生は千人に付二四・九、死亡は一七・六で、その差七・三になつてゐるから、全國の數字も亦恐らくこれと大差はあるまいと思ふ。して見るとこれは自然増加率としては寧ろ低い方であるから、これによつても移入民の多いことは推測し得られる。



民 移 東 山 の 上 坂 甲

| 年 度 | 入 滿 數 | 離 滿 數 | 定 着 數 | 定 着 率 % |
|-----------|-----------|---------|---------|---------|
| 大 正 十 二 年 | 341,638 | 240,565 | 101,073 | 29.58 |
| 十 三 年 | 384,730 | 200,046 | 184,684 | 48.00 |
| 十 四 年 | 472,978 | 237,746 | 235,232 | 49.73 |
| 十 五 年 | 566,725 | 323,694 | 243,031 | 42.88 |
| 昭 和 二 年 | 1,050,828 | 341,599 | 709,229 | 67.49 |
| 三 年 | 1,089,000 | 578,000 | 511,000 | 46.90 |
| 四 年 | 1,046,291 | 621,897 | 424,394 | 40.56 |

入 滿 移 民 定 着 表

| 仕 出 地 | 到 着 地 | | | | | | 合 計 | 到 着 地 別 百 分 比 |
|---------------|---------|---------|---------|---------|---------|--------|-----------|---------------|
| | 青 島 | 芝 罘 | 龍 口 | 天 津 | 奉 山 線 | 其 他 | | |
| 大 連 | 222,850 | 124,736 | 92,183 | 49,005 | — | 24,173 | 512,947 | 49.0 |
| 營 口 | 2,541 | 310 | 47,532 | 89,759 | — | 8,435 | 148,577 | 14.2 |
| 安 東 | 14,337 | 19,824 | 4,176 | 3,229 | — | 11,991 | 53,557 | 5.1 |
| 奉 天 | — | — | — | — | 331,210 | — | 331,210 | 31.7 |
| 合 計 | 239,728 | 144,870 | 143,891 | 141,993 | 331,210 | 44,599 | 1,046,291 | 100.0 |
| 仕 出 地 別 百 分 比 | 22.9 | 13.8 | 13.7 | 13.6 | 31.7 | 4.3 | 100.0 | — |

入 滿 移 民 發 着 地 別 (昭 和 四 年)

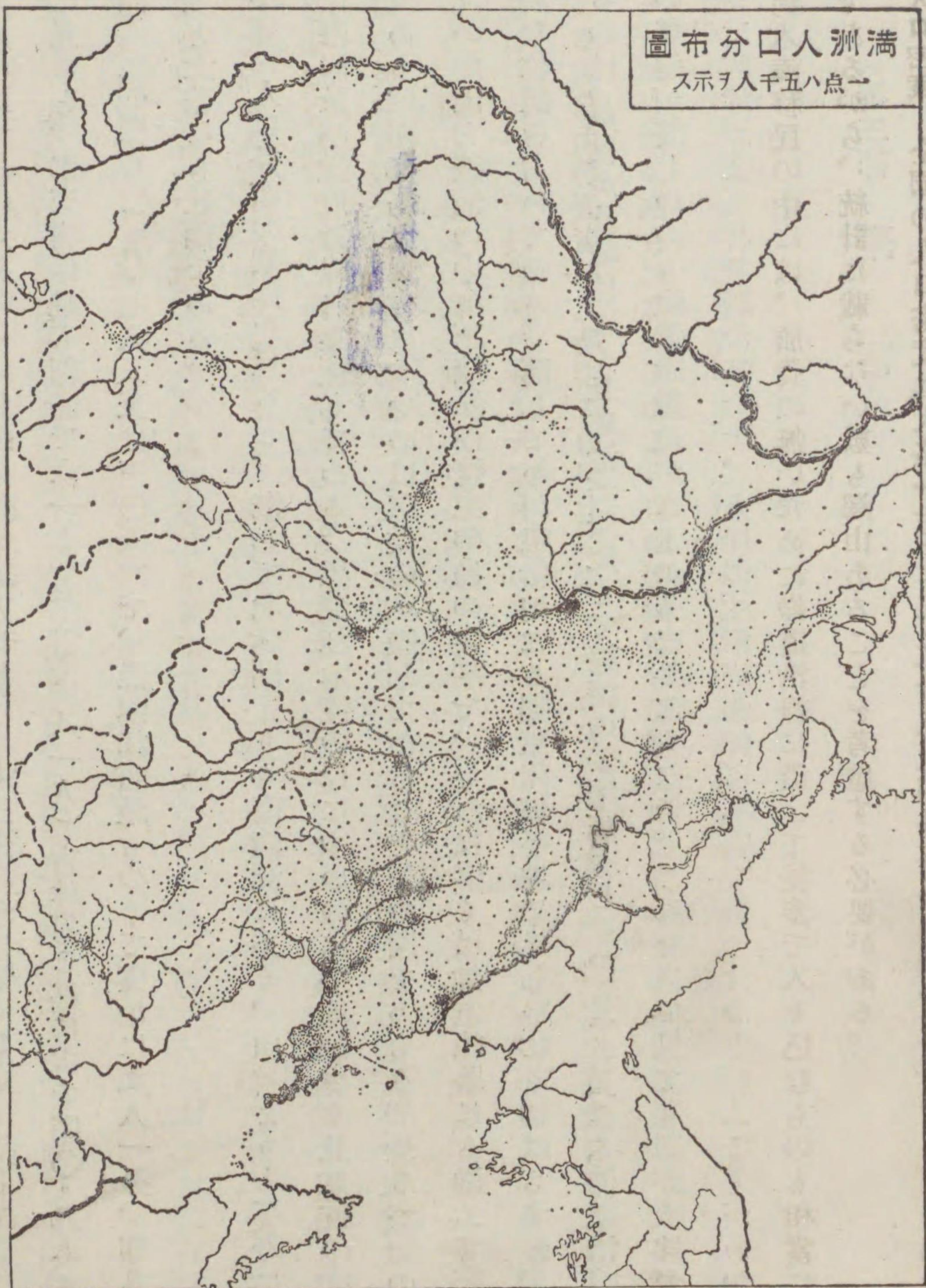
滿鐵人事課の調査によると、支那よりの滿洲移民数は年々著しく増加し、昭和二年以後は年々百萬を突破するといふ状況である、併し一面に於ては春に來て秋に歸還する季節的出稼労働者も相當に多く、残留して滿蒙の地に定著するものは大略入滿者の半數内外である。その詳細は上表の通りで、昭和二年に最高に達した定著率はその後著しく減少しつつあるが、これ一つには政局不安のためであるから、滿洲國獨立してこゝに所謂樂園の成立したる以上は、今後入滿者は更に一層増加し定著率も亦急増するに違ひないと思はれる。

更に昭和四年の入滿移民についてその經路を調べて見ると、河北省方面から奉天線によつて奉天に下車するものは全體の約三分の一で、山東省方面即ち青島を出發して大連又は安東に上陸するものがこれに次ぎ、芝罘・龍口・天津等から出發するものが各七分の一足らずである。又到着地別に見れば大連が殆ど半數に達し奉天がこれに次ぐ。

次に同年入滿者の性別を見ると、男子八十七萬に對し女子十七萬で、八三・七對一六・三の割合となつゐる。これは大連に於ける調査を基本としてその比率を安東及び奉天に適用し、別に營口に於ける調査報告を加算推定したものであるから、必ずしも正確では無いが大差はないであらう。而して全數の約二割は小兒（男女折半）であるから、家族移民も相當多數に上つてゐることがわかる。職業別の數は大連上陸の支那船客についての調べがあるのみであるが、それによると自由労働者即ち所謂苦力ケリが七〇・二%を占め、農業者二〇・一%、商業者二・七%、工業二・一%といふ割合になつてゐる。自由労働者は鐵道工事に従事せんとするものが大多數であつた。

尙入滿移民の中には、旅費の無いために鐵道沿線に沿ふて徒歩で入り込むものも相當に多い様であるから、統計に載らない數も澤山あることを考慮する必要がある。

人口密度 全國の人口密度は大略一方軒に付二十八人四分（又は二九人）で、わが内地の百六



（田中氏による）

十九人に比すれば六分の一、朝鮮の九十五人に比べても三分の一に足りない。而してこれを省別に見ると、奉天省は最も稠密で六一・九人（又は八一一人）吉林省これに次で四〇・九人（又は三四人）熱河省は二八・七人（又は三〇人）で、黒龍江省最も少くて僅かに九人一分、即ちわが樺太と大差なき状態である。

分布 人口分布の状態を見ると、概して北滿洲よりも南滿洲に多く、山地よりも平野に、又河岸海岸及び鐵道沿線に集積してゐる。黒龍江本流の岸に少いのは平地が少く且氣候の寒いためであり、西部高原地方に少いのは氣候の乾燥してゐることが主因であらう。最も多いのは松花江の中流と遼河の中流下流及び遼東半島の尖端で、それは多くは鐵道線路にも沿ふて交通の便利な位置を占めてゐる。而してわが租借地たる關東州が平地に乏しいにも拘はらず最も密であるのは、氣候が比較的よく且政治が安定して經濟の發達が著しいからであつて、滿鐵沿線に都市の發達が著しいのも鐵道附屬地があるからに外ならない。これを以て見ても滿蒙の地が、これまで政治がよく行き届かないで、人民の生活が如何に不安であつたかといふことがわかる。

第三節 聚 落

村落 滿洲にある村落は主として農村であることは云ふ迄もないが、海岸や島嶼には多少の漁村も見られ、西部には遊牧民の移動村落もある。農村にも一戸づゝ孤立してその周邊に耕地を有する莊宅型もあり、一二戸乃至數戸づゝ各地に散在して、その周圍に各の耕地を有する散村型もあるが、併し最も多いものは集村で、數十戸が集團をなしてその附近に耕地を控へてゐる。馬賊の横行甚しかつた滿洲としては、成るべく多數集團することが便宜であつたからである。中流以上の農家になると、周圍に堅固な石垣や土塀を繞らし、土造や石造の頑丈な家を建てめぐらし、中央に院子と稱する廣庭を備へて、そこで農作物の調製や加工などをする様にしたのが多い。これも匪賊を防ぐことを主眼としたものである。

村落の起原は大體七種類ある。(一)在來の土著民の農村、(二)秦漢時代から明末頃までの間に移住して來た漢族の村、(三)清朝に至つて政府指導の下に來た漢族の集團農村、(四)清の時代に漢族が任意に移住して來て作つた農村、(五)清時代に滿洲守備のために來た官兵の屯田を中心とする村、(六)最近漢族の自由移民による農村、(七)朝鮮族の移住して建てた農村がこれである。

城廓市 周圍に城壁を繞らしたものは頗る多い。これは朝鮮支那各地を通じて多く見る所で、城壁は磚・石又は土で築造せられ、形は正方形又は長方形のものが多く、時として新京の一

部たる長春城の様に三角形のものもあり、又奉天の城壁は二重になつてゐて、内城は方形、外城は圓形である。街路は通例直交式で、城壁内に無家屋地域を存するものもあり、又市街が發展して城廓外に溢れたものもある。近時城壁は次第に取毀たれる傾向がある。從來街路は狹隘で建物は矮小であつたが、近時は堂々たる洋式建築も多くなつた。遼陽・奉天・新京など何れも城廓市である。

商埠地 城廓市に接近して設けられたり、河岸に港市として發達したり、又奉天の様に滿鐵附屬地の新市街と舊城廓市との中間に出來たりしてゐる。元來支那の政府が條約によつて各國に開放したもので、諸外國人と支那人との雜居地であるが、概して不規則雜駁な街路を有する。

洋風都市 滿鐵の沿線には所々に附屬地なるものがあつてその行政權はわが國に屬してゐる。こゝに主として日本人によつて建設せられた驛前都市は、交通商業の要衝として附近支那都市の繁盛を奪ふに至り、日本兵によつて守備せられて匪賊兵亂に對する安全地帯となるので、支那人の來住するものも多くて時として殷盛な支那人區が出來たりする。多くは新市街と呼ばれ街衢は整然として直交式又は放射式である。安東・奉天・新京などの新市街や鞍山の如きはその例である。

東支鐵道の附屬地にはロシア人の手によつて建てられた新市街がある。中でもハルビンの如きは純ロシア式の都市である。大連も今は著しく日本化してゐるが、元來のプランはロシア人の定めたものであるから、主要部の街路はロシア式の放射街である。

これ等洋風都市の建築物は悉く煉瓦又は石造で、郊外には種々の色素を巧に配合した所謂文化住宅も多い。街路は廣濶で必ず並木があり、庭園にも亦多く樹木が植えられてゐる。各種交通機關を始め上水・下水・照明から娛樂の設備に至るまで、凡て文化生活の根本義たる便利と經濟と衛生的といふことが完備して、歐米の都市に比べても遜色がないのである。

第七章 生活及び風習

第一節 都市生活

安寧 廣茫の野に一郭を區切つて文化的の都市を營み、氣候に對應して設備を完全にした各地の新都市は、滿洲が騷亂の巷であつた時に於てさへも、警察制度が完全に行はれて何の不安もない安全地帯として、富豪は勿論一般支那人の避難所となつてゐた位であるから、政局安定した今日に於ては最も安全な生活を樂み得ること云ふ迄もない。日本の租借地や滿鐵附屬地が、今は全滿に擴張されたも同様、邊陲の地に至るまで日本の軍隊や警察によつて秩序が維持され、跋扈猖獗を逞うした馬賊土匪の徒等も、今は漸く萎縮して來た。勿論これ等が全然その跡を絶つて、日本の内地と同様の眞に安寧な土地となるには、なほ若干の年月を必要とするであらうけれども、兎に角新政府の方針はその獨立宣言書中にも述べてゐる如く、『軍閥の苛政と誅求とを改めて熱火深水の痛苦を除き、虎狼に等しき爪牙の餘毒を剷滅し、民衆を蘇生して

安息を得せしめ、排外の政策を捨て國際の戰爭を弭め、門戶解放と機會均等主義と以て、世界の民族と共に共存共榮を圖らんとする』にあるから、これ迄の様な不安は全く一掃されたものと考へて差支ない。

物價 滿洲は豊穰な農産物の産地であるだけに、食料品などは極めて安價である。米の様に朝鮮その他から多少輸入するものでもわが内地よりは廉く、麥粉・砂糖・味噌・醬油・肉類・卵・魚・野菜類・酒類などは四五割も低廉なものが多し。生活必需品ばかりでなく、貴金屬・寶石類・裝身具・化粧品等も亦頗る安價で、外國煙草や洋酒の如きは内地の三分の一以下である。

而も一方に於て勞銀は内地よりもよく、殊に技術職人はずつとよい賃錢を得てゐるし、勤人階級にも亦在外手当だの特別加俸だのがあつて、内地よりは六七割も収入がよいのであるから、一般に頗る餘裕のある生活を營んでゐる。

衛生 體育の設備も整ひ衛生の機關も充實し、又氣候に對する適應の仕方もわかつたので今では衛生状態が極めて良好である。大陸的な氣温の激變に小兒の攝生を誤つたり、極端に乾燥した空氣のために呼吸器を害したりする様なことは、少しの注意で完全に防ぐことが出来るし、防疫の設備などは各都市ともに完璧に近いまでに發達し、ペストやコレラの如きも多くは支那街に見るのみである。而も支那人の中にも近時著しく衛生思想が進んで來て、傳染病が餘程少

くなつて來た。

各種の運動競技も頗る盛であつて、都市には必ず大規模の運動場があり、學生や青年のみでなく、あらゆる職業とあらゆる階級の人たちに運動が普及してゐる。就中野球は殊に盛で、冬にはスケートや武道が盛に行はれる。

娛樂 都市には天然の風景に見るべきものは無いが、人力によつて種々の風致が添へられ、住宅周囲の庭園を始め、街路樹や公園・遊歩地等に特別の考慮が拂はれてゐる。又大衆的娛樂機關としての芝居・寄席・活動寫真などは頗る盛で、日本もの、西洋ものの外に、支那芝居なども連夜興行される。又釣魚とか圍碁・謠曲などの日本趣味も自由に味へる様になつてゐる。

日本人にはあまり興味をそゝらないが、由緒のある山陵や古寺・古廟なども各地に多い。又所によつては自然の風光を求め得られぬことも無い。遼陽附近の千山の如きは殊に有名で、幽邃なる仙境として登山趣味を満足せしめることが出来る。

家庭生活 遠く母國を離れて新都市に住む人たちは、人懐つこさと無聊の關係から社交といふことが重要視されるが、又一面に於ては家庭を樂むといふ點に於て内地などの比では無い。老人や親族などの係累が少いたためであらう、又周圍に異人種ばかり多いことにもよるであらうが、家庭の和樂は最高の愉快として禮讚され、又女子の數が少ない關係上女尊男卑の風があつ

て、婦人の好遇せられることはアメリカにも似てゐる。家庭の主婦は嚴寒の冬にもスチームやペーチカで陽春の様な溫和に浸り、日用品は配達を受け、炊事はコックに任せ、内風呂に暖つて終日讀書に耽るといふ風で、春から秋にかけては外出にも廉い人力車や馬車に乗り、殆ど歩行などする必要もないといふ様に、内地の千萬長者の様な生活をしてゐる向も頗る多いのである。

支那街生活 新市街を去つて舊い純粹の支那街に入ると、黒塀や黒煉瓦の城壁、屋根の低い平家、くすぶつた様な商店、狭くて陰氣で、塵芥と砂埃に汚れた、一種異様の臭氣のたゞよふ陰慘な景觀が目に入る。不潔は支那人につきものゝ様であるが、併しこれにも相當の理由がある。簡単に云へば水が不自由なため已むを得ず不潔になるのである。雨の少い國、黄土にまみれた國、流るゝ水も溜つた水も、水といふ水の悉くが赤泥水ばかりなのだから、物を洗つて磨いて綺麗にするなどいふことは到底出来ないことであり、多年その中に住んでゐれば不潔も不潔と思はぬ様になるのである。

併し支那街と雖も日本人と接觸することの多い部分は、次第にその感化を受けて云はゞ日本化せんとする點が見える。店の商品などでも「無言二價」エンワアルチヤと云つてかけ値の無いのを金看板として居ても、負けさせねば氣持のすまない日本人の氣質を吞込んで、近頃は盛に掛引をやる様

になつた。又傳染病などがあると日本人が野菜を買つて呉れなくなるので、成るべく早く終滅させ様と努力する様になり、自然に衛生思想も普及されて來た。

第二節 村落生活

衣食 都會と村落とで生活程度に著しい違ひのあるのは、何處の國でも普通のことではあるが滿洲では殊に甚しい様である。村落でも大地主とか土地の名望家などは別であるが、中以下の小農や農業労働階級にあつては、都會地の労働者よりも一層粗野で、殆ど文化的の恩恵に浴してゐないかの様である。衣服は極めて質素な綿服で色も紺色を主とし、一着きりを三年でも五年でも着て居るといふ風で、祭禮等の場合にも簡単な上飾を打掛けるに止まつてゐる。食物は高粱が常食で、玉蜀黍と粟は御馳走の方である。副食物は豆腐・漬物・生葱・味噌・んにく・芹菜等が主で、魚類や鳥獸の肉はお正月などに稀に用ふるのみであり、酒や砂糖も常用はしない。

住居 家屋は堅固ではあるが小さくて頗る陰氣である。これは外賊の侵入と寒さを防ぐことを主としたからである。無論平家建で大きくても五室位、一室の大きさは一坪内外に過ぎ



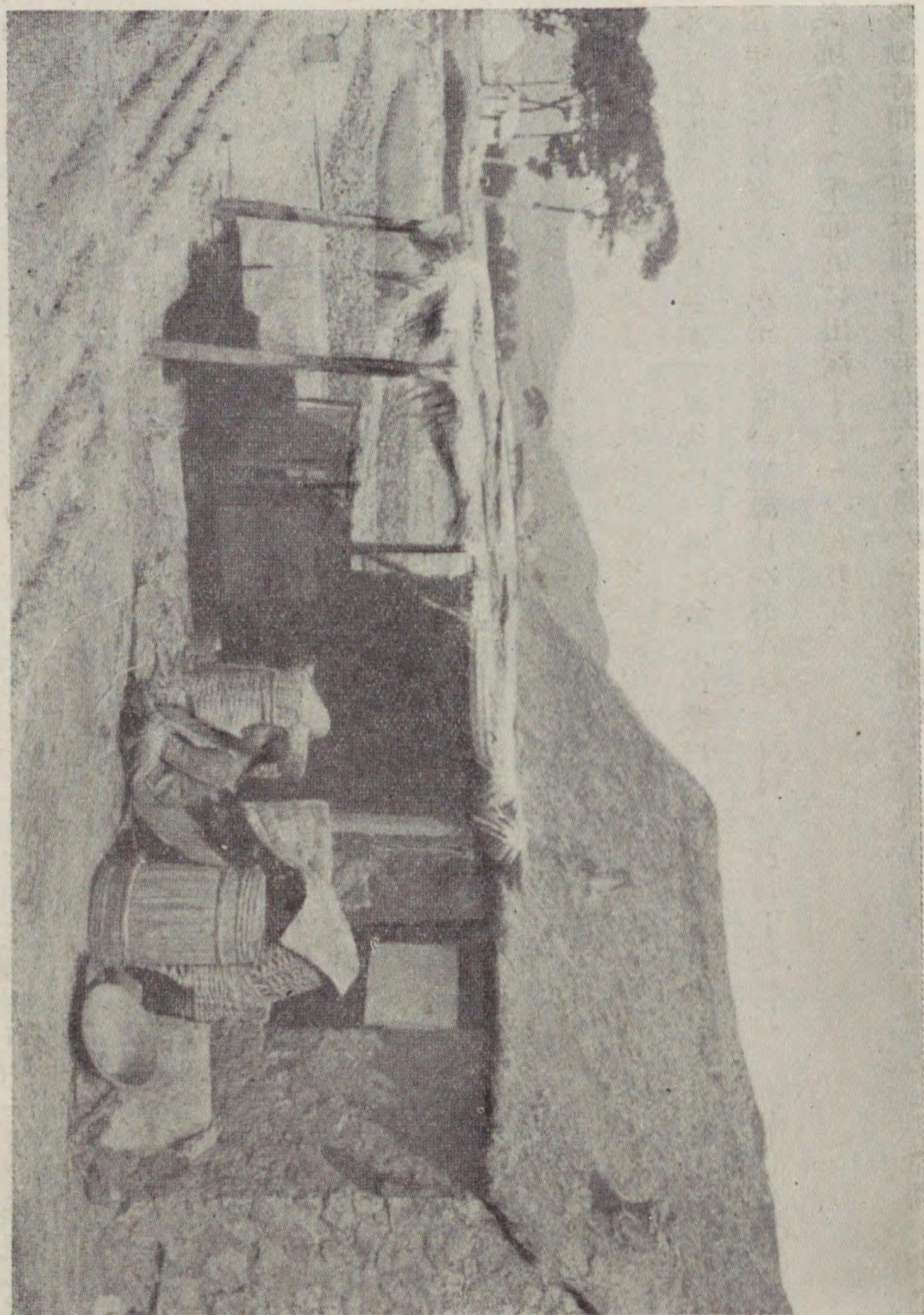
遼 河 の 畔

ぬ。左右各二室づゝを居室とすれば中央の一室は出入口と炊事場で、冬はこゝで焚く炊事の煙が各室の下を這つて室内を暖める様になつてゐる。これを炕カウと稱してゐる。壁は石又は土で塗り上げ、屋根は左右に木を渡し、その上に高粱稈を載せ、泥土を置いて更にその上を漆喰塗とし、恰も貨車の様な形に出来てゐる。雨が少いから斯様に緩傾斜の屋根でよいのである。窓が小さくて少いのも寒氣を防ぐ爲であるが、室内はほの暗くて陰氣極まるものである。

併し家庭は彼等にとつて最も楽しい處である。自然の壓迫は強く國家の保護は弱いので、孤立無援の状態に置かれてゐるから、一家の團欒は最大の樂みであり、一族一郷をなし、一郷一村をなし、その團結は殊に強固なものがある。

労働 農家では春分の頃から主な仕事が始まる。清明節(四月六日)に小麦や大麥を播き、穀雨節(四月廿一日)から一般播種期に入り、除草や中耕が次々に行はれ、白露(九月九日)から早熟もの刈入が始まつて秋分の前後に高粱・粟・大豆などを收穫し、寒露(十月九日)から脱穀にかゝり、立冬(十一月八日)には全く收穫物の調製貯藏を終つて冬籠りとなる。これから翌年の三月までは家屋の修繕や農具の手入れ、肥料の製造などが主な仕事で、中には都會地や炭坑などへ季節的に出稼するものもある。

労働時間は農繁期には平均六時間から八時間位で、耕作の外に副業として葦蓆の製造、柞蠶・



家屋

羊・豚・鶏・鶩等の飼育が行はれる。曆は舊曆を用ひ、正月十五日の元宵節、五月五日の五月節、八月十五日の八月節は三大節と稱して必ず業を休み、酒を汲み美食して一日を樂むのを例とする。

第三節 漢族の風習

服装 滿洲住民の大多數を占むる漢族についてその風習の一端を述べよう。衣服は外衣・上衣・下裳・襯衣の別があるが、概して飾氣の無い紺色の綿服で、一見頗る陰氣である。併し服装としては充分完備したもので、顔面以外は凡て包み被つて風氣に晒さず、最下級の苦力輩に至るまで四季を通じて必ず白足袋を穿つてゐる。これは寒氣に對する防禦の必要から來たものであらう。

上流の服装には無論絹布も多い。殊に婦人の服は周圍を縁取し、全面に精巧な刺繡を施し、極めて艶麗優雅なものである。近年は西洋のスカートを改良した袴が流行し、緞子・綢紗等で作つた頗る美しいものが多い。

帽子には禮帽・便帽・毛帽等があり、農民の常用するものに草帽及び耳帽がある。耳帽は耳ま

で隠されるもので冬の寒さに凍傷を防ぐに適する。婦人の結髪は極めて簡單で日本の様に技巧は凝さない。随つて髮結といふ職業は無く凡て自家で辨するのである。少女は三つ組にして垂れるが結婚すれば髮揚げをなし、額の毛を抜いて生え際を方形に整へる。

食物 支那料理は世界で最も進歩したものと云はれる。支那料理の中では廣東料理が第一だといふが、滿洲方面の料理も決してわるくない。農民や都會の労働者は一飯一菜で、高粱又は玉蜀黍を常食としてゐるが、中流以上では米飯を常食とし、隨分山海の珍味を食膳に供する。一般には肉類を多く採らないが、これは牧畜もあまり盛でなく又水産業も振はぬからであつて、その代りに大豆を食するので蛋白質の缺乏を免れる。生葱の如きを好んで食するのは刺激によつて體温の上昇をはかるのであつて、温食を好み冷いものをとらないのは、飲料水が不良なために起つた習慣である。

肉類の中では豚が最も多く用ひられる。野菜には大根・牛蒡・茸・瓜・薯・白菜・筍等がある。商人は通例一日二食であるが上流社會では三食を攝る。嗜好品には茶・煙草・阿片・酒等があつて、茶は殊に好んで何度も喫む。これは氣候が乾燥してゐるために喝を覺えるからである。而も清水が得難いので、都會では街頭で湯を沸して賣つてゐるし、又茶館即ち喫茶店が澤山ある。煙草には種類が多いが概して刺激の強いものを好む。阿片は禁止されてゐるけれども、秘密には

尙行はれてゐて中毒してゐるものも少くない。

酒も亦盛に用ひられるが、併し酔つて街頭を彷徨する様なものは見られぬ。宴會を好む人種で、何處の家でも月に一二回は必ず宴會を催し、官吏となると殆ど毎日宴會に臨むものもある。滿洲特有の酒は高粱酒カオリヤンチウで牛莊産を最上とし、日本の焼酎に類し滿洲ウイスキーと呼ばれてゐる。

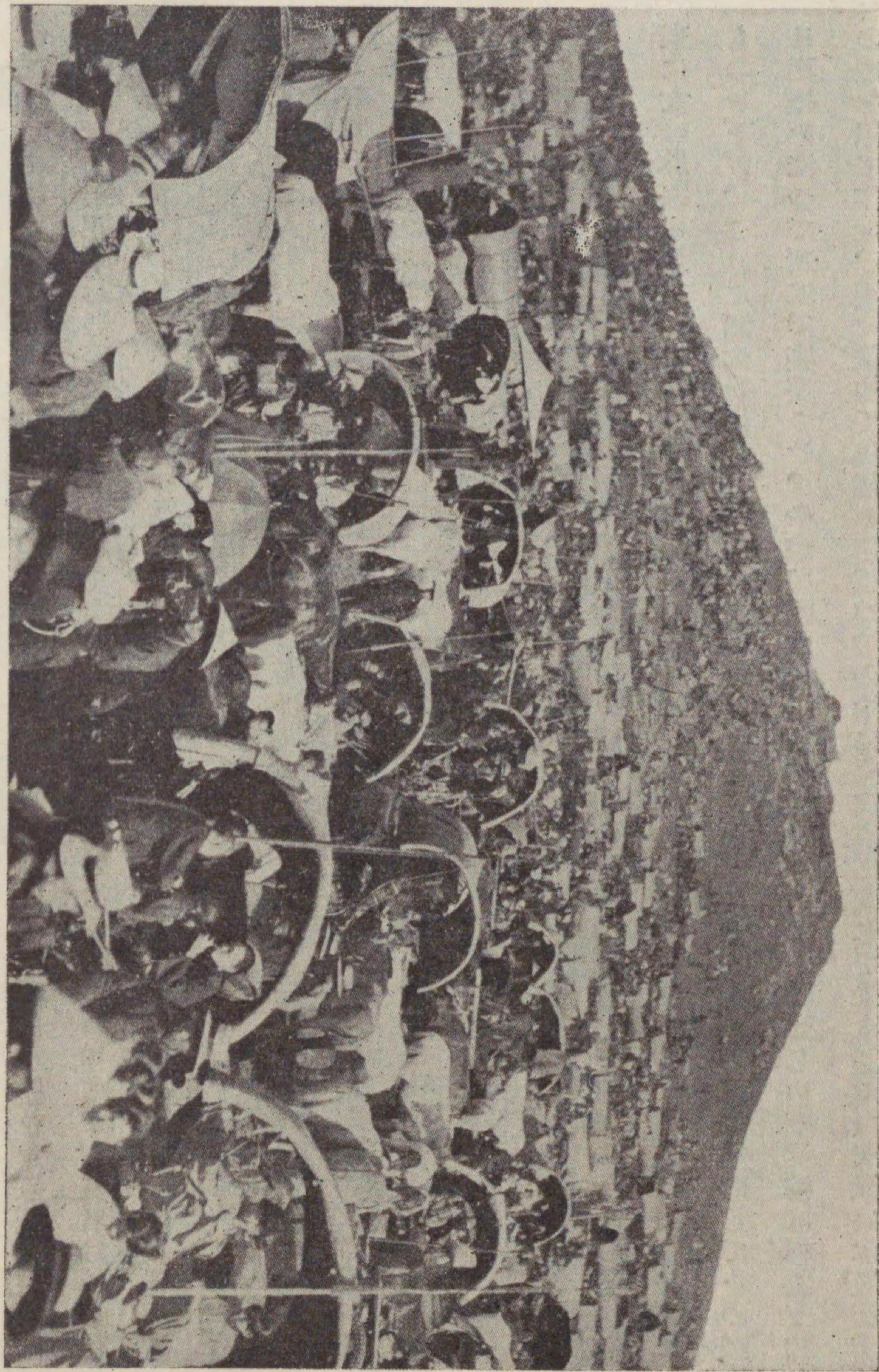
住居 家屋は普通木骨煉瓦造で、煉瓦は黒又は鼠色を用ひ赤煉瓦は極めて少い。屋根は板葺又は瓦葺で、暖房装置としては炕カンと稱する朝鮮の温突オンドルに類するものがある。室内の壁には胡粉を加へ壁紙を張つて隙間洩る寒さを完全に防ぐ。近時は洋式建築が流行して高層の家屋も多いが、普通は平家で三乃至七室が多く、便所は屋外に構へ、浴室は設けて無い。一般に彼等は入浴を好まないが、それは清水が得難いからであつて、水道の完備した都市には立派な銭湯も澤山出来てゐる。

商店の種類は凡て看板で判明する。即ち湯屋は赤圓筒、酒屋は壺又は杯を出し、料理屋は輪に紅色のリボンを垂れ、兩替屋は孔錢、雜貨店は硝子張りの燈籠の様なものを下げてゐる。これ蓋し文盲のものが多から起つたことであらう。

結婚 男子は二十歳、女子は十五歳にならなければ結婚は許されない。婚約が成立すると吉

日を選んで男家の親族一同が先づ女家を訪問し、女家の親族一同がこれを接待して互に戸籍上の名乗り合ひをする。そして男側の長老から令嬢を貰うたい旨を申し入れると、女側の長老はこれを二三度辭退した上で承諾する。これで正式の約束となるのである。そこで更に男家から贈物をするが、これはわが國に於ける結納に類するものである。次で愈々輿入の前日となる。女家から男家に嫁入道具を送り、新郎は馬に乗つて女家に禮を述べに行く。當日は男家から年長富有の婦人を女家へ迎へに赴かしめ、新婦は花輿に乗つて多くの行列に護られて行く。そして新郎の家に入ると、先づ輿を出て祖先を祀る祭場に禮拜し、それから新郎と共に炕カン上に並び坐し年長者これに向つて吉詞を述べる。それから男家一統は順次新婦に面謁するの式がある。これ等をわが國の風習に比べるとより大なる相違があるが、併し精神に至つては類似する處が頗る多い。

葬祭 家人が死亡すると先づ死者の身邊を淨め、一切の裝飾物を徹して粗服にかへ、男は牀東に女は牀西に居並んで慟哭する。又室の一方に死者の姓名、生死の月日などを自絹に書いたものを下げ、これに酒食を供へる。かくて訃を發し親戚知友に報するのである。而してその翌日死體を洗つて新衣で盛装させ、やがて親戚相會して夜に入つて入棺せしめる。棺は杉・柏・楠の類を以て作り、漆を塗つて臭氣を防ぎ、棺の中には貧富に應じて朱・砂糖・白灰又は木炭を詰

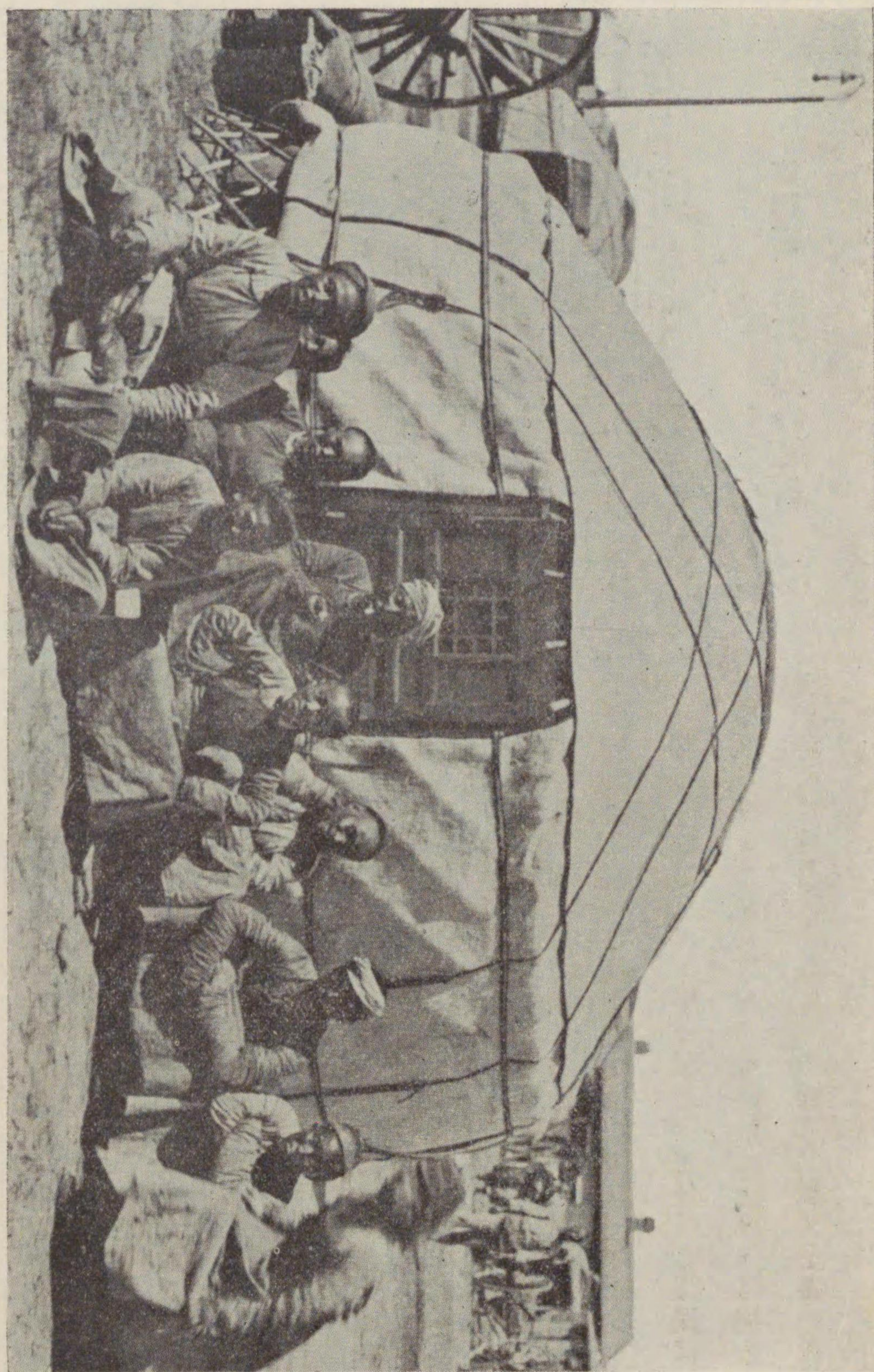


祭々娘の正眞迷

める。又門前には白紙に『制』とか『不領帖』など書いて貼り出し、紙製の轎や車馬などを門外で焼いて捨てるなどの儀式があり、それから柩を正房に安置し、中庭に靈位を置いて供物をならべ、一般弔客はこゝで禮拜するので、富者にあつては數日間通夜をするが、貧者は一日位で葬るのである。木葬・金葬など云つて木又は金屬の棺に納めて埋葬するのが一般佛教徒の式である。

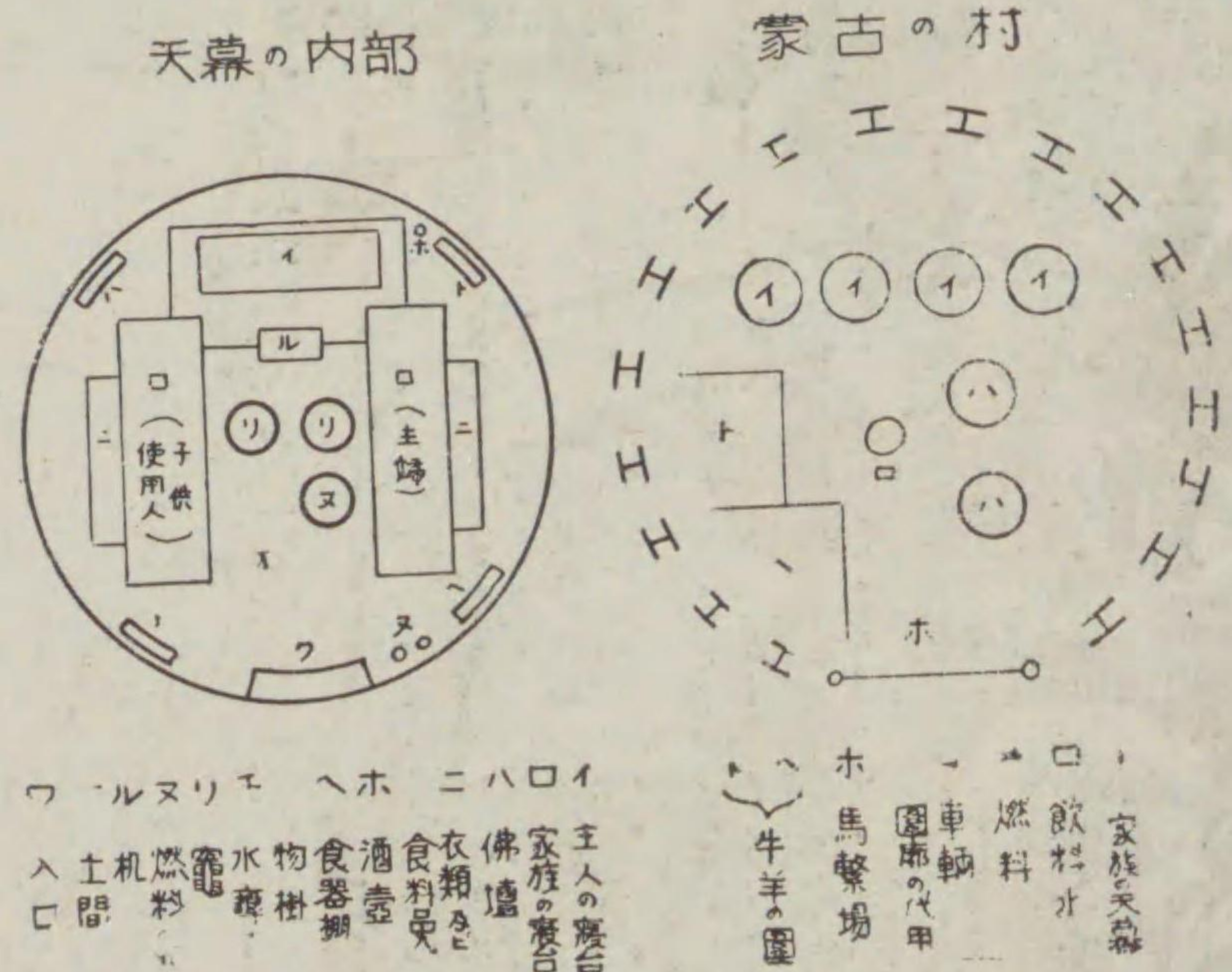
娘々祭 舊曆四月中旬に行はれる娘々祭ニヤンシは、郷土的色彩に富んだ最も大規模の祭禮である。娘々の神といふのは福壽・治眼・授兒の三女神で、参拜者は極めて眞剣な態度でその神前に額づく。この祭禮は各地に行はれるが、その最も盛なものは大石橋の迷鎮山のものである。長い間の冬籠りから解放せられて、やつと春らしい氣分になつた農民たちは、千里を遠しとせずして曠野の道を踏みわけて集る。滿鐵も臨時列車を運轉して参詣者を運ぶ。廟は迷鎮山の頂上にあるが、山の中腹から麓にかけては、數限りなき行者と露店とで埋め盡され、老若男女は芋を洗ふ様にごつた返すのである。

第四節 蒙古族の風習



蒙古の村

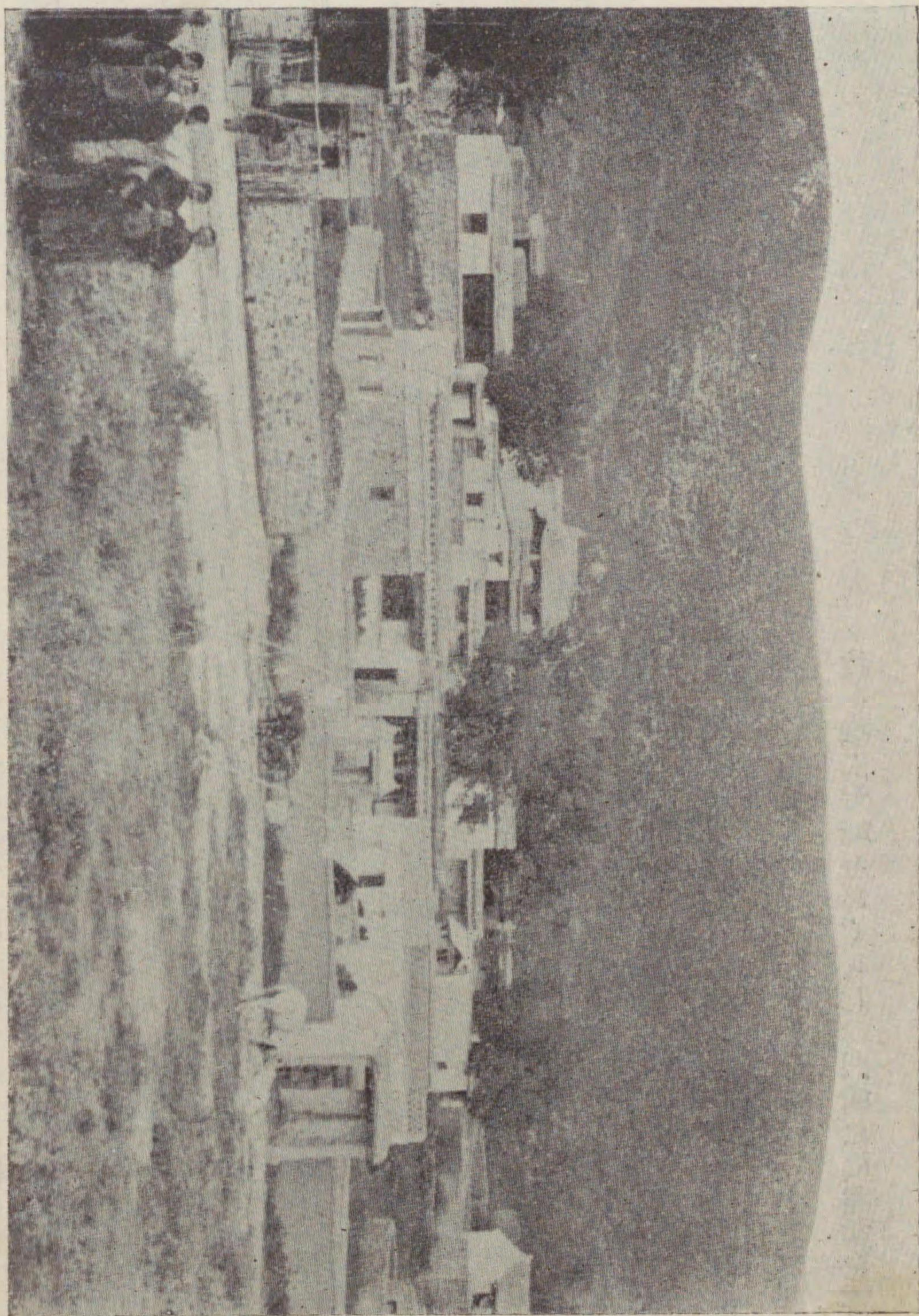
白又は赤の小旗を立てゝゐる。



風俗 廣漠たる不毛の高原に住む蒙古族は、進んだ文化と生存競争との圏外に超然として、

牛馬を友とする極めて原始的素朴な生活を営んでゐる。彼等は茶を喫み煙草を煙らせ、食ふことゝ眠ることゝ念佛を口誦さむことの外には何の希望も野心も持つて居ないかの様である。

村落は互に相距たり、一村は二三戸から二三十戸、家と家との間隔も時には數軒に上るといふ有様であるから、極めて孤獨寂寞な生活である。遊牧を行ふものは簡單な所謂蒙古包モンゴクポに住む。それは普通高さが三米、圓く柳の枝を組み合せ、羊毛で作つた毛氈で包んで、駱駝の毛で縛つた繩を以て縛りつけるので冬でも中々暖い。定住する農民は土塊又は煉瓦の家に住み、周圍には土塊又は柳の枝を編んだ柵をめぐらし、門前には經文を書いた



滿洲の街景

家具は極めて少く、衣服もたゞ着てゐるだけで着換へは殆ど持たない。馬に跨り地上に坐し、風雨に曝され垢と埃に汚れ果てゝゐる。湯の中に磚茶を削り込み、牛乳を入れて日に幾回となく飲む。随分大食家で、妙齡の婦人でも一度に大椀十數杯を平げるし、羊を殺した時などは一家族集つて貪り食ふが、その代り時としては數十時間の絶食に堪へることもある。

性質は正直で勤勉で、他種族に對しても頗る好意を持つ愛すべき人類である。悪く云へば粗野でもあり愚鈍でもあるが、淡泊で無邪氣で親み易い點がある。

宗教 滿蒙には佛教・道教・基督教・回教と色々のものが行はれてゐるが、概してあまり盛であるとは云ひ難く、種々の迷信が廣く流行してゐる。たゞ蒙古族の喇嘛教のみは最も強く崇信せられ、最も偉大な感化力を持つてゐる。單に安心立命のためのみでなく、冠婚葬祭、吉凶禍福悉くこれによつて支配せられてゐる。

喇嘛教は佛教の一派で、西曆七世紀の中葉に佛教がチベットに入つた時、その固有教と合一して出來たものである。故にその教旨は佛教と大差なく、貪・瞋・痴・慢・癡等の惡行を戒め、忠孝・信義・禮智等の善行をすゝめ、人生の苦惱を離脱して佛陀の本體に歸するのが理想で、常に忍耐苦行して俗界を脱し、巡禮・祈禱・喜捨・念佛を以て罪業を購ひ、未來の幸福を求めぬのを最上の道としてゐる。因果の理の教へ、靈魂の不滅、輪廻轉生を説き、彌陀・釋迦を本尊

とするなど全く佛教と同じである。蒙古では長男以外の男子は悉く喇嘛僧となる定めであるから、殆ど人口の半數近くは僧侶であると云つてもよく、彼等はたゞ大伽藍を建立し、有徳の活佛に參謁することを唯一の念願として、中には一切の乗物をすて、一步に三拜しつゝ、殆ど腹匍ひしながら五台山に參詣するものもあるといふ。

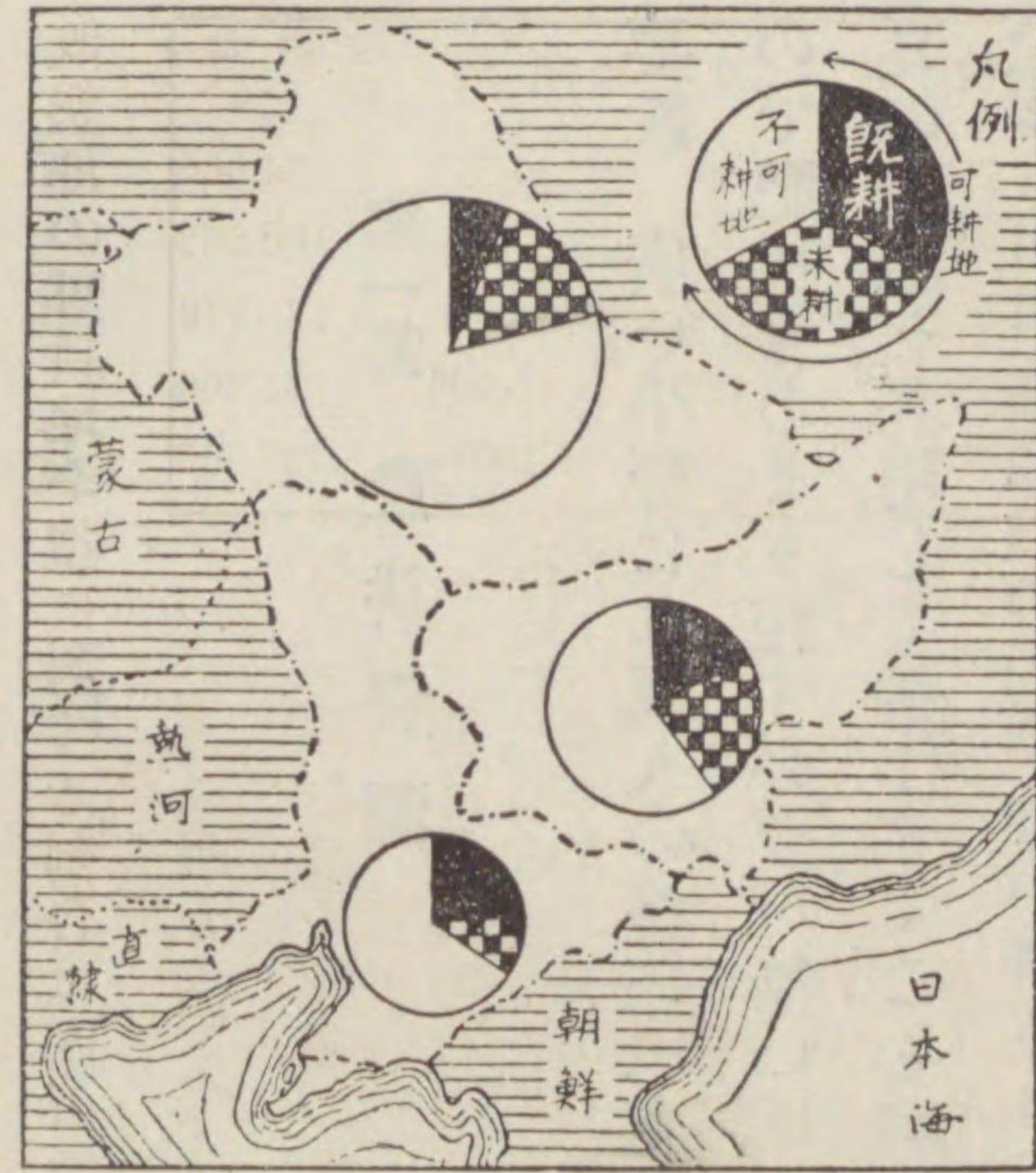
第八章 資 源

第一節 農耕資源

要説 廣い平野には漢人の移住以來農業が大に開けて來た。土地がよく肥えてゐるので肥料もあまり施す必要が無いほどであり、氣候が大陸的であるから北部と雖も夏の高温を利用して耕作することが出来る。實に現在に於ける住民の主業は農業で、而も可耕地面積の約半分が耕されてゐるに過ぎないから、將來も亦最も有望なものは農業である。

農産物の中主位を占めるものは大豆で、これに次ぐものは小麥・高粱・玉蜀黍・粟等であり、近年は米及び甜菜の産も少くない。大豆は實に滿洲第一の富源で、滿洲は大豆の國とまで稱せられる。その大部はそのまゝ輸出せられるが、搾つて豆油及び豆粕を製造することも盛である。小麥は北方を主産地とし、これを原料とする製粉

業は夙にハルビンに起り、その他の各地にも盛に行はれてゐる。
 高粱と粟と玉蜀黍とは住民の主食物であり、又製酒の原料にも供せられる。米は主として朝鮮族によつて栽培し始められたが、今では漢族もこれに従事するものが少くない。その他尙煙草・麻なども栽培されるし、果樹の如きも頗る有望で日本人の經營に最も適したものと考へられてゐる。



耕地面積圖

來る内地の田畑と、一毛しか出來ない滿洲の畑とを同一價値に見るわけには行かぬが、兎に角

耕地 可耕地の全面積が何程あるかは正確

にわからないが、大體の見積によると三十二萬七千方料で、その中現に作付されてゐるものが十四萬八千方料、未墾地が尙十七萬九千方料も残つてゐるのである。これをわが國に比較して見ると、内地全體の田畑面積は約五萬八千方料に過ぎないから、滿洲の未墾地のみでもわが全耕地の三倍以上となるわけである。勿論氣候良好で一年に二毛作三毛作の出

その面積の歴大なものであることは争はれぬ。

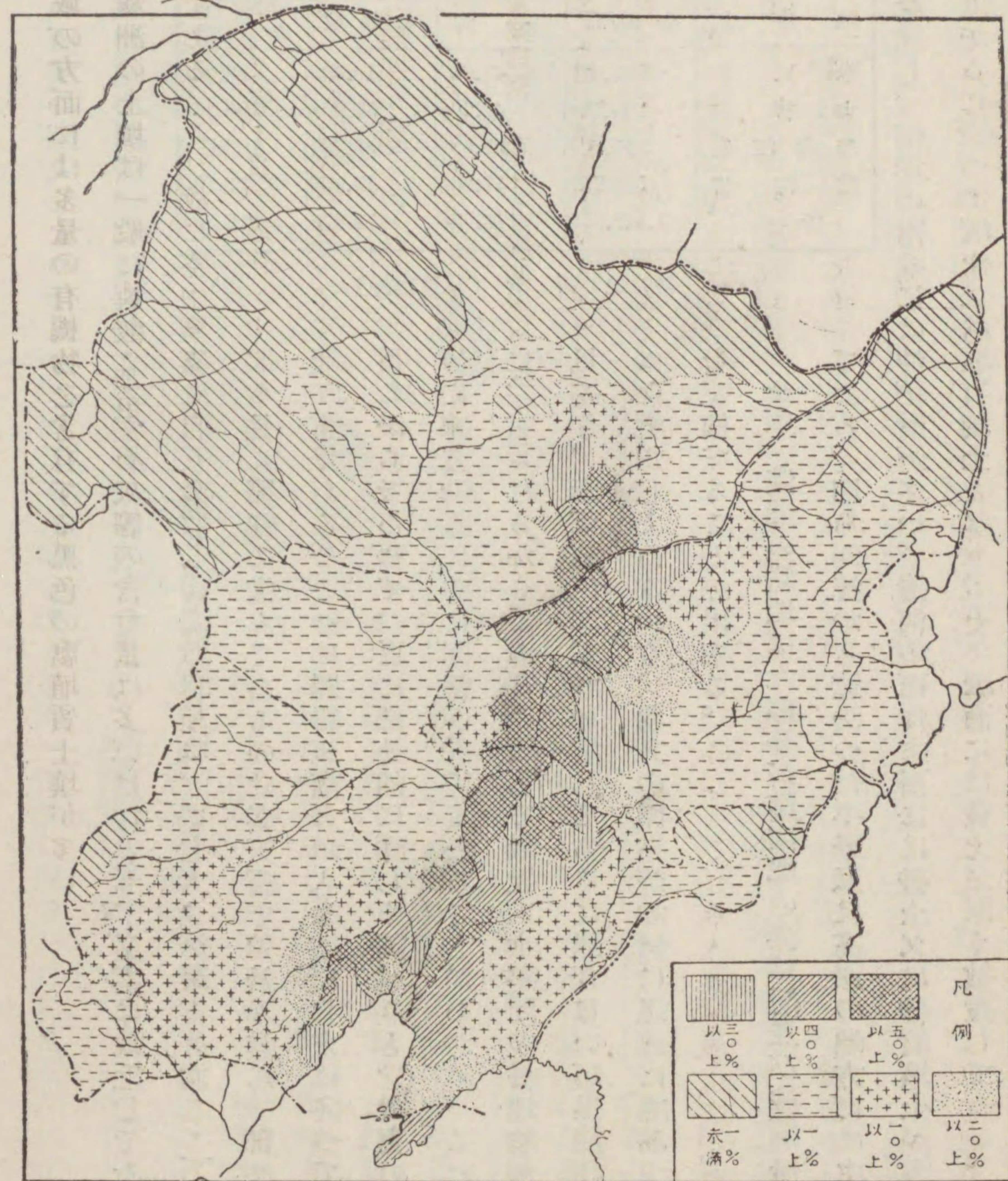
既墾地の可耕地全體に對する割合は四五・二%で、各省別に見ると奉天省は六九・七%、吉林

| 地方別 | 全面積 | 耕地 | 未墾地 | 可耕地 | 地計 |
|------|-----------|---------|---------|---------|----|
| 奉天省 | 233,628 | 44,667 | 19,398 | 64,065 | |
| 吉林省 | 209,789 | 48,266 | 57,996 | 106,262 | |
| 黑龍江省 | 547,964 | 37,995 | 85,784 | 123,779 | |
| 熱河省 | 156,791 | 17,300 | 15,900 | 33,200 | |
| 計 | 1,147,572 | 148,228 | 179,078 | 327,306 | |

耕地面積 (單位方料)

省は四五・四%、黑龍江省は三〇・七%、熱河省は六二・一%である。即ち最も開墾の進んでゐるのは奉天省で、最も進んで居ないのが黑龍江省である。これは開墾が南方から次第に北方に向つて進みつゝあるからであつて、更に部分的に詳しく調べると、次頁の圖に示す如く鐵道沿線に殊に開墾の進んでゐることがわかる。これ全く交通に左右されるからである。而して最近二十年間の耕地増加の趨勢を見ると、奉天省は二三%を増してゐるに過ぎないが黑龍江省は七〇%を増加してゐるから、北方の開拓が如何に迅速に進みつゝあるかを想像することが出来る。

土壌 滿洲の耕地は大部分が第四紀の洪積層及び沖積層から成つてゐる。即ち河流から遠かつた平野又は高原の地方には主に洪積層が發達し、河岸の附近には沖積層が多い。遼河の西岸方面には砂土又は砂質壤土が多いが、河を遠かるに隨つて埴土又は埴質壤土となり、その表面には黄土が厚く被覆してゐる。又松花江



既墾地面積割合の分布(田中氏による)

流域の方面には多量の有機物を含有する黒色の腐植質土壌が多い。

滿洲の土壌は一般に磷酸・加里・石灰等の含有量が多いけれども、窒素は缺乏してゐるのが普通である。それ故に空中窒素を自ら吸収し得る荳科植物、即ち大豆が最も好適してゐるわけである。又礫土質や鐵分が少く曹達に富んでゐることも特色の一つで、遼河沿岸の一部やチ、ハル附近などには稍強度のアルカリ土壌がある。この種の土壌には大豆や稻などは不適當で到底満足な結果が得られないが、併し灌漑及び排水によつて土壌の中の可溶性鹽類を除けば、勿論耕地として充分利用することが出来る。

農業經營 滿洲の農業經營法に自作・小作・分益小作及び請負法の四種がある。自作は自分の土地を自ら耕作するか、又は労働者を雇傭して耕作せしむるもので、小農は五ヘクタール乃至二十ヘクタール位、中農では四五ヘクタール、大農には七八十ヘクタールから時として千五百ヘクタールを超える大農場を經營するものもある。随つてこれ等大農に雇はれる所謂農業労働者なるものが非常に多く、主として支那の山東・河北の諸省からの出稼で、春に來て秋に去るのが普通である。北滿ではこれを人雁と云つてゐるが、これは南米の季節移民たるイタリ人をゴロンドリナス(燕)と云つてゐるのと好一對である。蓋し北滿洲の雁は春に來て秋に去るからである。この人雁の總數は前章に述べた如く總數五六十萬人にも達するが、農業に従事す

るものはその一部で、他の大部は鐵道等の土木工事に従事するものである。

小作農は地主から土地を借りて作るのであるが、純然たる小作のみものは少く多くは二三ヘクタールの土地を所有し、これを耕作しつゝその餘力で小作をするのである。小作の制度には永租と云つて永代小作の權利を有するものと、租即ち一時的な小作とがあり、後者は約束によつて一年乃至八九年の期限を付するのである。小作料は地方によつて一様でないが、通例收穫量の三分の一乃至二分の一位で、中には銀納と云つて銀貨で定めてゐるものもあつて、一田地即ち凡そ六十アールにつき銀十元乃至三十元位を納めてゐる。

分益小作とは地主と小作人とが一定の率によつてその收穫物を分配するものであつて、地主は小作人に對して衣食住の全部及び農具・種子・肥料等全部を貸與し、收穫後その消耗したものの代價を拂戻さしむるもので、分益の率は地主六に對し小作四、又は七對三位のこともある。併し小作人が地主から家屋のみを借る場合にあつては、分益率は六對五、又は五對五となつてゐる。請負法とは地主の土地の一部分の耕作を請負ふので、播種から收穫までの勞働に對して一ヘクタールにつき銀二十元内外が相場である。又時として部分的に除草とか中耕とかのみを請負ふ様な方法もある。

農業様式

わが國の農業に比すれば概して粗放的で、蒙古方面には肥沃な土地を求めて轉々

移動する遊農もあり、又或期間耕作すれば數年間休閑するといふ様な方法もあるが、一般には三年乃至四年の輪作法が行はれ、大豆・粟・高粱・小麥等を交互に栽培してゐる。牛・馬・騾等の家畜を使用すること極めて多く、人力を節約するに努めてゐるが、併しアメリカの様な大規模の機械農業はまだ起らないで、農具は單純原始的な犁・耢子・耙耨等が用ひられるに過ぎない。蓋し文化の程度が低いのと人口が割合に稠密なためであらう。

肥料は主として家畜糞や人糞を肥土に混積した土糞であつて、普通三年に一回施用するのみで未だ化學肥料等は使用せられない。黄土地方では年々風に送られて來る黄土の沈積によつて、肥沃な土壌を添加するわけであるから、ナイル河の定期洪水と等しく天然肥培法によつて、全く肥料の必要が無いのである。病蟲害も相當に多いが、多くは天災と同一視して驅除豫防の法を講じない。併し幸に氣候の自然的驅除があるので極端な大流行は見ない様である。

將來の發達

農業に對する施設としては、從來奉天・吉林・チハルの三ヶ所に農事試験場が置かれ、又公主嶺と熊岳城とにわが滿鐵の農事試験場があつて、各種作物の試作、品種の改良、養畜・養蠶・園藝・林業等の試験も行ひ來つた。これ等の機關がこれ迄滿洲農業の發達に貢獻した所は決して少くないが、何を云つても農民の大部分は無智文盲であるから、充分これ等の施設を利用することが出來なかつた様である。故に今後は益々これ等機關の充實擴張をはか

り、又各地に農學校・農會等をも設けて指導の徹底を期しなければなるまい。未墾の原野は尙隨分廣い。併し潮の如く押し寄せる支那移民は、今後國情の安定と共に益々その勢を大にするであらうし、朝鮮民族の流入も亦盛になることと思はれるから、未墾地の悉く開拓し盡されるのも近い將來のことだらう。そうした時に進むべき道はたゞ農業様式をより集約化するの外にない。即ち機械の利用を盛にして人力を省き、科學的の經營法によつて地力の増進をはかり、品種を改良し栽培管理の方法を工夫して産額の増加と品質の向上とを計り、特殊の技工を取り入れて果樹その他多方面の經營に進み、以て單一から複雑に向つて進まなければならぬであらう。又冬期數ヶ月に亘る農閑期の餘剩勞力を消化する方法として、製粉その他の家内工業を奨励しなければならぬ。

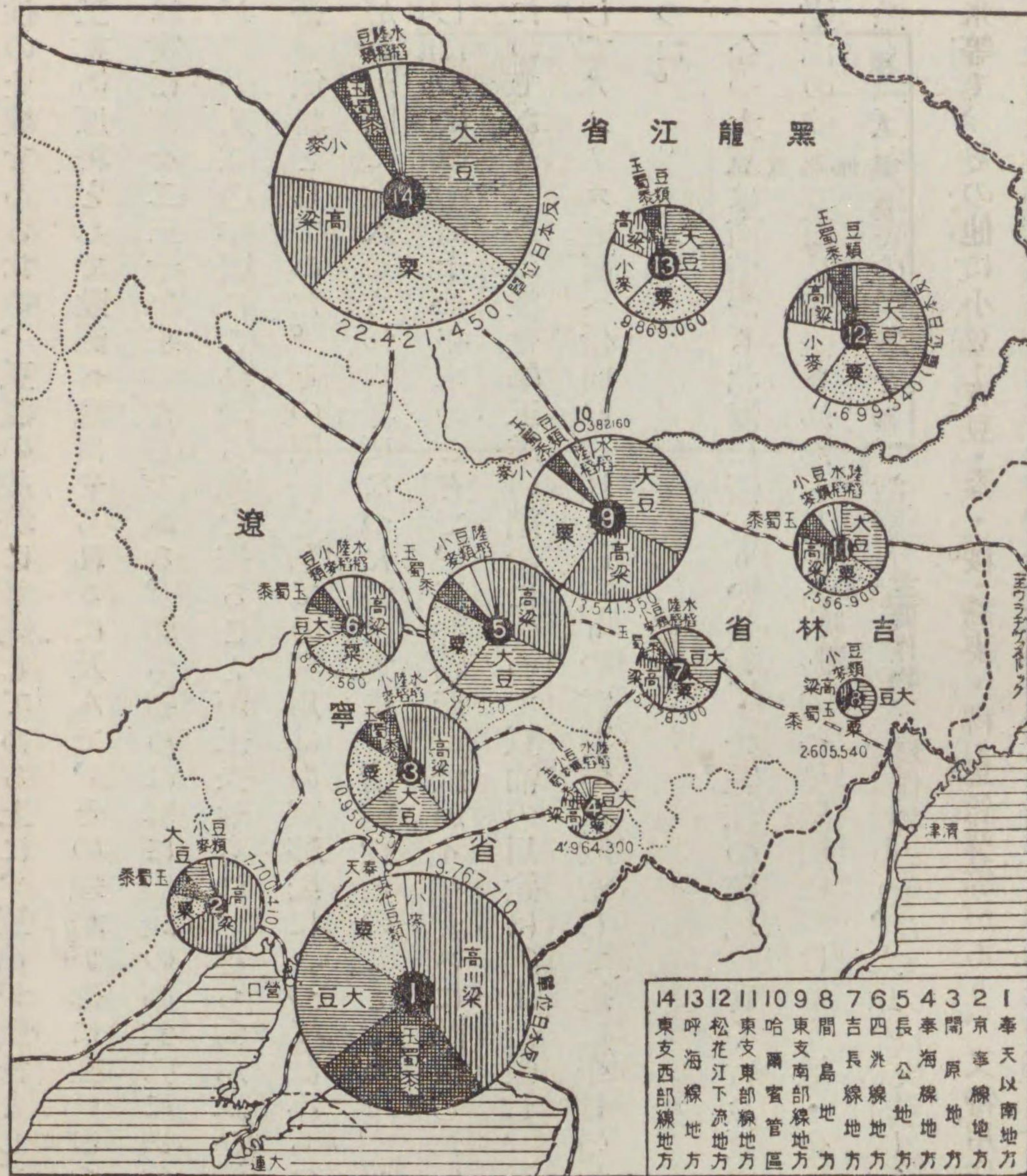
| 種 | 類 | 作付面積(方科) | 生産高(米噸) |
|-------|---|----------|-----------|
| 大豆 | 豆 | 38.414 | 4.854.550 |
| 其他の豆類 | 豆 | 3.478 | 377.170 |
| 高粱 | 粱 | 29.461 | 4.678.380 |
| 粟 | 粟 | 22.530 | 3.349.710 |
| 黍 | 黍 | 9.050 | 1.611.620 |
| 麥 | 麥 | 12.850 | 1.301.760 |
| 米 | 米 | 1.863 | 287.000 |
| 草 | 草 | 441 | 31.056 |

主要農産物(1929)

業を奨励しなければならぬ。

主要作物 農作物の主なものは大豆・高粱・粟・玉蜀黍・小麥・

米等で、その他に小豆・吉豆・黍・稷・蕎麥・稗・馬鈴薯等があり、又特用作物としては大麻・苧麻・煙草・胡麻・蓖麻・荏・西瓜等もある。又近年甜菜及び亞麻の栽培が有望と目せられ、紡績事



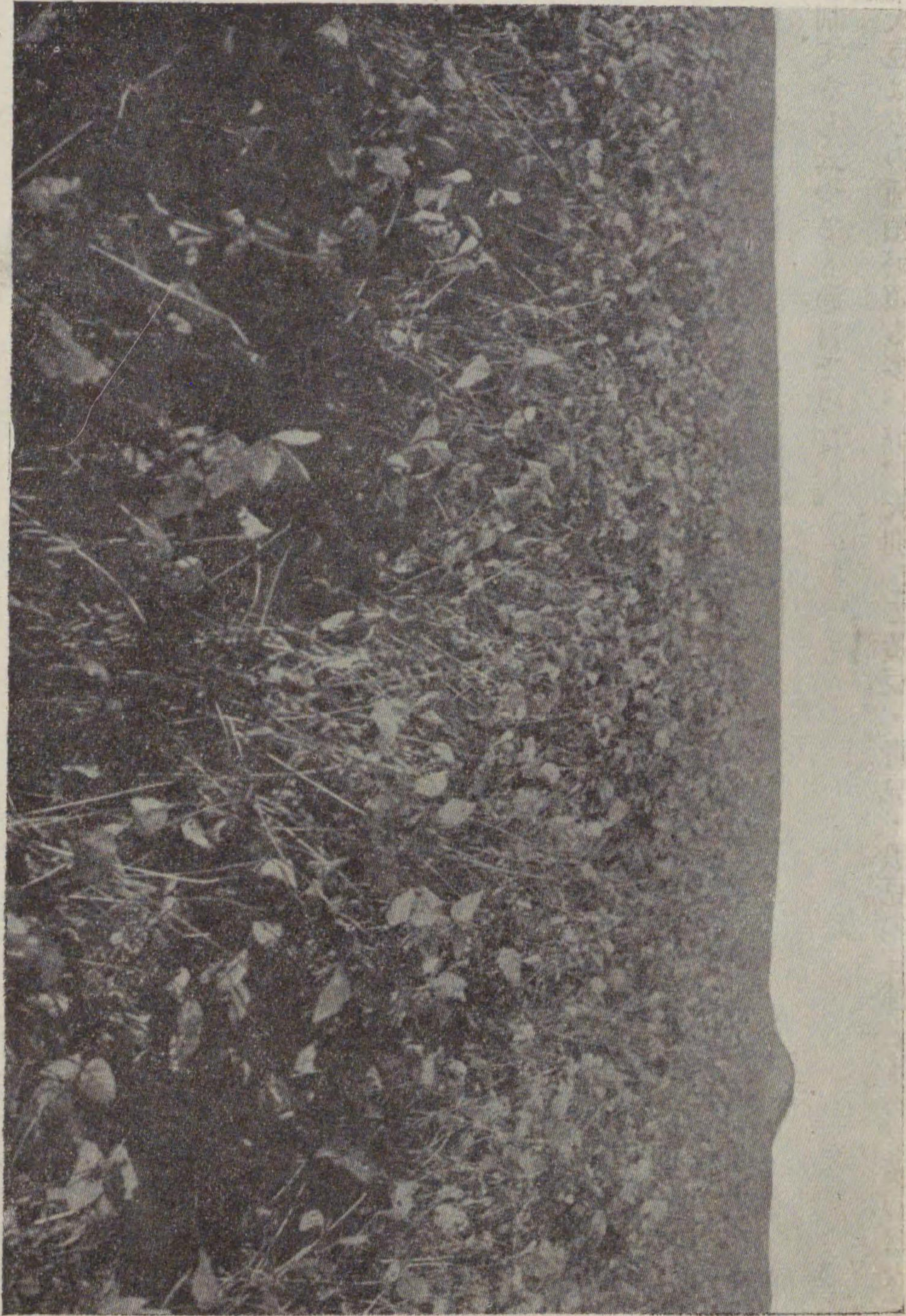
農作物分布圖

業の發達に伴つて南滿の南部には棉の栽培も有利とせられてゐる。果樹としては奉天以南に苹果・梨・葡萄等の栽培が見られる。大豆 滿洲農産物の王座を占むるものは大豆である。南滿洲の黄土が鑛物質に富むアルカリ

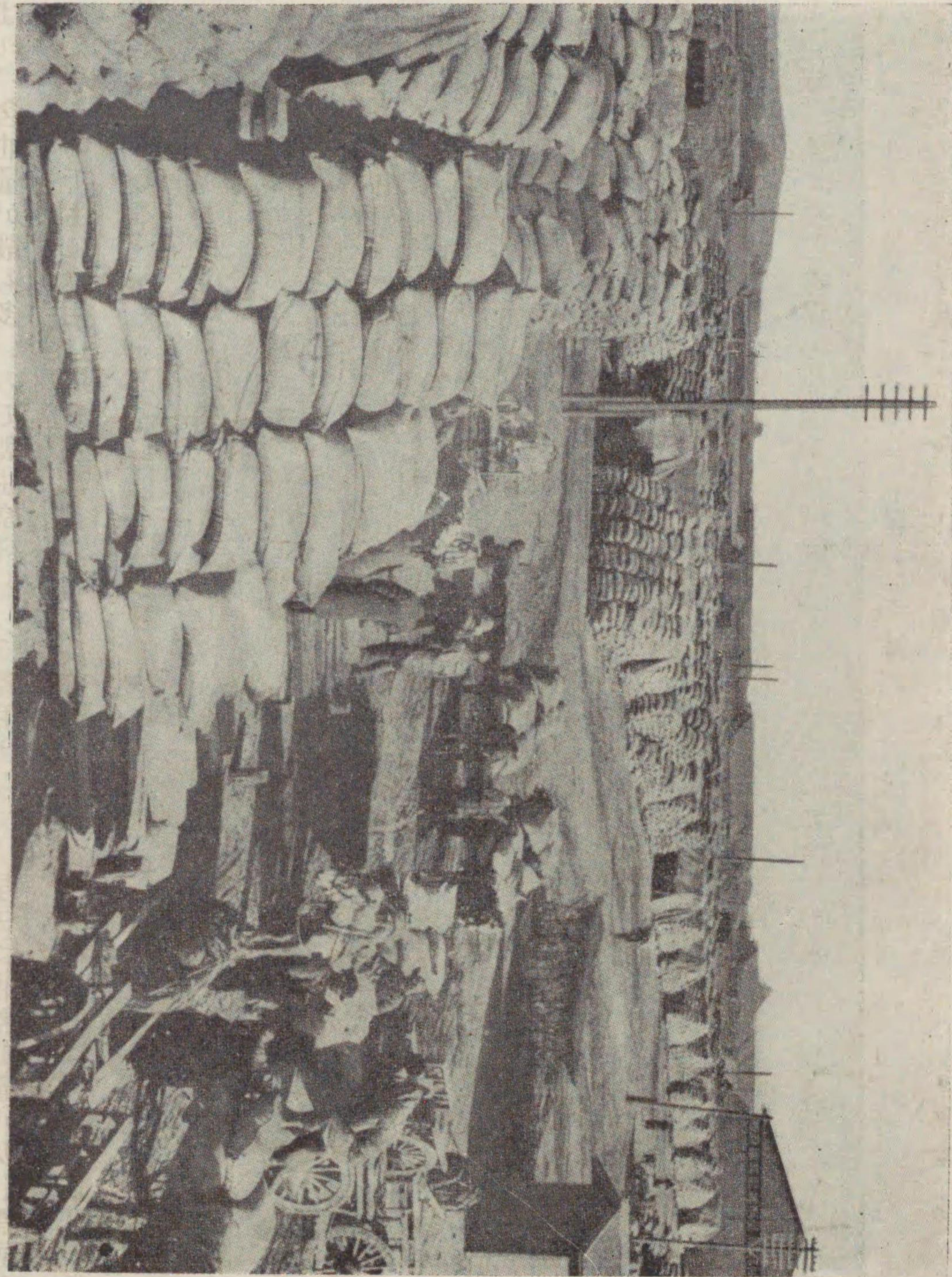
性の土壤であるため、豆類の栽培に好適してゐる上に、豆粕が肥料として日本へ、豆油が化學工業の原料として歐洲へ輸出せられるに及んで、その栽培が殊に盛になつたもので、その發達は實に僅々二三十年來のことである。即ち初めは單に農民の副食物に供せられるのみであつたが、一八五〇年頃にこれから油を搾ることが工夫せられ、専ら食用及び燈用に供し、豆粕は家畜の飼料としてゐた。その肥料としての利用は山東移民によつて試みられ始めたもので、これがわが國に輸入せられる様になつたのは實に日清戰役後のことであり、更に豆油が歐洲に進出したのは明治四十一年來のことで、三井物産會社がイギリスに試賣したのが意外の成功を収めたのである。その後化學工業の進歩に伴つて豆油の用途は益々擴張し、又豆粕も家畜の飼料としてアメリカ方面へ仕向けられるに至り、需要年々激増して遂に今日の如き盛況を呈するに至つた。

今や大豆は南滿から北滿に擴がり、遼河・松花江の流域に普く行き亘つたのみならず、更に嫩江の流域方面に擴張されんとしてゐる。随つて滿洲に於ける交通・金融その他の經濟機關は悉く大豆を主要の對象として活躍してゐるかの感があり、大豆の豊凶は實に滿洲經濟界の死命を制すると云つても過言ではない。

大豆はその種類が頗る多いが、大別して黄豆ホウソウ・青豆チントウ・黑豆ヘイトウの三種とする。黄豆は又元豆ユウソウとも



大豆



大豆の集積

呼ばれ、含油量が最も多いので製油原料として賞用せられ、青豆は稍含油量が少く黒豆は最も劣つて居るので主に食用に供せられる。而して普通に大豆と呼ばれるのは黄豆のことで最も廣く栽培されてゐる。

大豆の年産額は四百八十萬噸、若くは三千八百萬石と見積られる。これは全世界産額の七〇%にあたり、わが國の産額の十三倍餘に相當する。而してこの中國内に於て消費せられるものは食用・飼料及び種子用を合して僅かに六百萬石で、千二百萬石は製油原料に供せられ、二十萬石は大豆のまま輸出せられる。而も油房に於て生産される豆油及び豆粕もその八九割は輸出せられるのであるから、滿洲大豆は殆ど輸出のために栽培せられてゐると云つてもよい。わが國の米や麥とは違つて純然たる換金作物である。

大豆は従來南滿を主産地としてゐたが、近年北滿の發展著しく今やその地位を顛倒し、南滿千五百萬石に對して北滿は二千三百萬石となつた。それは鐵道の延長に伴ふて次第に奥地の開拓が進んで來たからである。即ち今やチチハルは北滿大豆の一大中心點で、こゝから北に延びる齊克線、更にその終點の克山から海倫まで百三十軒の鐵道が出來て、齊克線と呼海線とが連絡することになつたら、この地域の一帯は更に大豆の産額を増加するに至るであらう。而してそれが洮昂線を経て滿鐵に持ち來され、大連から輸出せられるに至るべきは想像に難くない。



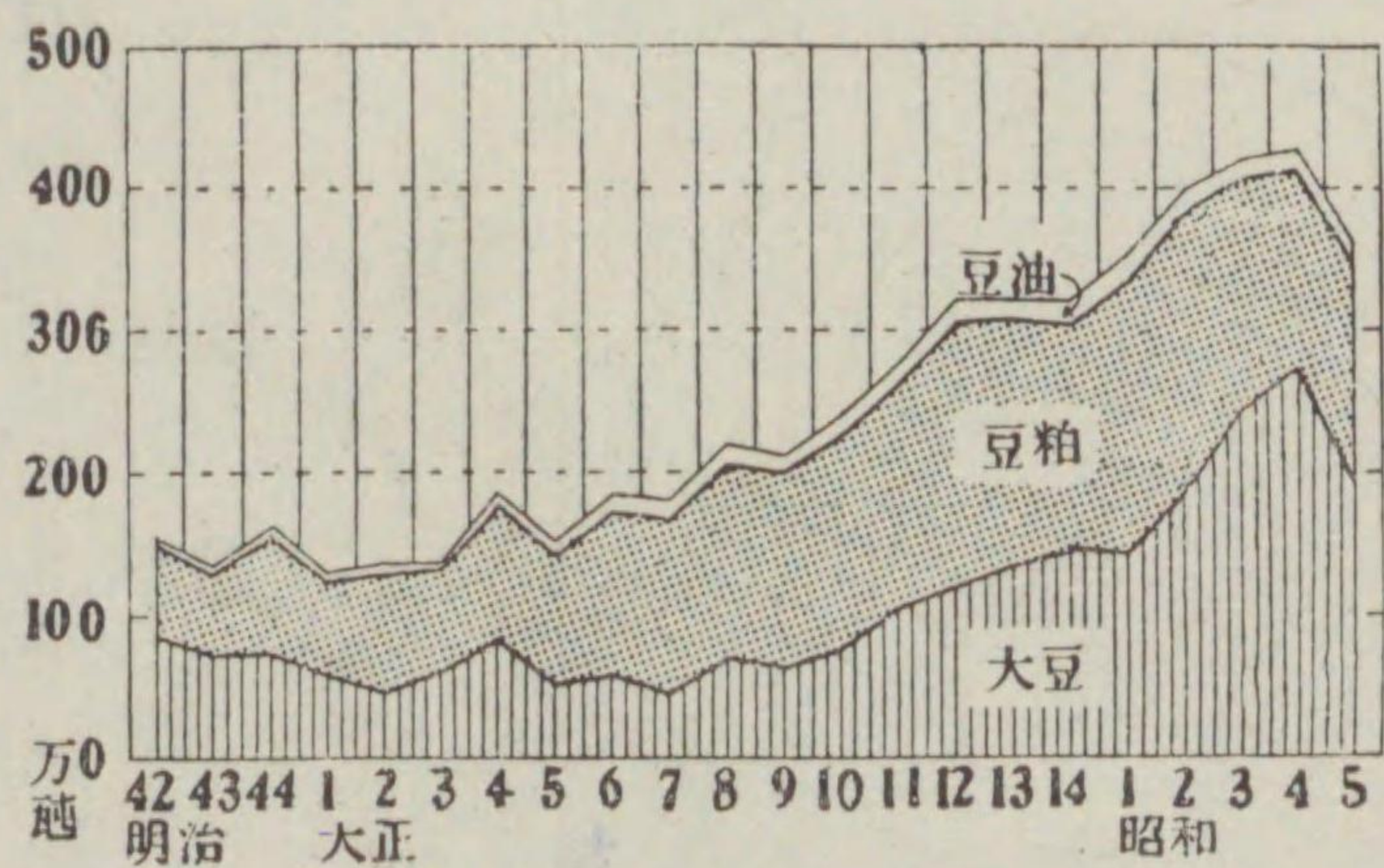
大豆生産分布圖 (田中氏による)

而も亦一面には東支鐵道によつてウラジホストックへの輸出も相當に多い。政情安定後の齊克線方面は、更に移民の一大吸收地點となり、涯しなき肥沃の未開地には一畝毎に大豆の花が咲き、それが又北へ北へと咲き誇つて行くことであらう。

北風強く吹き荒んで地面固く凍る頃は所謂大豆の出廻り時期で、荒漠たる曠野を、氷結せる江上を、數頭の馬に曳かせた大豆の櫓が幾列も幾列もつゞき、到る處の驛頭には文字通り大豆の山が築かれて行く。袋にも入れないバラのまま、で野積された大豆の山を見るとき、それは實に驚歎に値する一大偉觀と云はなければならぬ。

高粱 カオリヤン 高粱は滿洲特産の一で年産約四百六十萬噸、或は三千六百萬石で大豆と産額を上下してゐる。併しその大部分が土着人によつて消費せられる點に於て大豆と全く趣を異にし、日本の米麥等と等しく自家用作物と稱すべきものである。種類に類

と糯とがあるが、子實はこれを精白し、飯に炊いて土人の常食に供せられ、又高粱酒カオリヤンチウと稱する一種の燒酎を醸造し、綠豆に混じて豆素麵の原料にも供し、或は家畜の飼料ともなる。稗は燃



大豆、豆粕、豆油の輸出



高粱の刈入

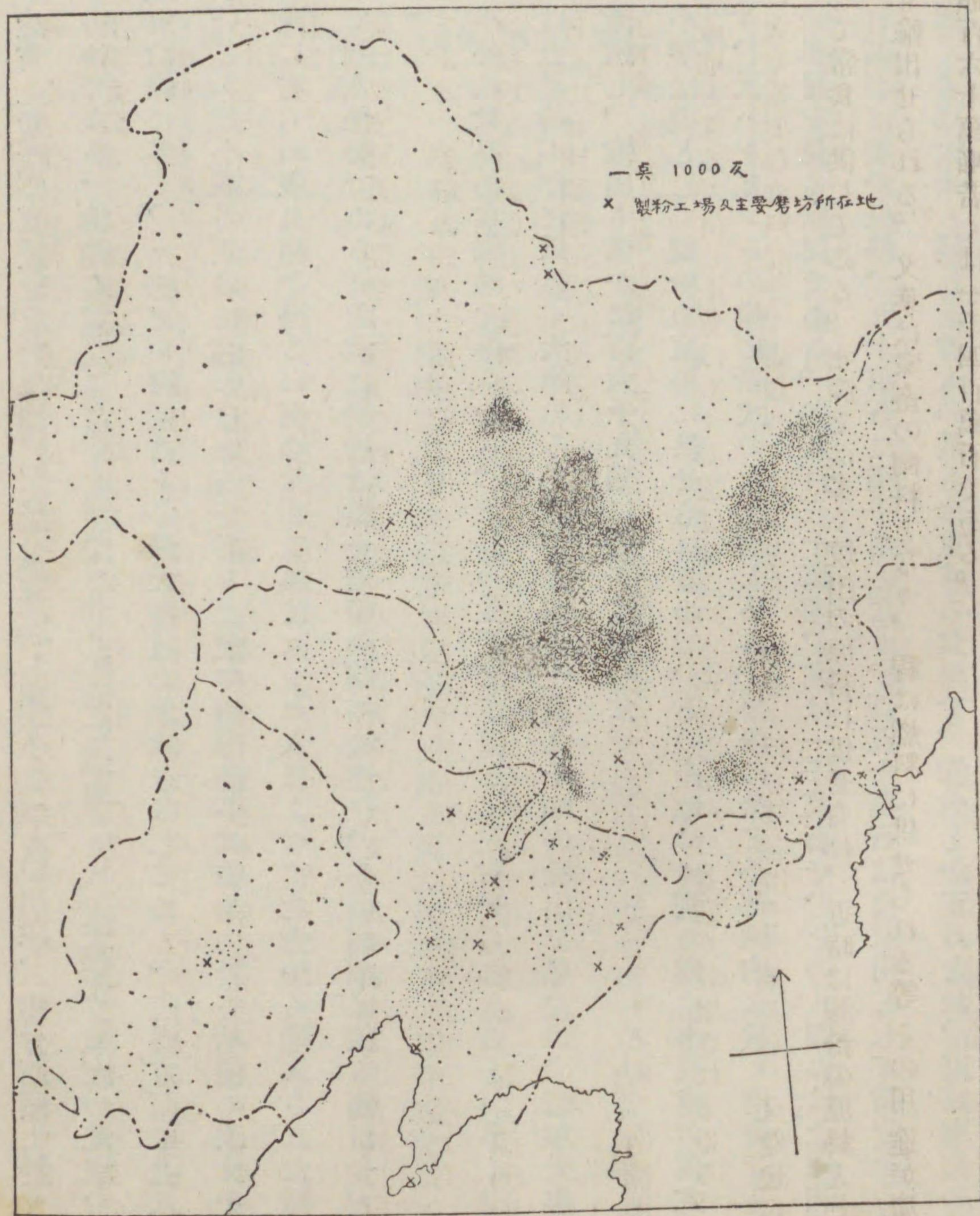
料として最も重要で、家庭に於て嚴寒を凌ぐに用ひられ、又地方に於ける小工業用の燃料ともなる。農家は又これを建築の材料として用ひ、アンペラ蓆に編んで敷物とする等實に滿洲の農家にとつて必須缺くべからざる作物となつてゐる。尙工業原料としては、子實は澱粉若くはアルコールの原料となり、稈は製紙用パルプの製造に供せられ、又その灰からは曹達が得られるといふことで、その將來は頗る注目されてゐる。殊にパルプの原料としては木材よりも遙かに有利であるといふが、たゞ原料稈を遠隔の地迄運搬する不利のために、未だ大工場の設立を困難とする事情にある。

高粱の生産地域は大豆と酷似してゐるが、重心は寧ろ南滿にあつて奉天省は全産額の五五%を産する。蓋し北部は稍氣温の不足を感じるからであらう。夏から秋にかけて、數米の高さに延びた高粱の密林は實に滿洲特有の景觀で、一度その中に足を入るれば再び出ることには出來ないといふは、或は馬賊の隠れ場となり、戦争の時には鹿砦にも利用せられる。成熟すると農夫は先づ鎌で根元二十糎位を残して刈り取り、二三十本宛を一束とし、十四五束を一纏として穂を上にして互に立てかけ、十日乃至二十日にして充分乾燥するを待ち、穂を切り取つて馬車などに積み、脱穀場に運んで來て棒の様なもので叩いて實を落とし、更に石臼で碾いて脱粒するのである。

粟 その作付面積及び産額に於て第三位を占めるものは粟である。粟は高粱と共に滿洲農民の主要食料で、又黄酒醸造の原料ともなり、糠は豚の飼料として重要で、稗は牛馬の飼料となり、燃料にも供せられる。食料としては高粱よりも上位に居り、黄酒も亦高粱酒よりは上等のものとして云はれる。その産地は南滿と北滿とに均分されてゐる。年産三百三十萬噸或は三千萬石である。

粟は又支那及び朝鮮へ輸出される高が少くない。それは支那人や朝鮮人の食料に供せられるのである。朝鮮の農夫は従來粟を作つて常食として居たが、米の内地移出が盛になつたのでこれが栽培を主業とし、食料の粟を滿洲から輸入する様になつたのである。即ち滿洲の粟は間接に日本の食糧問題解決に貢献してゐるわけである。

玉蜀黍 通稱包米と呼ばれ數種あるが、高温と多量の水分とを要求するので南滿洲の南部を主産地とする。併し土質はあまり選ばないので礫確な山地にも廣く栽培されてゐる。高粱・粟に次ぐ重要な食料品で、碾割つて粉末とし、小豆・綠豆等を混じて粥とし、又麵包に作つたりして常食に供してゐる。北滿では多く燒酎の原料に供せられ、近時は澱粉の原料として日本へも輸出せられる。又葉は家畜の飼料となり、稗は燃料に供せられる等その用途が廣い。年産額百六十萬噸若くは一千四百萬石である。



小麥分佈圖 (田中氏による)

小麥 叙上の各作物と共に滿洲の五大農産物と稱することが出来、作付面積に於ては第四位を占めてゐる。地味・氣候の關係上南滿よりも北滿を適地とし、松花江・嫩江の流域、殊に東支鐵道沿線に多く、ハルビン附近はその最大の核心地域をなしてゐる。南滿方面は七八月に雨の多いことが小麥の栽培に適しないのである。近年滿鐵農事試験場に於て品種の改良を試み、米國産に劣らぬ優良種を得るに至つた。これはロシヤ人によつて北方から輸入された種類と競争して頗る優勢である。北滿に於ける黒土地帯の開拓に伴ひ、その將來は頗る囑目せられてゐる。

小麥は世界的食糧品であるから、世界の生産と市況とに左右せられることが多く、大正九年には世界的不作に乗じて大連のみからでも四十三萬九千噸の輸出を見たが、昭和元年には産額も激減し、輸出も僅かに百六十九噸に過ぎなかつた。

小麥は主として製粉の原料に供せられるので、その産地には到る處に小規模の舊式製粉所があり、又ハルビンその他に新式の大工場もある。麥粉は殆ど全部國內に於て消費せられ、尙多少の不足を見る狀況である。年産百三十萬噸、或は一千萬石で、その八四％は北滿洲に産し、六百萬石は製粉原料、九十萬石は種子用となり、百五十萬石は自家用として消費せられる。

米 米は大米と稱し土着人の最も珍重する食料で、節句とか正月とか、冠婚葬祭の時などに

食膳に上され、上流社會に於ては常食に供せられる。水稻と陸稻の兩種があつてその作付面積及び收穫高は左表の通りである。即ち陸稻は水稻よりも少し多いが、その單位面積に對する平均收量は遙かに劣つてゐる。而してその分布を見ると兩者共に北滿よりも南滿に多い。

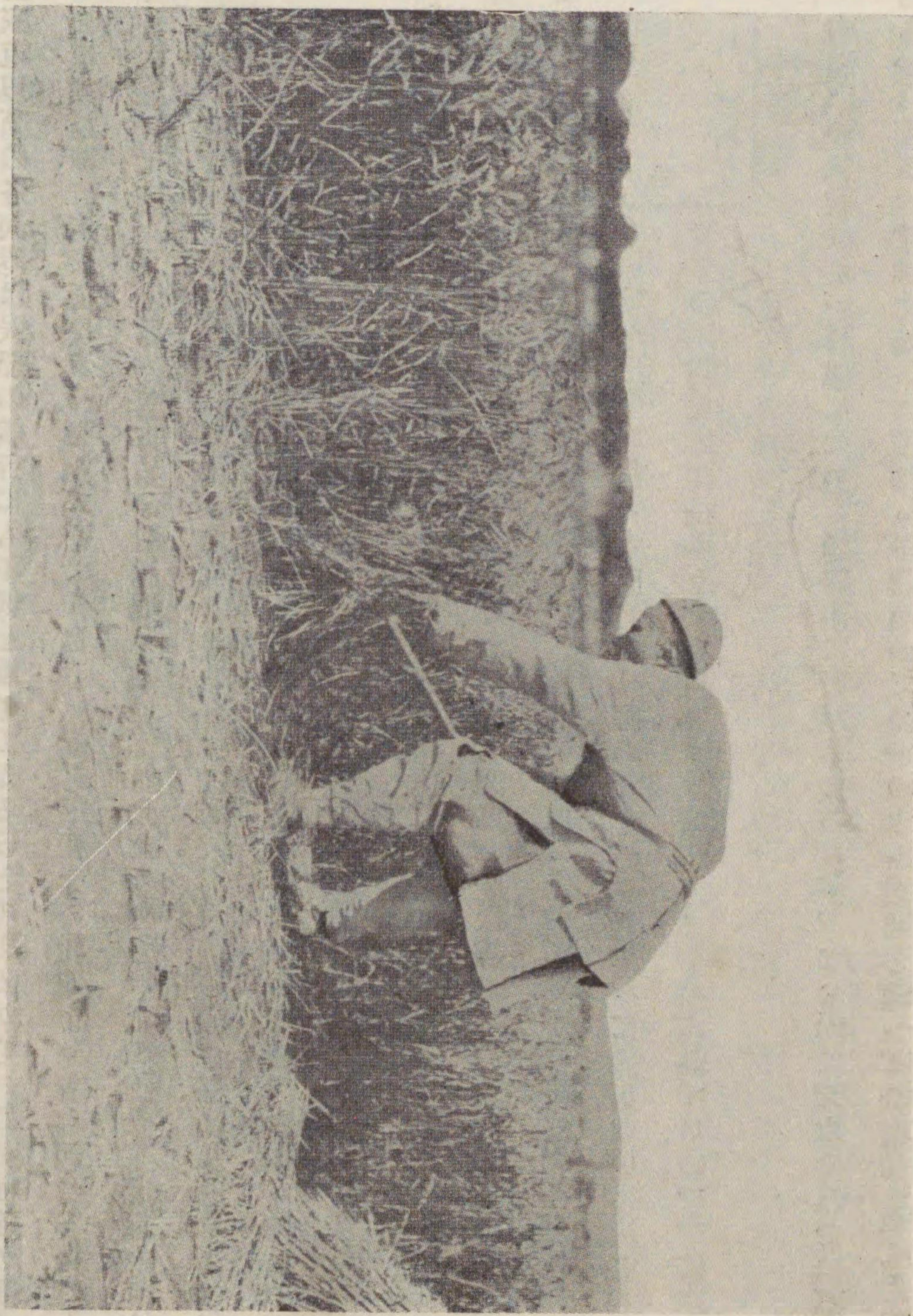
| 種 類 | 作付面積(方軒) | 收穫高(米噸) |
|-----|----------|---------|
| 水 稻 | 767.29 | 130.750 |
| 陸 稻 | 1.096.40 | 156.250 |
| 計 | 1.863.69 | 287.000 |

米 生 産 表 (1929)

陸稻は古くから滿洲に栽培せられたもので、北緯四十五度以南の地に廣く分布し、東は間島地方から西は奉天省西端の綏中縣に及んでゐる。而して海城から長春までの滿鐵沿線附近はその主産地で、尙年々増加の傾向が著しい。

水稻は約五十年前始めて朝鮮人によつて試みられたもので、比較的雨の多い鴨綠江の下流地方から漸次間島方面に擴がり、後滿鐵會社の獎勵と相俟つて鐵道沿線各地から渾河の流域、海龍附近から遼河の中流その他にも及んだ。現在の水田面積は七萬六千ヘクタールに過ぎないけれども、將來の開墾見込面積は五十五萬乃至百萬ヘクタールに達するので、將來最も注意すべき資源と云はなければならぬ。

南滿洲の氣候は夏が高温なため水稻耕作に好適してゐるが、たゞ水は天水のみでは不充分であるから灌漑の設備を施さねばならぬ。随つて將來の水田適地と云へば松花江・嫩江・牡丹江・



刈稻の夫農人録

遼河・鴨綠江・渾河・太子河等の河岸附近に限られてゐる。たゞ遼河の如きは水量が乏しいので、鄭家屯以下の各河港は民船の航行にも不便を感じてゐるほどであるから、この水を水田に引くことにすれば一層交通に支障を來すこととなる。そこで河道の屈曲を整理し河身を修理して水量を本流に集中し、上流の各地には貯水池を設けて雨水を保存し、以て水量を調節して交通の便を計ると共に、灌漑にも資せんとするの計畫があつて、一種の國際的管理の下に着々その工を進め、既にその一部を完成してゐる。

日本人は條約によつて土地商租の權利を有するにも拘はらず、從來支那軍閥のためにこれを無視せられ、ために鮮人の開發した水田も無法に沒收されなどしてあらゆる迫害を受けて來、遂には萬寶山事件なども發生したのであるが、今後は商租權も確定するので鮮人の米作は一大發展を見るに至るであらう。

特用作物 大麻は線麻と呼ばれ、奉天省の中央部から吉林省の東部附近に多く、作付面積約二萬ヘクタールに及ぶ。青麻即ち苧麻も亦同地方及び遼河・嫩江・豆滿江附近に多く、二萬ヘクタール以上栽培せられてゐる。

綿は滿鐵沿線の各地に多く、殊に遼陽附近及び關東州を主とするが、現在では總面積三萬四千ヘクタールに過ぎないし、品質も亦優良でなく、纖維が太くて弾力が強いので、主として中



煙草の原産地

入綿や蒲團綿に用ひられてゐるが、中には四十番手まで紡出し得る良品種もあるといふことで、將來品種の改良と耕作法の改善とを計るならば、需要の増加と相俟つて産額も激増するに至るであらう。

煙草は南北滿洲の各地に栽培せられるが、概して品質が不良で紙巻煙草には不適當であり、たゞ地方農民の需要を充すに過ぎない。併し鳳凰城・得利寺・瓦房店等に於て優良種の栽培が漸次盛になりつゝある。その全産額は約三萬一千噸と見積られる。

果樹は遼陽以南の地に勃興しつゝある。殊に熊岳城・金州・旅順等の附近には適當な傾斜地が多く、排水もよく日照も充分で氣温湿度も好適してゐるから、果樹園の面積が年々増加する。即ち苹果は二千七百ヘクタール、梨は六百ヘクタールで、葡萄・桃櫻・桃・杏等がこれに次でゐる。併し現在に於てはその産額は微々たるものであり、又適地が局部的で廣く各地に行はれる見込みもないけれども、特殊の技工を要する點から日本人にとつて最も有望な産業である。

第二節 林産資源

要説 鴨綠江・松花江等の流域には廣大な森林があつて、多量の木材を伐り出し

てゐるし、又興安嶺方面にも稍々見るべき林地がある。主として建築その他の用材及び薪炭材として利用され、安東と吉林とはその集散及び製材の中心である。

森林の分布

滿洲は古來到る處に森林がよく繁茂して、清朝時代には相當に保護も行き届いて

ゐたが、その後開墾と濫伐とのために次第に荒廢し、今は關東州その他鐵道の沿線には禿山が多くなつてゐるが、併し人跡稀な地域には今も太古のまゝなる密林が多く、森林の面積は全面積の約三〇%を占めてゐる。

これ等の森林は主として奉天省及び吉林省の東部、即ち鴨綠江・豆滿江及び松花江の本支流方面に分布し、黒龍江省方面では大小興安嶺の森林に見るべきものがあるが、その他の地方は多く疎林又は無立木地で、蒙古方面には殊に無樹地帯が多い。これ主として雨量の不足によるものであらう。滿蒙森林の總蓄材量は凡そ百五十億石

| 地域 | 森林面積 (ヘクタール) | 蓄積材量 (千石) |
|--------|--------------|------------|
| 鴨綠江流域 | 971.022 | 362.332 |
| 松花江流域 | 1,422.470 | 874.036 |
| 豆滿江流域 | 824.237 | 420.400 |
| 牡丹江流域 | 628.560 | 420.950 |
| 拉林河流域 | 627.437 | 300.498 |
| 東支鐵道東部 | 2,624.551 | 898.296 |
| 三姓地方 | 5,238.082 | 2,615.301 |
| 大興安嶺 | 13,860.000 | 5,600.000 |
| 小興安嶺 | 9,900.000 | 3,500.000 |
| 計 | 36,096.359 | 14,991.808 |

森林面積及蓄積材量

と見積られ、全日本の蓄積材量の二倍半に及んでゐる。これは決して無盡藏といふ程に豊富な資源といふことは出来ないが、たゞ交通の不便なと地方需要が少いとのために伐採量が少



吉林省の森林

いから、現在の状態で押して行くとするればその生命は相當長く保ち得られるであらう。

主要樹種

樹種は已に知られたものが約三百種ほどあるが、その中有用樹種として多く見られるものは二十種内外で、就中針葉樹ではてうせんまつ・てうせんもみ・てうせんたうひ・えぞまつ・からまつ・たうしらべ等、濶葉樹ではかうらいみづなら・もんごりかしは・あむーるしなのき・まんしうかへで・やちだも・はるにれ・きはだ・やまならし・どろのき・しらかんば等である。これ等は概ね混淆林をなしてゐて、その歩合は勿論一定してゐないが、大體針葉樹四割、濶葉樹六割と見て大差がない。針葉樹の中で

はてうせんまつが約二分の一、もみ・たうひ類が約三割を占めてゐるが、濶葉樹は各種平均に存在して特に多いものは無い。

てうせんまつ即ち紅松は邊材は白色心材は微紅色で、樹脂に富んでゐるから能く水濕に耐へて腐蝕しないので、建築材・船材・橋梁材及び家具材として賞用せられる。てうせんもみ即ち杉松は白色輕軟の材質を有し、木理が通直であるから加工に便利で建築材・戸障子材・燐寸軸木・經木等に利用せられ、バルブ材としても有望である。てうせんたうひは又魚鱗松と云ひ、わが北海道の蝦夷松に類して心材は黄赤色である。木理が細く美しいので建築用材・電柱・ビール箱等に使用せられる。

かうらいみづならば柞樹と稱し柞蠶飼育用樹の一である。邊材は淡黄色、心材は淡褐色で光澤がある。材は重くて硬く水濕に耐へるので建築材・鐵道枕木・家具・車輛・樂器等に使用せられる。やちだもみは水曲柳と稱せられ、邊材は帶褐色、心材は褐色である。木理は粗大であるが材質は堅いので家具・車軸・枕木に用ひられる。はるにれ(榆木)しらかんば(白樺)は共に材質が緻密で硬いから家具材・車軸等に用ひられ、どろのき(楊樹)は白色で一種の光澤があり、材質が柔軟で靱性に富むから燐寸軸木として特に好適してゐる。

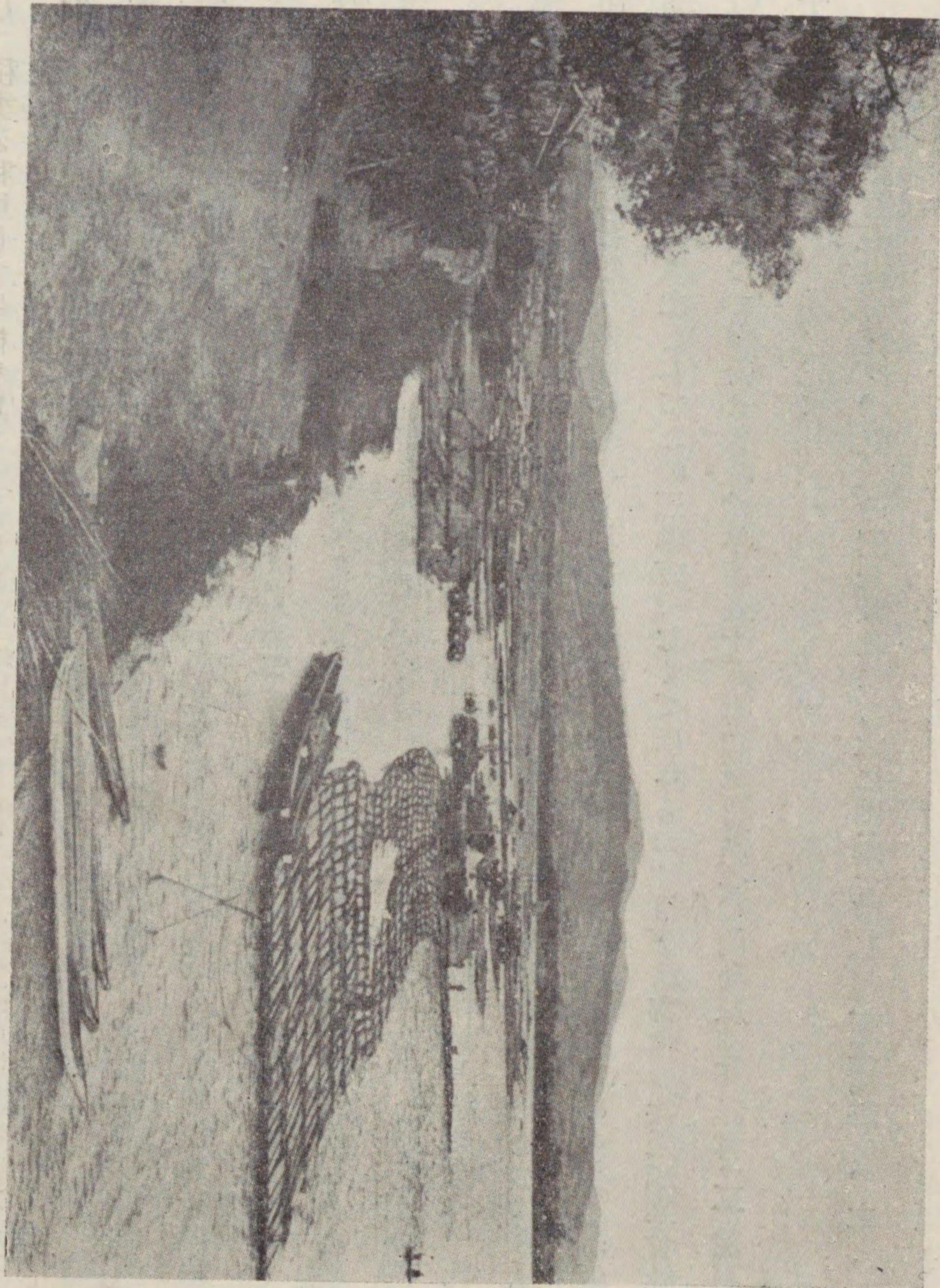
木材事業

鴨綠江上流の森林に産する木材は、朝鮮側のものと共に鴨綠江材と總稱せられ、て

うせんまつ・てうせんもみ・からまつ等の針葉樹を主とする。日支合辦の鴨綠江採木会社がその伐採・運搬を經營するところ、年々の伐採量は百三十萬石乃至二百二十萬石である。(朝鮮側は總督府營林廠の經營で、森林面積及び材積は支那側の二倍以上である。)伐木造材は十月下旬頃から始まつて十二月中旬頃に終り、これを牛馬にひかせて河岸に運び、春季解氷後の出水を待つて管流し、本流に至れば筏に編成し、約一二ヶ月を要して安東附近に到着する。この流筏は毎年六月頃から九月頃まで、新義州から安東の附近は河面悉く木材を以て蔽はるゝの盛況を呈する。

松花江上流方面の木材は主として筏によつて吉林に出廻るので吉林材と稱せられ、牡丹江上流方面のものは吉敦線によつて吉林方面に送られてゐるが、將來吉會線が全通したら豆滿江方面のものと共に北鮮に搬出せられ、以て我が國に供給せられる様になるであらう。わが國が滿洲材を期待するのは主としてこの三地方でなくてはならぬ。目下は吉林の共榮起業會社、新京の豊材公司等によつて經營せられ、年産五十萬石乃至百萬石、間島及び琿春材二十萬石乃至五十萬石である。

東支鐵道東部沿線附近は、鐵道の測量敷設にも大に困難を感じた一大樹海で、主として鐵道によつてハルビンに輸送せられ北滿材と通稱せられる。概ね九月頃から翌年三月頃まで伐採



松花江の筏

し、積雪を利用して牛橐を以て、又は沼澤地や浅い河流に浮べた筏を馬に挽かせて附近の停車場まで運ぶので、東支線に短距離の支線が澤山出来てゐるのはこれ等木材搬出のためである。中東海林實業公司等の經營する處でロシア人の活動が著しい。東支鐵道西部沿線の森林は伊列克特驛を中心とする興安嶺森林で、日露支合辦の札免公司の經營する處で又ハルビンで集散せられる。兩者を合して年産百三十萬石乃至百七十萬石である。

三姓地方の森林は松花江・黒龍江・ウスリ江の間に挟まれた廣大な地域を占め、材積亦頗る多いが河が北流してゐるので搬出に利用が出来ない。將來鐵道が發達したらウラジホストック若くはハルビン方面に出廻る様になるであらう。

これを約言すれば現在滿蒙の木材は尙交通不便のために充分開發されてゐない。建築材としては天津方面に輸送せられるものも多いが、ハルビン・長春・奉天・大連等を中心とする地方消費量が頗る多く、枕木・電柱・棺材・杭木・薪炭等に利用せられるのみで、工藝的利用はまだ多く見ない。バルブ工業は安東に於て試みられたが安價な輸入バルブと對抗して採算がとれない。併しながらこれは將來研究を要することと思ふ。バルブ用材としてはてうせんもみ・てうせんたうひ・たうしらべ等があつて鴨綠江材一千七百萬石、吉林材五千萬石、北滿材七百萬石、三姓材六千三百萬石、合計一億三千九百萬石の蓄積量があるものと推定されてゐる。

森林行政 從來種々の法令規則は發布されてゐるが、殆ど實行されないで山火濫伐相踵ぎ、森林の荒廢年一年と烈しく、且警察力の不備で馬賊等の横行があつて事業の遂行は著しく阻碍されてゐた。併し造林の必要は已に官民の痛感しつつある處で、滿鐵に於ても苗木の無償頒與等を実行し來つた。今後は政情の安定に伴つて林政も大に整つて、資源の涵養に遺憾なきを期し得ることであらう。

第三節 牧養資源

要説 滿洲人は家畜を馴らすことが巧で、農家では大抵豚・羊・馬・牛・驢・騾などを飼つて役用又は食用に供し、蒙古方面では遊牧も行はれてゐる。又遼東半島には柞蠶の飼育が盛で、安東・蓋平は柞蠶系の集散地として名高い。

畜産概況 畜産業はまだ頗る幼稚であつて、牛・馬・騾等の大動物は主として農家の役用として飼はれるのみであり、羊・豚・鶏等の小動物は自家食肉用として飼養せられるに過ぎない有様で、畜産として市場に出るものは極めて微々たるものである。農耕の出来ない蒙古方面には自然の大牧場も展開するが、そこに住む遊牧の民はまだ原始的生活の域を脱しないから、その有

する家畜はたゞ辛うじて彼等の生活を維持する程度を出ない。又たとひそこに相當の生産物があるにしても、交通の便が開けないので搬出は至難である。併し地域が廣漠たるものであるから、施設經營その宜しきを得たならば、將來には相當期待すべきものがあらう。

主要家畜頭數 (單位千頭、昭和四年)

| 種別 | 奉天省 | 吉林省 | 黑龍江省 | 熱河省 | 計 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|
| 牛 | 460 | 400 | 660 | 1,120 | 2,370 |
| 馬 | 720 | 680 | 1,020 | 810 | 3,230 |
| 騾 | 250 | 260 | 150 | 70 | 730 |
| 驢 | 310 | 110 | 50 | 100 | 570 |
| 羊 | 430 | 180 | 1,940 | 2,000 | 4,550 |
| 豚 | 3,560 | 2,190 | 1,790 | 1,000 | 8,540 |

主要家畜 滿洲の農業は所謂有畜農であつて、各農家少くとも三四頭の役畜を有しないものは無い。而して彼等はこれを馴致同化する技能が頗る優秀で、五六頭から十頭位の牛・馬などを雜然と轅につけ、一條の鞭を以て自由に大車を行つて巧妙な操縦ぶりは、實に一種天才的とも云ふべく、到底邦人の眞似得ざる所である。馬は良駿を以て古來その名が高い。蒙古系であつて體高一米三、體重二六三匹を平均とする。即ち比較的矮小な方であるが各部の均整は良好で、體質極めて強健、粗食に堪へ持久力に富み、乗用及び輓用として好適してゐる。

牛には朝鮮系統・山東系統・滿洲系統及び蒙古系統がある。一般に後軀の發育が不良であるが堅忍従順で粗飼粗管理に堪へるから役用としては必要である。滿洲牛は肉量が少く肉味も劣り乳量も少いから、馬と共に將來改良の餘地が多い。蒙古牛は主と

して乳をとる爲めに飼養され、肉も亦利用せられるが皮革はその質が劣り、牛蠅の寄生のために多数の孔損があるのを缺點とする。

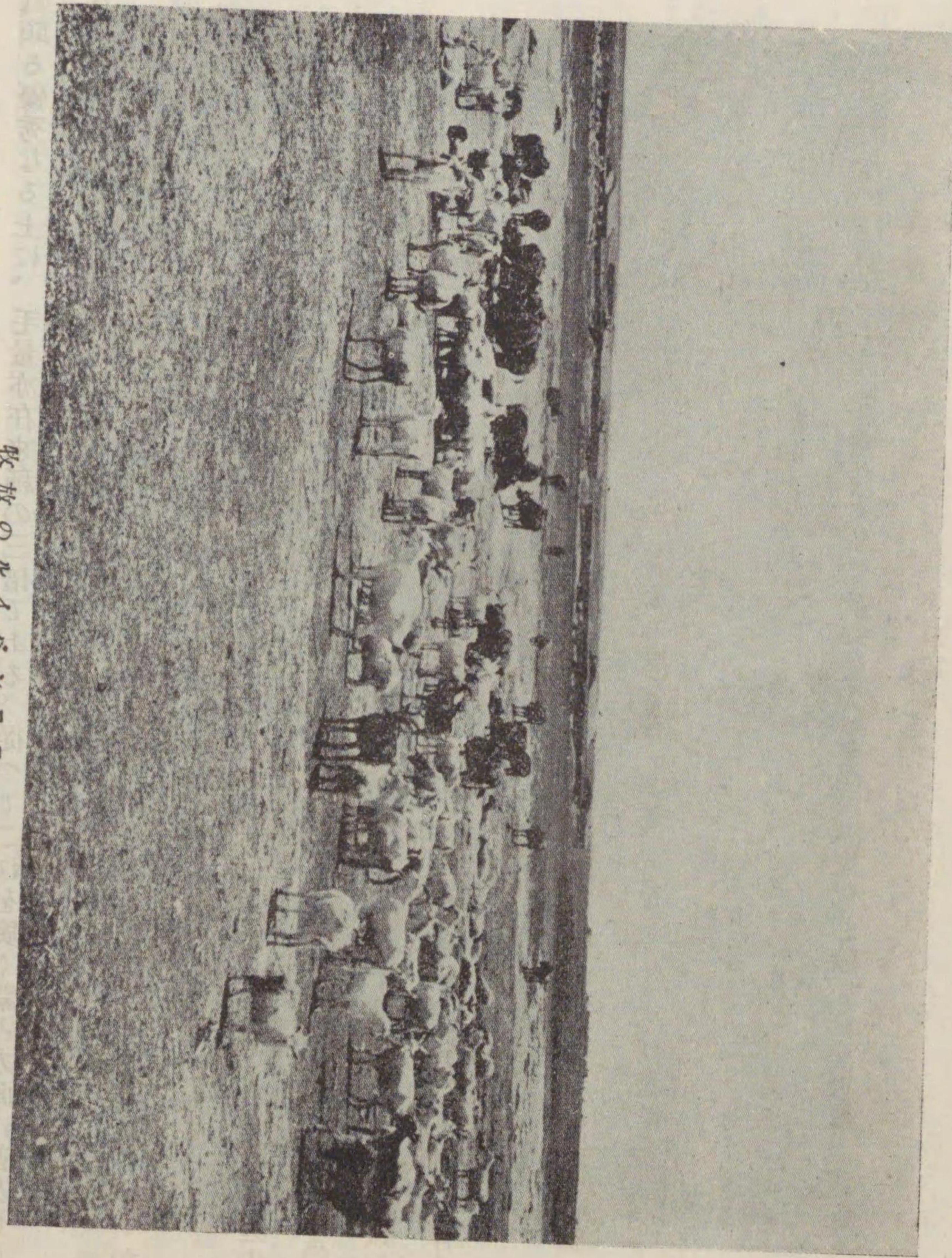
驢は體高九十糎であるが割合に力量が大で、農耕及び駄用として盛に用ひられる。牡驢と牝馬の交配によつて産するものは騾で、體軀は通例馬よりも大で耕作運搬に使役せられ、堅忍よく重役に服する點は馬に優つてゐる。

豚は最も多く飼養せられ、毎戸必ず數頭、多きは數十頭を養つてゐる。大型・中型・小型の三種あるが何れも頗る多産で一腹に十頭乃至二十頭を産む。肉は食用、糞は肥料として最も重要で、その粗剛な鬃毛は刷子用として大部分が大阪へ輸出せられる。

羊は緬羊・山羊共に蒙古種で従來主に肉用及び毛皮用を目的とし、羊毛は副産物として取扱はれてゐたものである。併し近年は原毛として米國に輸出され、わが國へも亦送られる様になつた。緬羊は主に蒙古方面に於て專業的に飼養せられ、體高六十糎内外、體重は牝が二十七匹から三十八匹、牡が五十六匹位ある。養分を貯藏する脂肪尾のあるのが特徴であるが、毛質は粗剛で太く、卷縮度の少い缺點があり産毛量も亦極めて少い。毛色は純白なものと黒又は褐色の斑點を有するものがあり、通例春秋二季に剪收する。近年滿鐵ではアメリカから種羊を購入し、數回の雜種をつくつて純メリノ種と異なるない優良種を得ることに成功した。即ちその毛



メ リ ノ の 羊



牧羊の風景

質頗る優秀なる上に、毛量亦在來種の三倍である。従つてこれを廣く蒙古方面に普及せしめたならば、日本の原毛問題解決に資する處大なるものがあらう。

山羊は南滿方面で副業的に飼養せられるものが多い。緬羊よりも小さく産毛量も少いが、毛質は頗る良好である。近年わが毛織物業の發達に伴つて次第に發展の傾向がある。

養畜様式 家畜の飼養管理は極めて粗雑で、漢人の農家では役畜は粗末な小屋又は庭内の露天に繋ぎ、飼料は粟稈を主とし玉蜀黍稈・麥稈・野草・豆稈等を與へ、濃厚飼料としては高粱・豆粕・糠等を混へる。而も厩舎に褥草を與へることをしないし、豚は晝間は放牧し夜は豚舎に入れ、粟糠を煮て朝夕與へる。秋の收穫後など、圃上に餌を漁つて活潑に馳驅してゐる有様は滿洲の特色ある一景觀である。羊は夜間小屋に入れるが冬も多くは放牧である。

蒙古では放牧のみが行はれ厩舎は全く無い。夏は旱魃のために牧草を追ふて低地に移り、冬は積雪を恐れて高丘に移動する。而して羊の皮を着、乳肉を食し、その毛氈を以て屋を包み、衣食住悉く羊に依據するのである。

畜産物 蒙古方面の生畜は相當多數に上る見込であるが、多くは自給的産業であるから商品としての生産は皆無と云つてよい。併し將來この地方に大規模の牧羊業を興すこと必ずしも不可能ではあるまい。

滿鐵及び東支鐵道沿線方面には肉製品その他各種の畜産物が少くない。豚肉は殆ど地方消費に充てられるのみであり、牛肉は食味が劣るが精肉歩合は内地牛に比して遜色がない。北滿には露人によるハムや腸詰の製造が行はれ、大連・普蘭店等にも肉工場がある。併し畜産中最も有望なものは毛及び毛製品である。毛の中主なるものは羊毛であつて、その年産額は二百四十萬疋と見積られ、濠洲産毛等に混じて絨氈用等に供せられる。豚毛これに次で約百八十萬疋、牛毛百萬疋、馬毛五十萬疋を産し、南滿鐵道によつて運搬せられるもの合計三百二十萬疋である。

皮革には牛皮・馬皮・羊皮・豚皮等がある。品質は下等であるが産額は多い。毛皮は頗る優良なものも多く、古來高級毛皮の産地として有名である。鼬皮・栗鼠皮・狐皮・貂皮・タラバカン皮・狸皮・犬皮・猫皮・山羊皮等が主なもので、年産二千四百萬枚と稱せられ、黑龍江省最も多く吉林省の北部がこれに次である。英米諸國への輸出高總計一千萬圓に近い。

羊腸・豚腸・牛腸等の獸腸類は食用・運動具用・飛行船氣囊用等に供せられ、主として米・獨・英等に輸出せられるが、蒙古方面では尙多くは放棄せられてゐるから、將來開拓すべき一資源と稱すべきであらう。

家禽 最も多いのは雞で家鴨・鶩鳥がこれに次である。雞は形中位で羽毛は少いが性は敏活で

産卵数は年百個内外である。家鴨は肉卵共に美味で一ヶ年平均三百個の産卵がある。雞の總數は約千二百七十萬羽、家鴨は二百三十萬羽、鶩鳥は三十萬羽内外である。

養蠶 明治四十一年關東州の農事試験場で、日本蠶種を輸入飼育したのが始めであるが、地味氣候は桑の生育に適し、空氣が乾燥して飼育管理は極めて容易であり、一般に害蟲少くて蠶は強健に發育するし、加ふるに勞銀が廉いから前途頗る有望である。奉天以南では春一回、夏一回、秋二回の飼育が可能であり、奉天以北でも夏一回、秋二回は可能であるといふ。最近の生産は關東州を主として年額約八百二十石に過ぎない。

柞蠶 柞蠶即ち野蠶は約百年前山東省から移入せられたもので、奉天以南の山地一帯に廣く分布し、蓋平附近は最も有名である。飼育用の柞樹は櫟・檜・榲等の樹種で、多くは自然林を用ひるが蓋平附近では造林によつてゐる。放育地は日光の直射し通風のよい處を選ぶが、北風を遮る南向斜面の暖地は最良である。飼育の季節は春秋の二期で、卵の孵化から收繭までの日數は約二ヶ月である。

滿洲柞蠶の總産額は概算七八十億粒で、各地に散在する小規模の工場に於て製糸せられ、主として安東及大連を經由して日本に輸出せられ、絹綃の原料となつてゐる。尙將來飼育可能な面積百五十二萬ヘクタールで、その過半は奉天省内にあり、産繭三百八十億粒を得られる見込

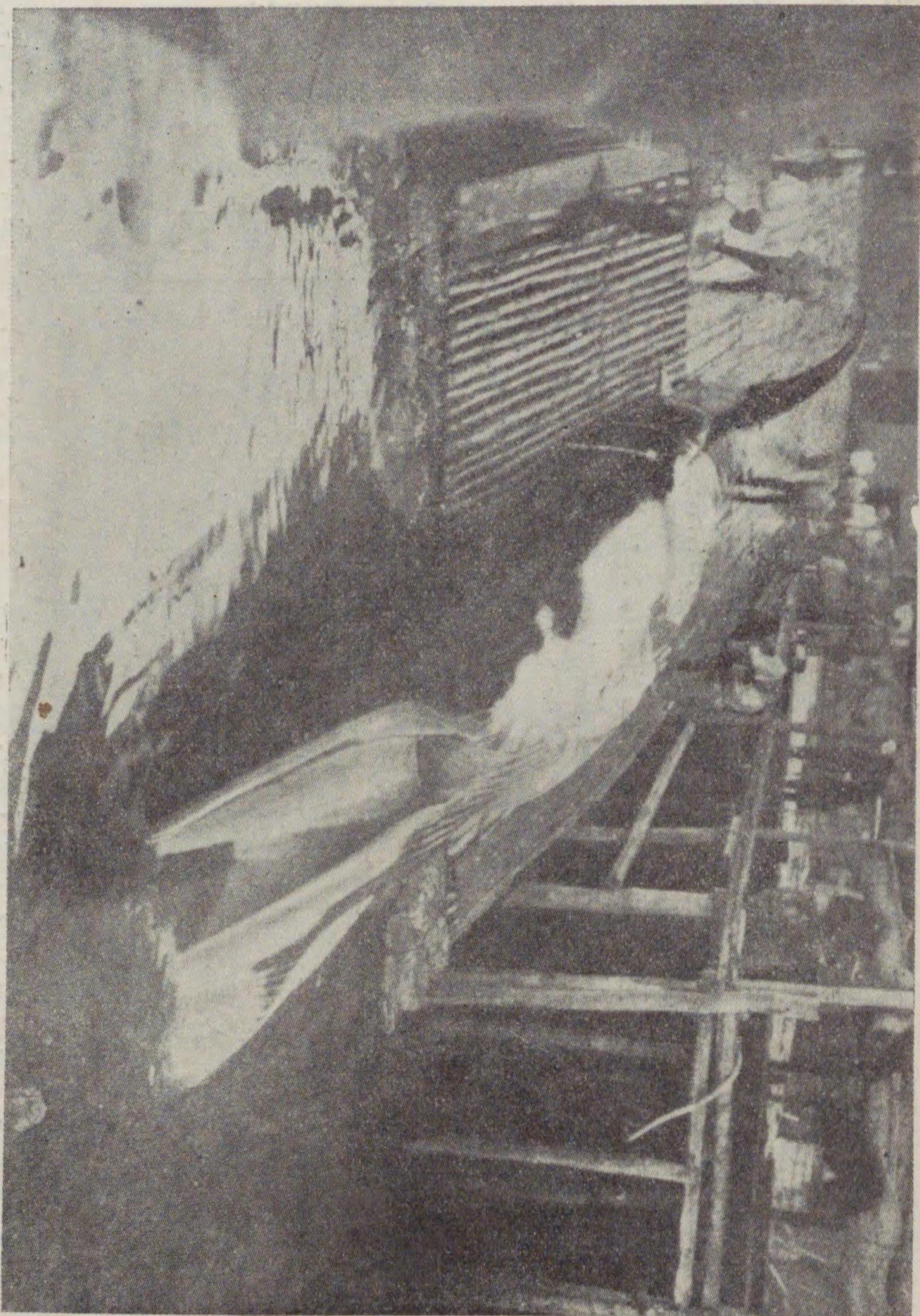
である。

第四節 水産資源

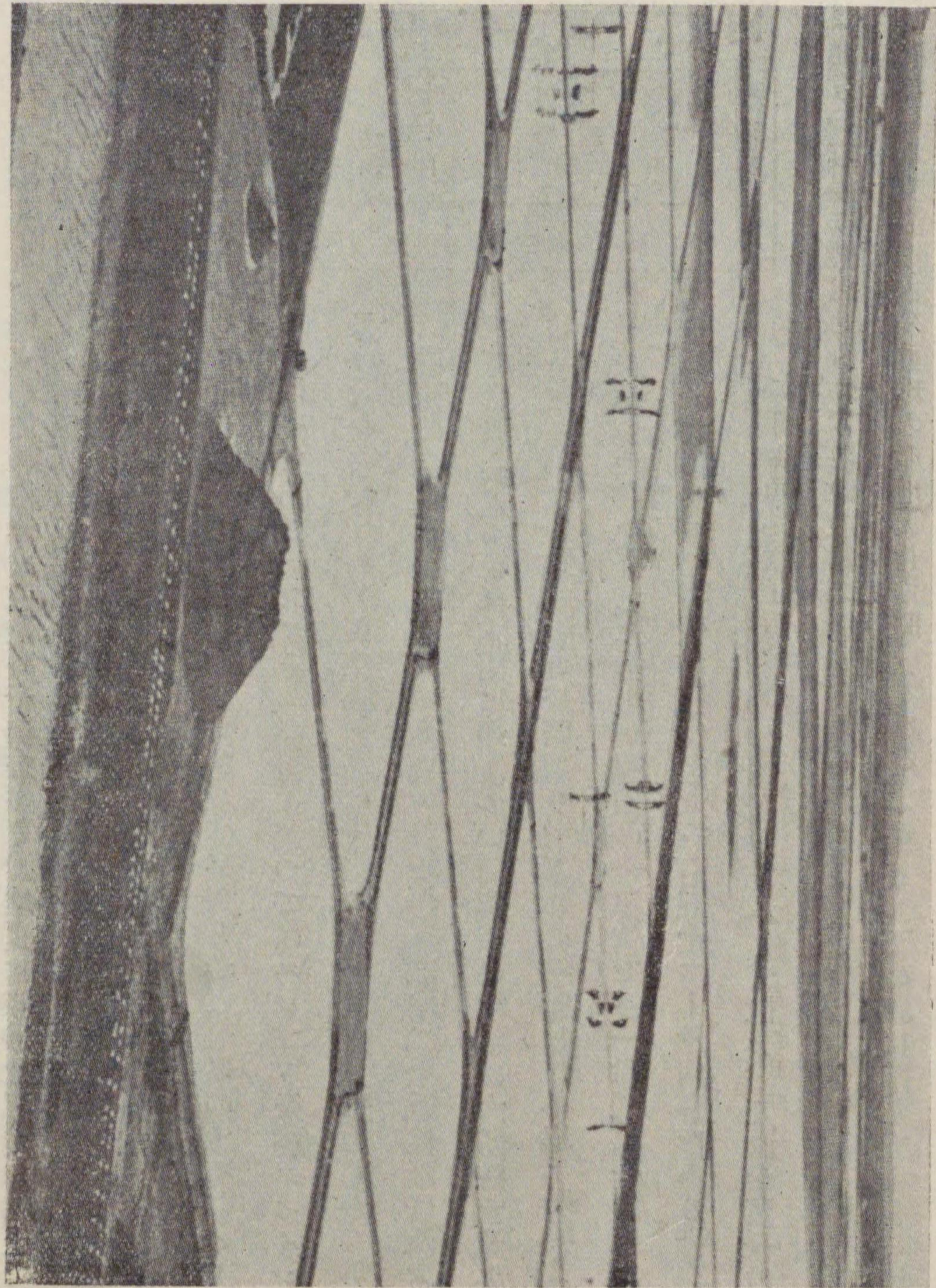
要説 海岸線が短かいので水産業はあまり盛では無いが、關東州その他に漁業が行はれ、又地形・氣候の關係上天日製鹽が盛で、食鹽はわが國に澤山輸出せられる。

魚族 近海の魚族はその種類が頗る多く、關東州の沿岸附近には殊に多い。鯛は遼東灣方面、鱈は海洋島附近、鯖・大刀魚は黄海方面、鱒は大連灣・熊岳城沖を主な漁場とする。その他ぐち・ひらめ・すいぎふか・にべ等多種類に上り、貝類にはかき・あはび・いたやがひ、海獸にはくちら・あざらし等もある。

漁業 漁場は遼東灣沿岸・關東州沿岸・直隸海峡附近及び貔子窩以東の黄海沿岸の四區に分れ、大連と熊岳城とを二大中心港とする。漢人の漁業は古くから發達してゐるが、關東州外は統計が無いので詳細は不明である。關東州内に於ては漁業者の戸數八千、人員二萬四千を算し、毎年五月熊岳城沖に於ける黄花魚漁業は最も有名である。日本人漁業者はまだ百戸に充たないが、發動機手繰網漁業の如きは遠く山東半島沿岸方面にも出漁して好成績をあげてゐる。捕鯨



海産物の網



田 籾 の 葦 子 籠

も亦日本人の經營する處で海洋島を根據地とし、毎年四月上旬から六月下旬まで行つて二十頭乃至三十八頭を捕獲してゐる。あざらしは毎年解氷期に流氷の上で捕獲し、年産一千頭餘に及ぶ。

| 漁 區 | 漁獲高(疋) | 價 格(圓) |
|-----------|------------|-----------|
| 黄海岸(關東州外) | 1.665.000 | 351.150 |
| 遼東灣岸(全) | 604.200 | 1.007.000 |
| 關 東 州 | 36.214.203 | 4.297.180 |
| 南 滿 河 川 | 1.225.650 | — |
| 北 滿 河 川 | 17.820.000 | — |

水 産 資 源 (昭和四年)

併し滿洲の漁業はまだ充分に發達してゐると云へないから、漁法の改良、漁港の設備、市場及び運輸機關の整備等今後に俟つべきものが多い。而もそうした處でその全産額は三千萬國民の需要を充分に充分とは云へないから、輸出能力は多く望を囑するわけに行かない。

淡水漁業 河川・湖沼の淡水魚も亦少くない。鴨綠江では河口から安東縣の上流二十五籽までの間が有名で、春夏の候に鯉・なまづ・白魚・うなぎ・はせ等が捕れる。遼河の下流では鯉・えび・なまづ・鮒が多く、松花江では鮎・草根魚・遍花魚・頭魚・鮭等があり、牡丹江に粗鱗魚・懷子魚があり、嫩江に鯉・鮎・草杆魚がある。これ等は夏には地方の市場に搬出せられ、冬は凍結のまま遠くシベリヤの内地にも輸送せられる。この外尙松花江の本支流は古來眞珠の産地として聞へてゐる。

製鹽業 海水を煮沸して製鹽することは太古から行はれてゐたが、現今の天日製鹽は明代に始まつたものである。遼東半島の沿岸は遠淺の干潟が多く、地質は細砂を混じた粘土であつて海水の蒸發を早め結晶を容易にする性質があり、空氣は一般に乾燥してゐて降水日數も少く、

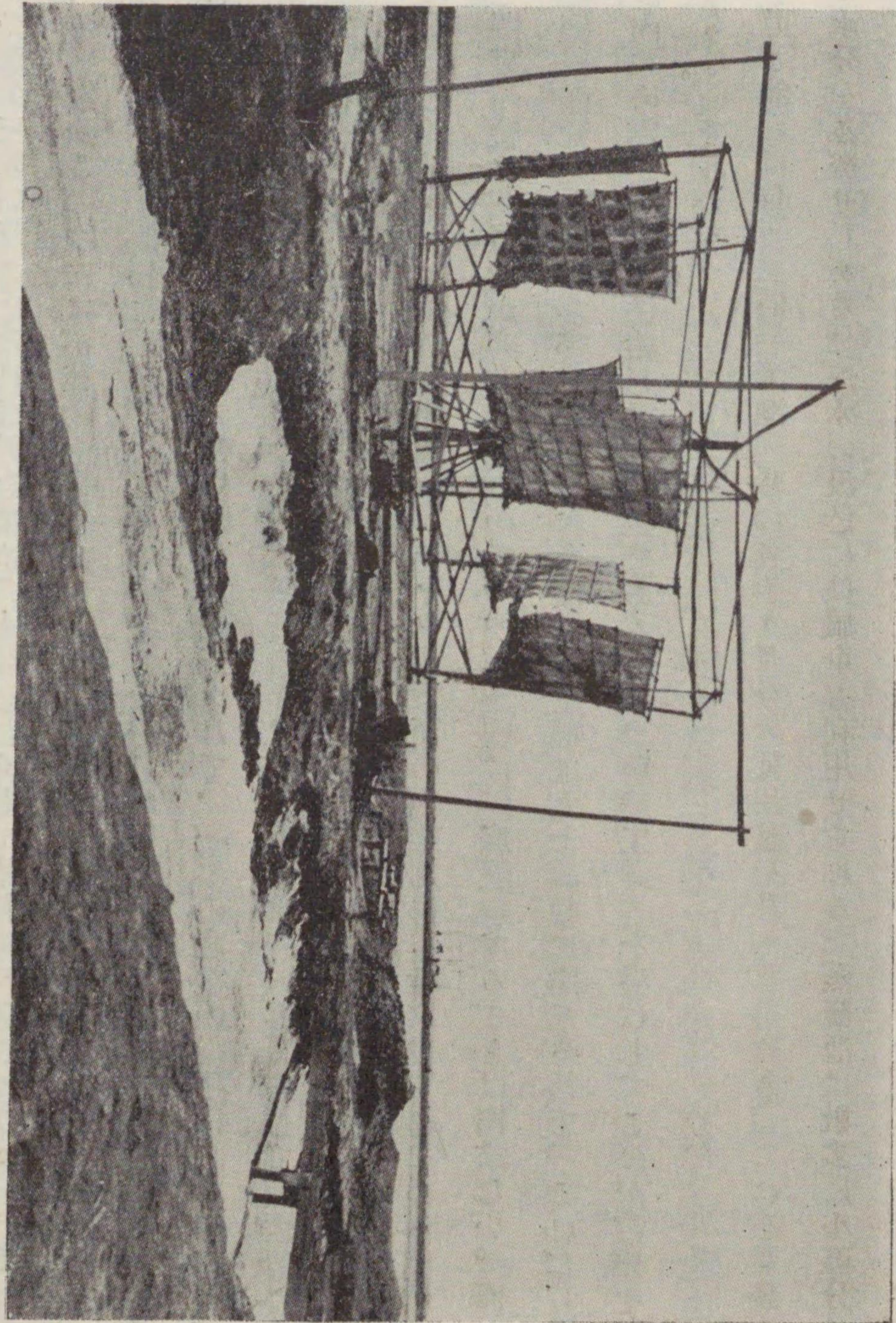
且北西風が強く夏は日照も強いので蒸發が盛で、天日製鹽には最も好適してゐるのである。随つて青島及び臺灣と共に世界の主要なる天日鹽產地となつてゐる。たゞその品質に至つてはエジプト及びスペインの産に及ばないので、わが關東廳當局は鋭意これが改良に努力しつゝある。

關東州内鹽田の總面積は六九方軒で年産額は二十五億瓦に及ぶ。洲外では營口・蓋平・復縣方面に最も多い。鹽田の構造は大體貯水池・蒸發池・結晶池の三區から成るのが原則で、これに附屬した外堤・畦畔・溝渠・堆鹽場等の設備を合したものが鹽田の一單位で、一附又は一灘と稱される。一灘の廣さは一定しないが大約百五十アール内外である。

貯水池には毎月二回の大潮の時に各半ヶ月分の使用量を注入して置き、これを蒸發池に入れて水分を蒸發せしめる。海水の汲込には風車も利用せられる。蒸發池は數多に小區分せられ、一區毎に五種乃至七種の落差があつて、凡そ一日毎に一段づゝ下の段に落して行き、比重が二

| 區 分 | 鹽 田 面 積 (ヘクタール) | 製 鹽 高(米噸) |
|-----------|--------------------|-----------|
| 日 本 人 經 營 | 5.351.9 | 165.676 |
| 漢 人 經 營 | 1.595.7 | 83.263 |
| 計 | 6.947.6 | 248.940 |

關東州天日製鹽(1929)



車 風 の 田 鹽

十度乃至二十三度に達すると結晶池に分注する。結晶池も亦蒸發池と同様の構造で、鹽の結晶が二種か三種の厚さになれば掻き集め、水分をたらしめて堆鹽場に運び、アンペラ等で掩ふて貯へる。無論この鹽には不純物もあるので、食卓鹽とするには更に精製しなくてはならない。

製鹽の時期は春と秋とで、七八月の雨期と十一月から三月までの結氷期とは休止する。日照及び風向等の關係の最もよいのは四五六の三ヶ月で、一年の産額の過半はこの時期に收穫される。州外の産額は約十二萬噸乃至二十四萬噸で、以前から政府の專賣として滿蒙以外に搬出せず、又他からの輸入も禁じてゐた。随つて關東州産のものは州内消費の外はわが内地及び朝鮮に輸出し、又ロシア領沿海州及カムチャツカ方面の漁業用にも仕向けられてゐる。

關東州鹽は生産費が非常に低いので、内地製鹽は到底競争することは出来ない。而して將來の鹽田開設見込地が全部完成したならば、生産額は九十萬噸に達する筈で、これだけあればわが内地の需要は全部供給し得る勘定であるから、曹達工業等を盛にしてこれが消化を計らねばならないであらう。

第五節 礦物資源

要説 礦物は農産と共に滿洲の二大資源とも稱すべく、種類は少いが分量は多く將來極めて有望である。石炭はその中最も有名で撫順・煙臺・本溪湖等から産し、中でも撫順炭田は世界屈指の大炭田で、最新式の採掘法を行ひ産額が頗る多い。又この炭田には多量の石油頁岩があつて、大規模の製油所が出来てゐる。鐵は鞍山・廟兒溝等から産し、鞍山及び本溪湖には製鐵所がある。その外金・銀・銅・鉛・亞鉛等の金屬礦物、菱苦土・白雲岩・石灰石・硅石・滑石・石綿・天然曹達・各種石材等の非金屬礦物を産し、中でも金・苦土・鐵等は最も有望と稱せられる。

概観 滿洲の礦業はその起原頗る古く、金礦業の如きは已に千八百年前、高句麗の時代から繁盛を極めた記録がある。併しその後の發達は遅々たるもので、近世に及んでは殆んど見るべきものがなかつた。それは清朝時代に一種の迷信から土地の開掘を抑制したことにもより、又教育が普及しないで一般人民の礦業知識の缺乏したことにもよる。殊に最近に至つては排外思想や利權回收熱、匪賊の横行などに禍された所も頗る多く、徒らに寶の持ち腐れの感が深かつた。

現時に於ける滿洲の礦業は、主としてロシア人及び日本人によつて開發せられたもので、殊に南滿洲に於ける鐵・石炭その他の礦業の驚くべき發展は、一に日本人の努力によるものであ

る。そこには豊富なる資金があり、植民地的な進取氣分の横溢があり、何れの鑛山にも尖端的な新様式と破天荒な大規模の操業とが見られるのである。
併し南滿方面にも尙未着手のものが少くなく、北滿及び蒙古方面に至つては調査も頗る不行届で、將來の發展は蓋し豫想外のものがあるであらう。

| 種類 | 産額(噸) |
|------|------------|
| 鐵鑛 | 832.224 |
| 硫鑛 | 3.028 |
| 銅鑛 | 840 |
| マンガン | 609 |
| 砂金 | 1.477 |
| 石油 | 10.040.652 |
| 頁岩 | 981.004 |
| 耐火土 | 29.016 |
| 耐火灰 | 53.664 |
| 滑石 | 25.726 |
| 石灰 | 116.925 |
| 石綿 | 988.489 |
| 石炭 | 110 |
| 方解石 | 20.000 |
| 矽 | 1.000 |

主要鑛産(昭和五年)

金 概して北滿洲に多く南滿洲には少ない。黒龍江本流の附近は、對岸のシベリヤと共に世界的に知られた金産地で、その埋藏量三百五十萬噸と稱せられ、年産約千五百萬圓であるが、産地は數百ヶ所に上り概して小規模で舊式である。南滿では鴨綠江及び松花江の上流、熱河省では熱河及び赤峰附近各地に知られてゐる。併し近年は警備が行き届かないため、折角採集しても匪賊のために掠奪されたりするので、經營困難に陥つて全く振はなくなつた。随つて今後治安の回復、交通の發達に伴つて頗る有望であるのは勿論、これまで調査不行届であつた地方に於て新發見も期待され、又奥地に於ては個人の蓄へて持つてゐるものだけでも夥しいものでは無いかと云はれてゐる。アーネルド氏によれば北滿の砂金埋藏量

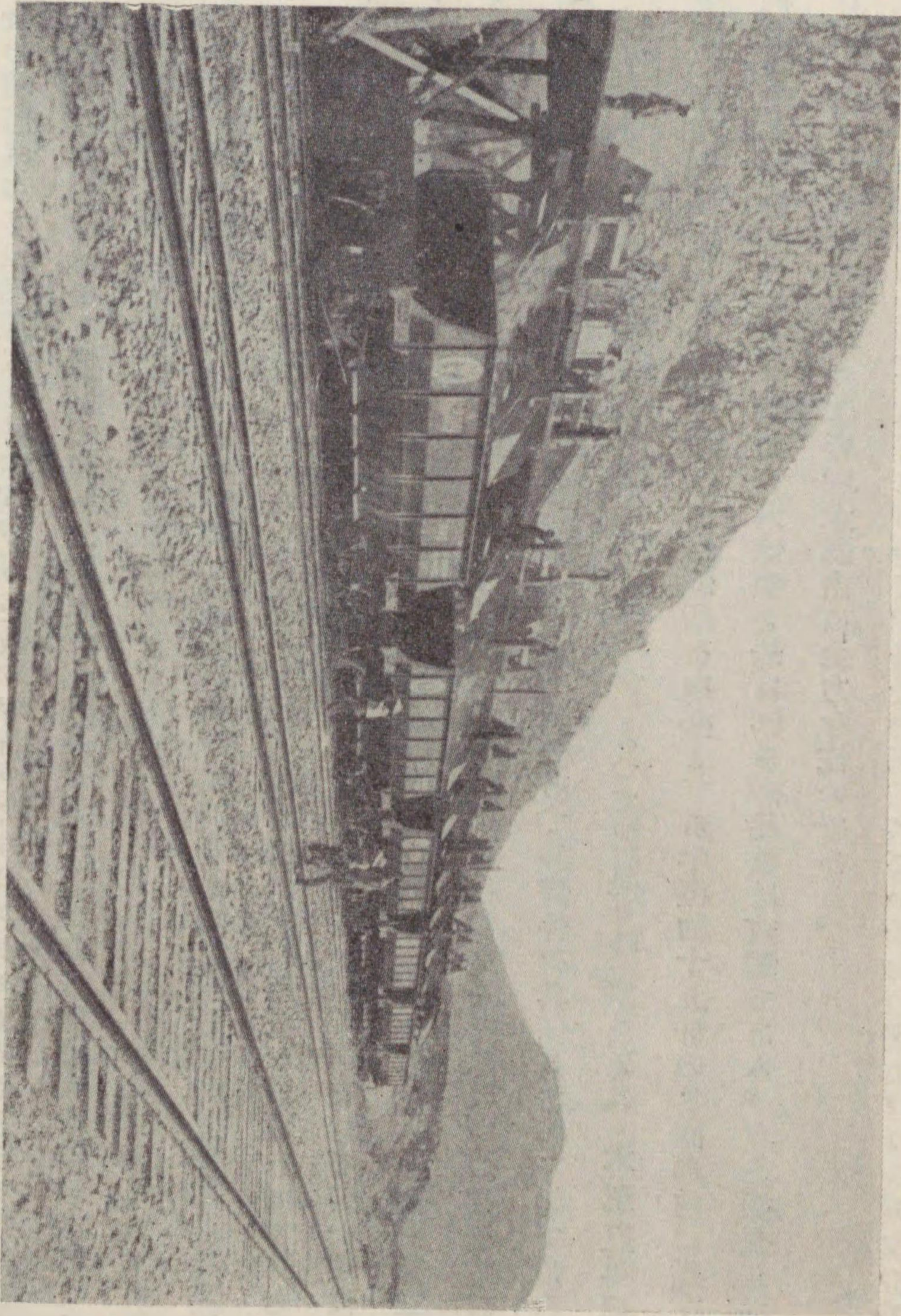
は三百五十萬噸、四十五億圓であるといふ。

金の鑛床は多くは始原代の片麻岩、前カンブリヤ又はカンブリヤ紀の硅質石灰岩・白雲岩等の地層中に存し、砂金も概して同一地域に現出する。近くわが地質調査所の手によつて大規模の探鑛が行はれることになつた。

鐵鑛 滿洲に於ける金屬鑛物の中最も重要なもので、その總埋藏量は約五億噸と稱せられる。これはアメリカ合衆國の二十分の一、イギリスの十分の一に過ぎないけれども、わが國一ケ年の需要額四百萬噸とすれば、百年以上を支へ得るわけであるから、決して少いとは云へない。産地は遼陽の南の鞍山・弓張山^{キウチヤウ}一帯、本溪湖附近の廟兒溝を主とし、その他鴨綠江上流、安奉線沿線及び關東州等の各地に散在してゐる。品質は概して良好ではないが、一方に石灰石の産地と接近してゐるので、製鐵事業の經營には極めて好條件を具備してゐるのである。

鞍山鐵山 この鐵鑛區は明治四十二年日本人によつて發見されたもので、大正五年以來日支合辦で採掘に着手した。鑛床は鞍山製鐵所を中心とする半徑約十五軒の半圓形内に點在し、櫻桃園以下十一鑛區に分れて埋藏量四億噸と云はれるが品質は貧鑛である。現在採掘してゐるのは西鞍山・大孤山・王家堡子等で、大孤山に主力を注いでゐる。

大孤山は鞍山驛の南東十二軒にあつて、奇景を以て名高い千山の登山口にもあたつてゐて、



所込鐵礦の山景

本線から電車を通じてゐる。地質は硅岩と花崗岩とに挟まれた片岩の中に赤鐵石英片岩が縞の様になつてゐて、多くの陽起石と少量の菱鐵方解石を含み、平均含鐵品位三五%乃至三六%である。併し褐鐵礦を多く含んだ富鐵帯もある。

山の中腹以上は全部鐵礦と云つてもよい程で、液體酸素によつて爆發を行ひ、頂上から數段の鉢巻き段を設けて切り崩してゐる。その採鐵能力は一日二千五百噸である。

廟兒溝鐵山 本溪湖の南東にあつて、附近の溪谷一帯に擴がつて十二ヶ所の鐵區があるが、採掘に着手してゐるのはその一部である。明治四十四年以來日支合辦の會社が出来て經營してゐる。鑛床は雲母片岩及び花崗片麻岩中に層狀をなし、含鐵量六〇乃至六五%の磁鐵礦で、埋藏三百萬噸と稱せられ一年約六萬五千噸を採掘してゐる。外に品位三五%内外の貧鐵數億噸を埋藏するが、これは現今採掘してゐない。

其の他の金屬鑛物 銅鑛は多く接觸鑛床又は交代鑛床として現出し、黃銅鑛・班銅鑛・硫銅鑛等の稍良質のものがある。本溪湖の東方にある馬鹿溝、間島の天寶山をはじめ各所に分布するが、近年銅價暴落のため企業價値を失ひ、殆ど休止の状態にある。

鉛鑛も十數ヶ所に發見されてゐるが、奉天省青城子の外は着手されてゐない。硫化鐵鑛は古來綠礬製造用に供せられたが、現在は硫酸製造用として採掘されてゐる。マンガも若干發見

されたが鑛量は乏しい。蒙古方面に金・銀・方鉛鑛等があるが調査なほ不十分である。
石炭 石炭は鑛産物の首位を占むるもので、その分布も極めて廣く、埋藏量も約三十億噸と稱せられるが、今後調査の進むにつれて更に大量の發見があるかも知れない。地質は色々であ

| 地方別 | 炭田名 | 埋藏量(千噸) | 年出炭量(千噸) |
|-----|-----|-----------|----------|
| 滿線 | 煙臺 | 40.000 | 178 |
| 同安 | 大疙 | 32.000 | 305 |
| 撫順 | 牛心 | 100.000 | 582 |
| 奉天 | 撫阿 | 10.000 | 41 |
| 同撫 | 金溝 | 915.700 | 7.259 |
| 奉天 | 新北 | 10.000 | 50 |
| 同吉 | 老頭 | 1.110.000 | 9 |
| 東支 | 札賚 | 20.000 | 509 |
| | 諾爾 | 15.000 | 20 |
| | | 300.000 | 5 |

主要炭田

富なものが多い。

現今出炭量の最も多いものは撫順で、本溪湖・北票・大疙等はこれに次である。この中大疙

中生代の石炭はジュラ紀層に屬し、奉天省及び吉林省の各地にある。西安附近の大疙等はその一例で炭質は亞無煙炭又は有煙炭に屬する。次に第三紀の石炭は漸新世層中に介在し、褐炭又は瀝青炭で炭質は優良である。この中には撫順・新邱などの如く炭量の豊

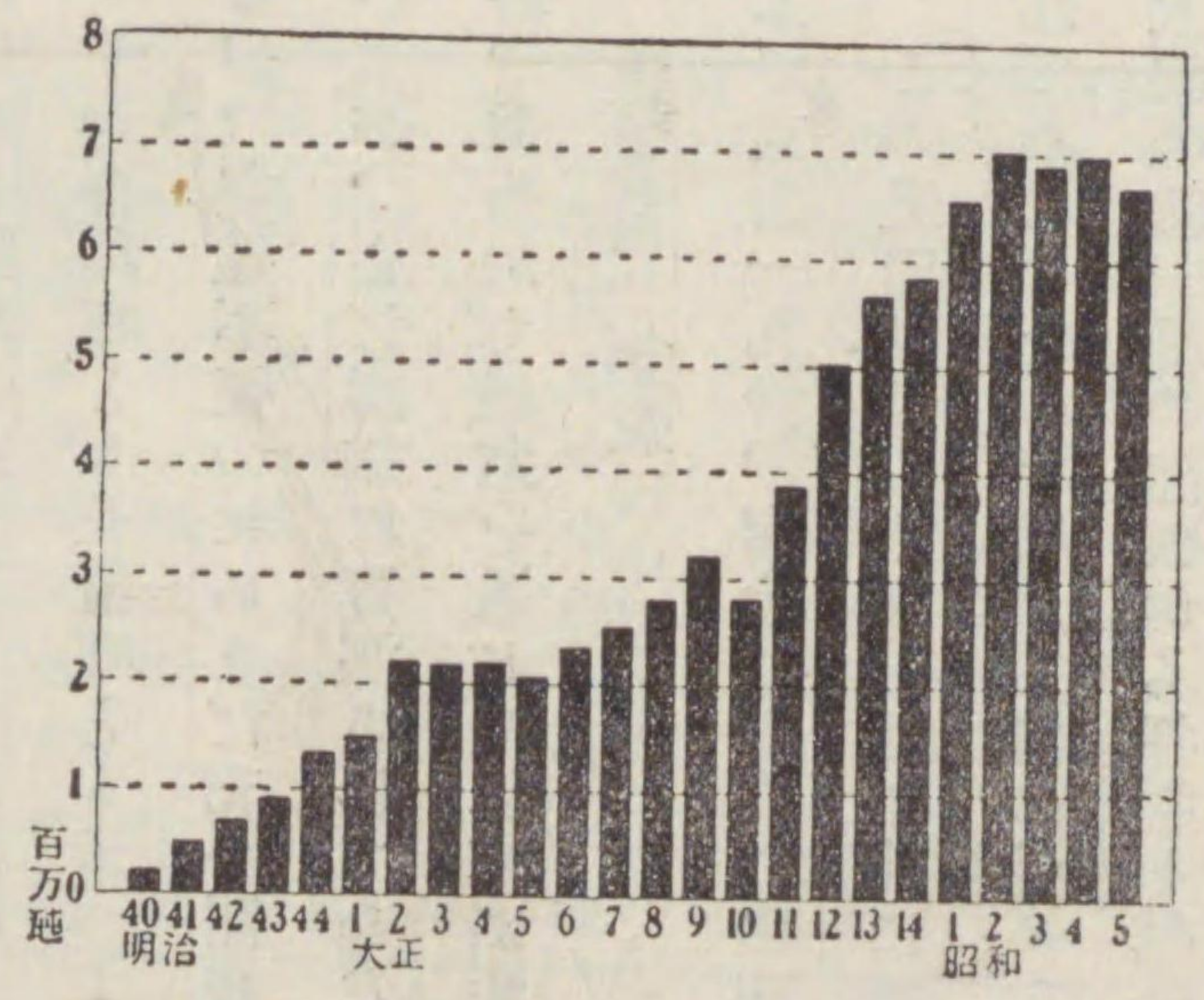
礫は主要炭層一枚、厚さ平均六米である。滿洲里附近の札賚諾爾炭田は層厚第一が二米半、第二が八米半、第三が十五米で、東支鐵道が採掘權をもつてゐるが、水害と炭質粗惡とのために撫順炭に壓迫されてゐる。吉林省の穆稜は露支合辦事業、鶴立崗は黑龍江省營であるが埋藏量一千六百萬噸とも五億噸とも云つてゐて、炭層は六米乃至九米のもの六層あつて頗る有望であるが、交通不便のためまだ充分開發せられない。又熱河省新邱炭田は埋藏量撫順以上であるといふが、まだ詳細に實測されてゐない。北票炭田の炭質は粘又は不粘結性の瀝青炭で品質良好、錦州から鐵道を通じて以來出炭量も多くなつた。

撫順炭田 諸炭田中最も重要なものは撫順炭田である。奉天の東方約三二軒、渾河の南岸に沿ふて東西一九軒、南北二軒内外の狭長な地帯で、滿鐵の一大寶庫である。

この炭田は恐らく六七百年前に發見されたもので、高麗人によつて陶器製造の燃料に供せられてゐた。その後明から清の始めにかけて支那人によつて小規模に稼行せられてゐたが、清の太宗の時一種の迷信から採掘を禁せられ、明治三十四年になつて始めて解禁せられるや、間もなくロシア人の經營にうつり日露戰役の結果その採掘權は滿鐵會社に繼承せられたのである。

地質は第三紀層で東西の走向を有し、北に向つて二十度乃至四十度の傾斜をなしてゐる。隨つて南縁部は表皮の地層も薄く露天掘に適するが、北縁部は地下深所に存在するので堅坑を穿

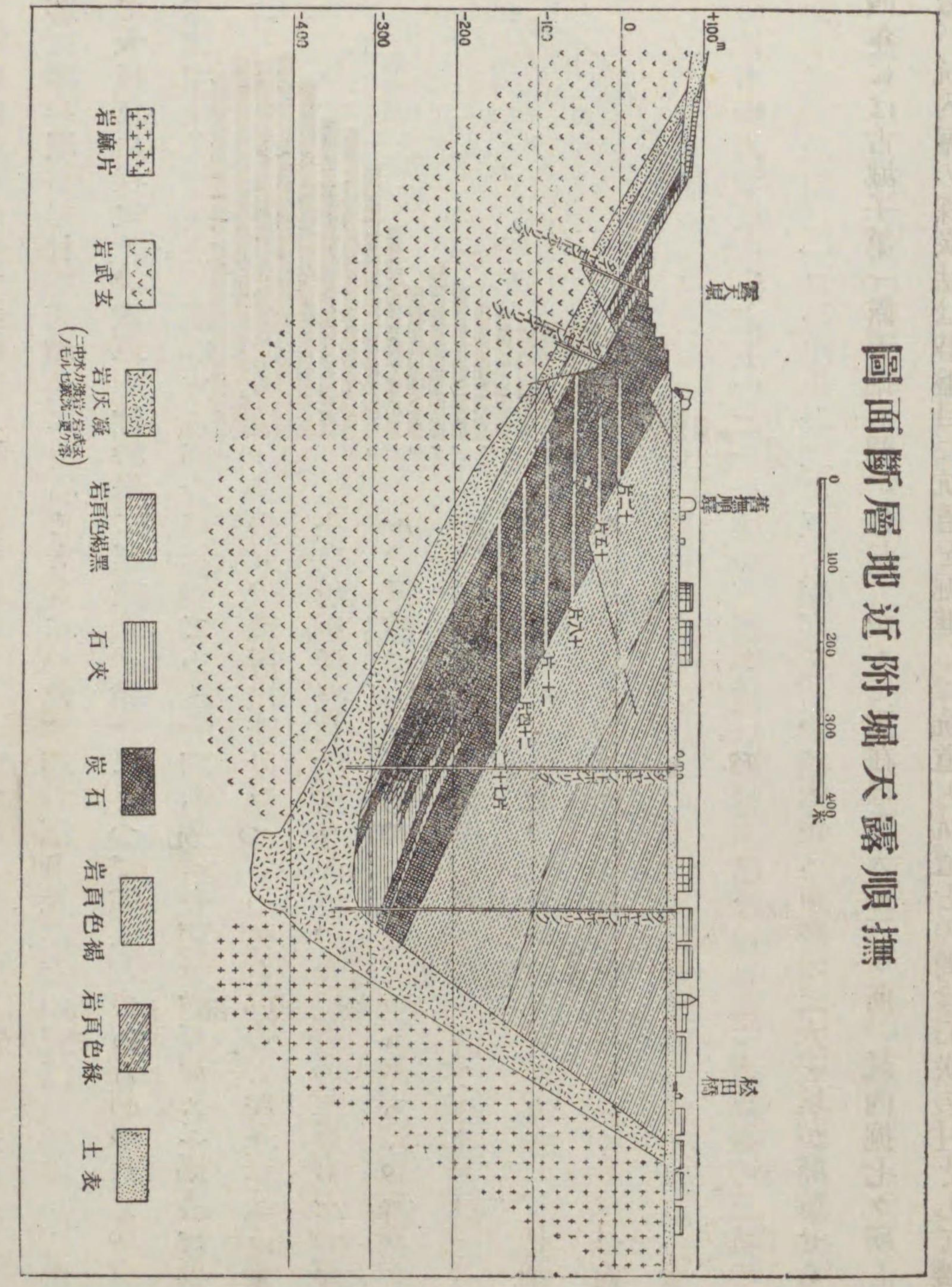
たなければならぬ。炭層は上部下部の二層あり、上部主要層は夾石を除いて最厚百三十米に達し、東に進むに従つて薄くなり、阿金溝では六米内外となる。



撫順炭出炭累年比較圖

炭質は褐炭に近い漆黒色の瀝青炭で、コークス用には不適當であるが燃料炭としては極めて優秀である。わが燃料研究所に於て全国各地及び滿洲の石炭五十九種について研究した結果によると、灰分の最少は撫順東郷炭で三・〇四%、揮發分の最多は撫順カバリで五二・五二%、固定炭素は撫順炭が第二位で五五・〇四%、發熱量も第二位で七七・三三カロリーである。かく揮發分の非常に多いために、低温乾溜によつて石油を蒸出するに適してゐることは注意すべきである。

採炭所は始め千金寨・楊柏堡・老虎臺の三坑のみであつたが、後に大山・東郷の二大堅坑が開鑿せられ、大正四年には古城子第一露天掘も開かれた。かくて現在は露天掘三ヶ所、坑内掘七ヶ所となつてゐる。坑内掘の採炭法は碁盤目に坑道を掘進し、坑道と坑道との間は石炭の柱として残して置



撫順露天掘附近地層断面圖